第３章　伊場大溝の調査成果

１　伊場大溝の層位

(1) 伊場大溝の堆積状況（Fig.67）

伊場大溝の埋土については、伊場遺跡の発掘調査時に各層位に付与された名称がその後の調査でも継続的に用いられている。今回の調査においても、それに従っているが、大溝の堆積状況は調査地点によって若干異なっており、細部は必ずしも一致するものではない。今回の調査で用いた土層には本調査独自のものが一部あり、過去の大溝の調査とは一致しない部分がある。今回の調査では、大溝の主軸にほぼ直交する３本のトレンチで土層の堆積状況を確認した。大溝の北西から順にTr-1、Tr-2、Tr-3 と称した。Tr-1 と Tr-2 の距離は約 27.7 ｍ、Tr-2 と Tr-3 の距離は約 20.5 ｍの距離である。伊場大溝の層位をⅧ層、Ⅶ層、Ⅴ層、Ⅳ層、Ⅳ、Ⅲ層の６層に識別した。今回の調査でも明確にⅥ層は確認できていない。Ⅵ層は伊場遺跡の調査においてⅦ層とⅤ層の間に挟まれた薄い砂層とされ、Ⅶ層とⅤ層を分割する鍵層とされている。これまでの梶子遺跡９・13・21 次調査や鳥居松遺跡５次調査において検出した大溝でもⅥ層は確認できておらず、伊場遺跡内において部分的に堆積した層位と考えられる。また、大溝最下層とされるⅨ層については、今回の調査では確認できなかった。

Ⅷ層　Ⅷ層は伊場大溝の Tr-1、Tr-2 の両岸と Tr-3 の南岸で確認した古墳時代中期後葉（５世紀後葉）から古墳時代後期前半（６世紀前葉）の堆積層である。灰色系、褐色系、黒色系のシルト層を主体として、腐植物を多く含む地層と交互（ラミナ状）に堆積している。Tr-1、Tr-2 では北岸で明確にオーバーハングする。土層図に示すとおりⅧ層の堆積は、Ⅶ層の大溝によって大きく削り取られている。Tr-3 の北岸では、Ⅷ層は確認できなかった。Ⅷ層の完掘時点での大溝の最大幅は Tr-1 で 19.4 ｍであるが、最小幅の Tr-2 では約 16.0 ｍである。ほとんど蛇行はなく直線的であるが北西端でごくわずかに北へ湾曲する。特筆すべきは、南岸北西端においてⅧ層以前の枝溝(SD315)、Ⅷ層の枝溝（SD314）を確認している。SD315 は緩やかに北へ湾曲しながら西へ延びると推定される。SD314 は北岸南東部に北東へ延びるⅧ層の枝溝と考えられる。これらの溝は平面的には非常に認識し難く、その延長線上の既往調査では確認されていない。Ⅷ層の最下層からは３世紀代から４世紀代の遺物も出土するが、いずれも数は少なく小片が多いことから、大溝形成以前の遺物が混入したものと考えられる。

Ⅶ層　Ⅶ層は、灰色系、褐色系シルトと灰色砂が交互に堆積した層であり、この層が大溝の主たる底面の堆積となる。Ⅷ層の堆積後、若干の流路の更新があったと考えられ、大溝の南岸は Tr-3 の土層断面でⅧ層の時点から約 2.1 ｍ東へ移動している。Ⅶ層の埋土には砂が比較的多く含まれ、部分的に層をなしていることから、かなりの水量があったことが推定される。溝はほぼ直線的である。伊場遺跡の調査において確認したⅥ層は、過去の調査と同様に確認できなかったことから、Ⅶ層の最上層に堆積した砂層の一つと考えられる。大溝底面（Ⅶ層下面）は、部分的に大きく抉られており、かなり凹凸があったと考えられる。既存調査ではあまり類例がないⅦ層において貝塚(SS13、

SS14）が形成されている。Ⅶ層中には古墳時代後期後半（６世紀後半）から飛鳥時代（７世紀）の遺物を多数内包する。特に最下層には、部分的ではあるが土器が大溝の底部に貼り付くような状態で大量に出土した。特に密度が高かったのが、窪み状の周辺であった。鳥居松遺跡５次調査では、Ⅶ層中で流路の更新（Ⅶb 層とⅦa 層）があったことを確認している。今回の調査では、現地調査時には平面的に加えて、土層断面でも認識できなかったが、遺物の出土位置からⅦ層中において、部分的に流路の更新があったとも考えられる。

Ⅴ層　Ⅴ層は、有機物を含む褐色、灰色系シルトの堆積であり、有機物を含むのが顕著である。土器、木製品、貝、獣骨など多くの遺物を内包する。奈良時代前半（８世紀前葉から中葉）に堆積した層である。Ⅴ層中には様々な規模の貝塚（SS03、SS08 ～ SS11）が形成されている。遺物や貝塚は南岸に集中する傾向がある。Ⅴ層時点から大溝は急激に幅を狭め、浅くなっていく。Ⅴ層では溝は、ほぼ直線的であるが南東隅で微妙に南へ内彎気味になる。

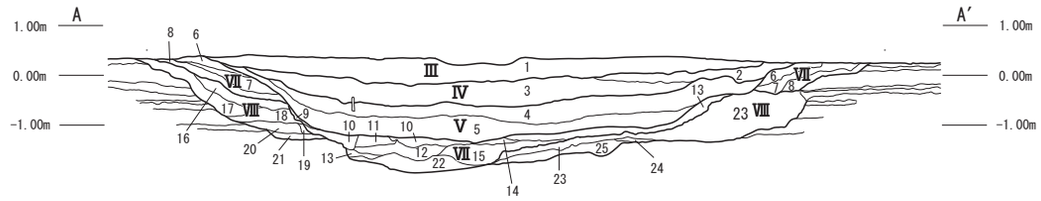
Ⅳ層　Ⅳ層は有機質の多い褐色系、灰色系シルトの堆積で、奈良時代後葉（８世紀後葉）から平安時代前葉（10 世紀前葉）にかけて堆積が進んだ層である。Ⅴ層と比較してさらに浅くなり、この頃にはほとんど流れがない川になり、徐々に湿地化が進んでいったと考えられる。大溝の南岸では、奈良時代後葉の貝塚（SS01、SS02、SS04 ～ SS06）が形成されていたほか、南岸北西部では、平安時代前葉（９世紀後半）の木簡、墨書土器を多数含む、大量の遺物を集積した遺構（SX01）を検出した。Ⅳ層でも溝は、ほぼ直線的であるが南東隅で微妙に南へ内彎気味になる。

Ⅲ層　Ⅲ層は、黒色を帯びた未分解の植物片など有機物を大量に含む褐色系粘質土層である。梶子遺跡 13 次調査においては、灰色系のⅢa 層、褐色系のⅢb 層と分離されているが、今回の調査では、明確に認識、区別できなかった。また、木簡を含む古代の遺物がほとんどを占め、上下の層位の時期から平安時代中葉（10 世紀中葉～ 11 世紀）に比定される。この層の堆積時期の下限を直接的に示す遺物が出土しておらず、時期の判定が困難である。この時点における大溝は、かろうじて溝の形状を保っているが、ほぼ埋没し植物が大量に繁茂する湿地のような状態になっていたと推定される。伊場遺跡群の低地の大部分が湿地化していたと考えられる。遺物量は少ないが、山茶碗や山皿、内耳鍋など中世の遺物を含む。堆積年代は遺物の時期から平安時代後葉から鎌倉時代（12 世紀～ 13 世紀）を中心に堆積したと推定される。

Ⅱ層　Ⅱ層は、既往調査では、大溝の埋土上に堆積した緑灰色粘土層で、現代の盛土施工以前に耕作されていた、水田耕作土層とされている。

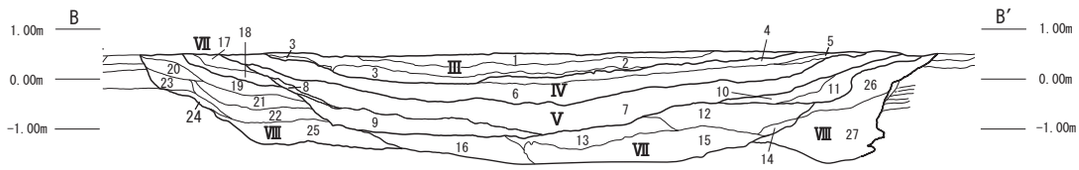
Fig.66　大溝トレンチ２　土層堆積状況

トレンチ１



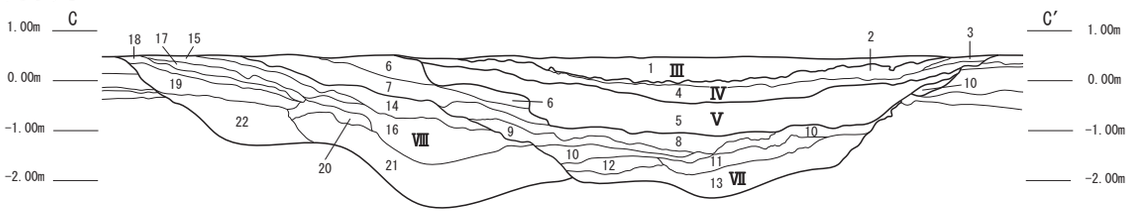
1.黒褐色腐植土　7.5YR 2/2～2/1
2.黒褐色粘質土　10YR 3/1　（土器、木製品、獣骨含む）
3.褐灰色粘質土　10YR 4/1～3/1　（下位に黄灰色細砂　2.5YR 4/1～3/1）
4.黒褐色粘土　2.5Y 3/1（木製品含む）
5.黄灰色シルト　2.5Y 5/1
6.灰黄色砂質シルト 2.5Y7/2（褐灰色シルト　10YR5/1ブロック30%混入）
7.灰オリーブ色細粒砂 5Y6/2（黄灰色シルト　2.5Ｙ5/1 ブロック20%混入）
8.浅黄色細粒砂 5Y7/3（黄灰色シルト　2.5Ｙ5/1 ブロック20%混入）
9.褐灰色シルト 10YR4/1　（灰黄色細砂　2.5Y7/2　一部ブロック、一部縞状に30%混入）
10.褐灰色粘質シルト（10YR5/1+褐灰色シルト 7.5YR4/1　互層　（腐植物10%）
11.黄灰色シルト　(2.5Y 5/1より7.5YR4/1　5%少ない)
12.褐灰色シルト10YR4/1　（灰白色中砂　10YR7/1 、黒色腐植物 10YR2/1 10%）
13.褐灰色砂質シルト10YR4/1 ＋灰白色中粒砂10YR8/2（6:4）
14.褐灰色中～粗粒砂10YR5/1（φ20mm以下の腐植物5～10%）
15.黒褐色砂質シルト10YR3/2（灰白色中粒砂　10YR8/2縞状に20%。腐植物20%）
16.黒褐色砂質シルト10YR3/1＋暗褐色シルト10YR3/3互層
（灰黄褐色細粒砂 10YR6/2が厚さ10mm以下で縞状に混入、腐植物5%以下）
17.黒褐色砂質シルト10YR3/1＋暗褐色シルト10YR3/3互層
（灰黄褐色細～中粒砂 10YR6/2 が下部にラミナ状に堆積）
18.黒褐色砂質シルト10YR3/1＋暗褐色シルト10YR3/3（灰白色砂質シルト 10YR7/1がラミナ状に10%）
19.黒褐色砂質シルト10YR3/1＋暗褐色シルト10YR3/3（灰白色砂質シルト 10YR7/1がラミナ状に20%）
20.黒褐色砂質シルト10YR3/1＋暗褐色シルト10YR3/3＋灰白色砂質シルト 10YR7/1
21.灰黄褐色粗粒砂10YR6/2（黒色細粒砂　10YR2/1　30%）
22.黒褐色粘質シルト10YR3/1（灰黄色中粒砂　2.5Y7/2縞状に20%、腐植物15%）
23.褐灰色粘質シルト10YR4/1＋灰白色粗～中粒砂10YR8/2+灰黄褐色細粒砂～砂質シルト10YR5/2互層
（腐植物5～10%）
24.褐灰色粘質シルト10YR4/1＋灰白色粗～中粒砂10YR8/2＋灰黄褐色細粒砂～砂質シルト10YR5/2斑状
（腐植物5%）
25.褐灰色粘質シルト10YR4/1＋灰白色粗～中粒砂10YR8/2＋灰黄褐色細粒砂～砂質シルト10YR5/2
（一部渦を巻くように乱れる）

トレンチ２



1.褐灰色粘質土 10YR6/1　（灰白色粘土 5Y7/2ブロック微量、腐植物少量混）
2.褐灰色粘質土 10YR6/1　（灰白色粘土 5Y7/2ブロック多量、腐植物少量混）
3.褐灰色粘質土 10YR4/1　（灰白色粘土 5Y7/2ブロック少量、腐植物多量混）
4.灰白色シルト 10YR7/1　（腐植物微量混）
5.灰白色シルト 10YR8/2　（腐植物微量混）
6.灰白色シルト 10YR7/1　（有機物微量混）
7.褐灰色シルト 10YR6/1　（有機物少量混）
8.褐灰色シルト 7.5YR6/1
9.褐灰色シルト 10YR6/1　（有機物少量混）
10.灰白色シルト 10YR7/1　（有機物少量混）
11.灰白色シルト 10YR7/1　（有機物微量混）
12.灰黄褐色シルト 10YR6/2　（灰色シルト 5Y6/1がラミナ状に堆積）
13.灰黄褐色シルト 10YR6/2（灰白色シルト 5Y7/1がラミナ状に堆積）
14.青灰色シルト 5PB5/1　（灰白色砂質シルト10YR7/1 ラミナ状）
15.褐灰色シルト10YR4/1　（灰白色シルト10YR7/1ブロック少量混）
16.灰色砂質シルト N5/　（炭化物少量混）
17.青灰色シルト 5PB5/1　（炭化物微量含む）
18.青灰色シルト 5PB6/1（炭化物微量含む）
19.灰白色シルト 2.5Y8/2　（灰白色シルト10YR7/1ブロック少量混）
20.褐灰色シルト 10YR6/1（炭化物微量混）
21.黄灰色シルト 2.5Y6/1（炭化物少量混）
22.灰白色シルト 10YR7/1
23.青灰色シルト 5PB6/1（灰白色シルト10YR7/1ブロック微量混）
24.灰白色シルト 10YR7/1
25.灰色砂質シルト N5/（灰白色 5Y8/2粗砂、炭化物少量混）
26.灰白色シルト　10YR7/1　（黄灰色 2.5Y5/1シルトブロック少量混）
27.暗青灰色シルト　5PB4/1
＋褐灰色砂質シルト10YR6/1＋灰白色 10YR8/2砂質シルト(ラミナ状を呈する)

トレンチ３



1.極暗褐色シルト 7.5YR2/1
(大部分は腐植物が少なくしまるが、底部付近は腐植物が多くしまりがなくなる)
2.灰白色細砂 10YR7/1＋灰黄褐色砂質シルト10YR5/2の互層
(腐植物は少ない。Ⅲ層とⅣ層の漸移層)
3.褐灰色砂質シルト 10YR4/1　(腐植物少ない。Ⅲ層とⅣ層の漸移層)
4.褐灰色シルト 7.5YR5/1　(腐植物と骨粉少量)
5.褐灰色粘質シルト 10YR4/1　(骨粉4層より多い。貝殻微細片少量、腐植物多量)
6.黄灰色砂質シルト 2.5Y5/1　(ややしまる)
7.黄灰色砂質シルト 2.5Y5/1 ＋浅黄色細粒砂 2.5Y7/3　(ややしまる)
8.褐灰色シルト 10YR5/1　(腐植物少量含)
9.褐灰色砂質シルト 10YR6/1　(灰白色細砂 10YR8/2ブロックと腐植物を各少量含)
10.灰白色中粒砂 10YR7/1＋黄灰色シルト 2.5Y5/1　(腐植物少量含)
11.褐灰色砂質シルト 10YR4/1＋灰白色中～細粒砂 10YR8/1
(炭化物粒と腐植物各少量含)
12.黄灰色粘質シルト 5Y5/1＋7.5Y6/1灰色細粒砂　(炭化物粒少量)
13.灰色粘質シルト N5/＋灰白色中粒砂 10YR7/1
14.灰黄色砂質シルト 2.5Y6/2＋灰色粘土 10Y6/1　(しまりが強い)
15.にぶい黄橙色砂質シルト 10YR7/3
(黄灰色粘質シルト 5Y6/1少量含。しまりが強い)
16.黒褐色粘質シルト 10YR3/1＋灰色砂質シルト N6/
(灰白色中粒砂 10YR7/1少量、腐植物微量含)
17.灰色粘質シルト 5Y4/1
(黒褐色粘質シルト 10YR3/1と灰白色砂質シルト 10YR7/1のブロックを各少量含)
18.灰白色砂質シルト 10YR7/1
(黒褐色シルト　10YR3/1ブロック少量含)
19.褐灰色粘質シルト 10YR5/1＋灰白色砂質シルト 10YR7/1
(ラミナ状を呈する)
20.灰白色砂質シルト 10YR7/1＋褐灰色粘質シルト 10YR5/1
(ラミナ状を呈する。19層に似るがラミナの連続性がない)
21.黒褐色粘質シルト 10YR3/2
(灰白色細～中粒砂 10YR7/1が小～中量含)
22.黒褐色粘質シルト 10YR3/1
(腐植物少量含)

0　1:150　5m

Fig.67　伊場大溝土層断面図

２　伊場大溝形成以前の遺構と遺物

(1) 概要

伊場大溝形成以前の溝と考えられる溝を検出した。SD315 の東岸には護岸施設を有し、Ⅷ層に合流あるいはⅧ層に切られ、淘汰されてしまったと考えられる。

伊場大溝の下層であるⅧ層やⅦ層を中心に弥生時代から古墳時代前期の遺物が出土している。これらの遺物は大溝の形成に伴う激流により混入した遺物の可能性が高い。

(2) 溝跡（SD315）

BE53・54 ～ BF53・54 グリッド、トレンチ１の南西端の南側に位置する。検出長 11.7 ｍ、最大幅 8.7 ｍを測り、南に湾曲しながら西方へ調査区外に延びる。出土遺物などからⅧ層以前に相当する。SD315 の南岸には護岸と考えられる構造物を検出しており、特に合流部は頑丈に構築されている。これは北西または西方から屈曲する際、南岸が水衝部となり、浸食を回避するためと考えられる。

(3) 出土遺物

SD315　土器１点、構造物の部材２点を図示した。１は、SD315 から出土した壷体部。体部は球形を呈しており、外面をミガキ調整している。２・３は護岸材である。２は加工板。比較的丁寧に加工されており、転用されたものと考えられる。護岸の横板に使用されていた。３は杭材。頂部は折れたか腐食しており本来の長さは不明である。先端のみを加工している。横板の固定に穿たれていた。

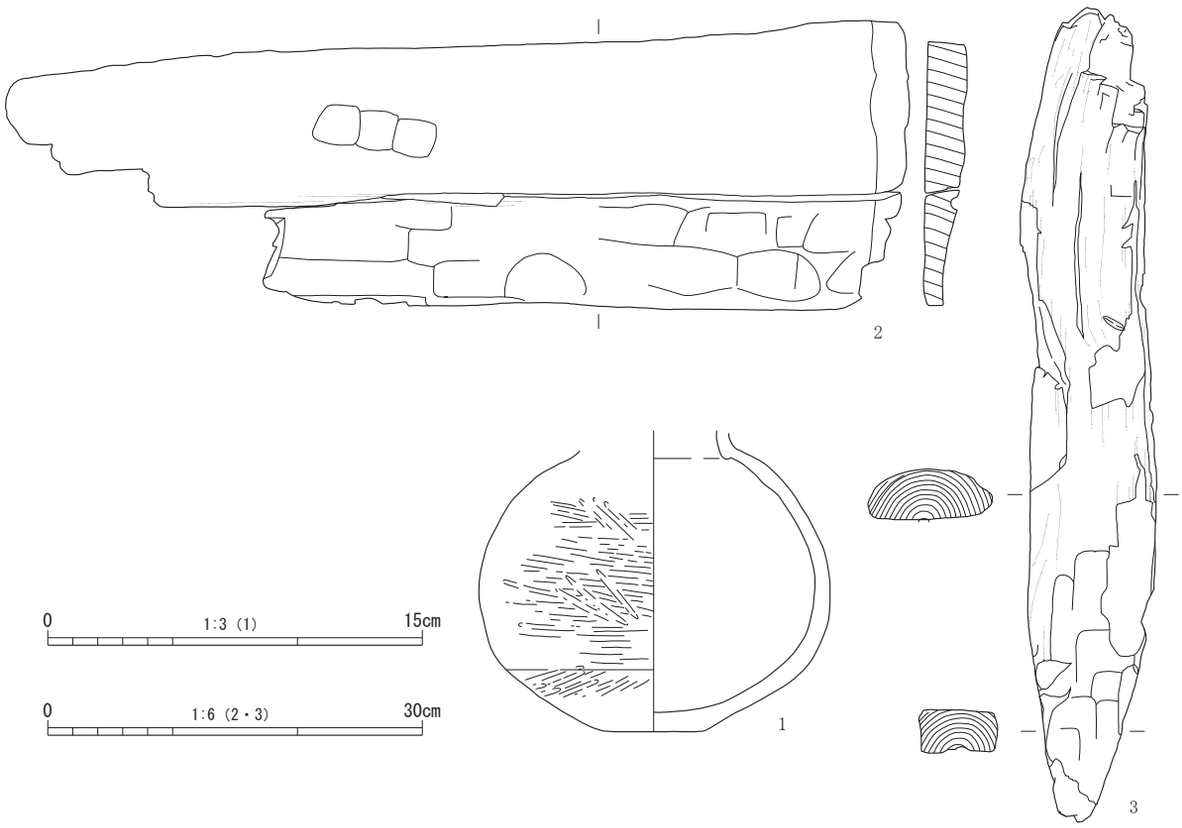


Fig.68　SD315　出土遺物

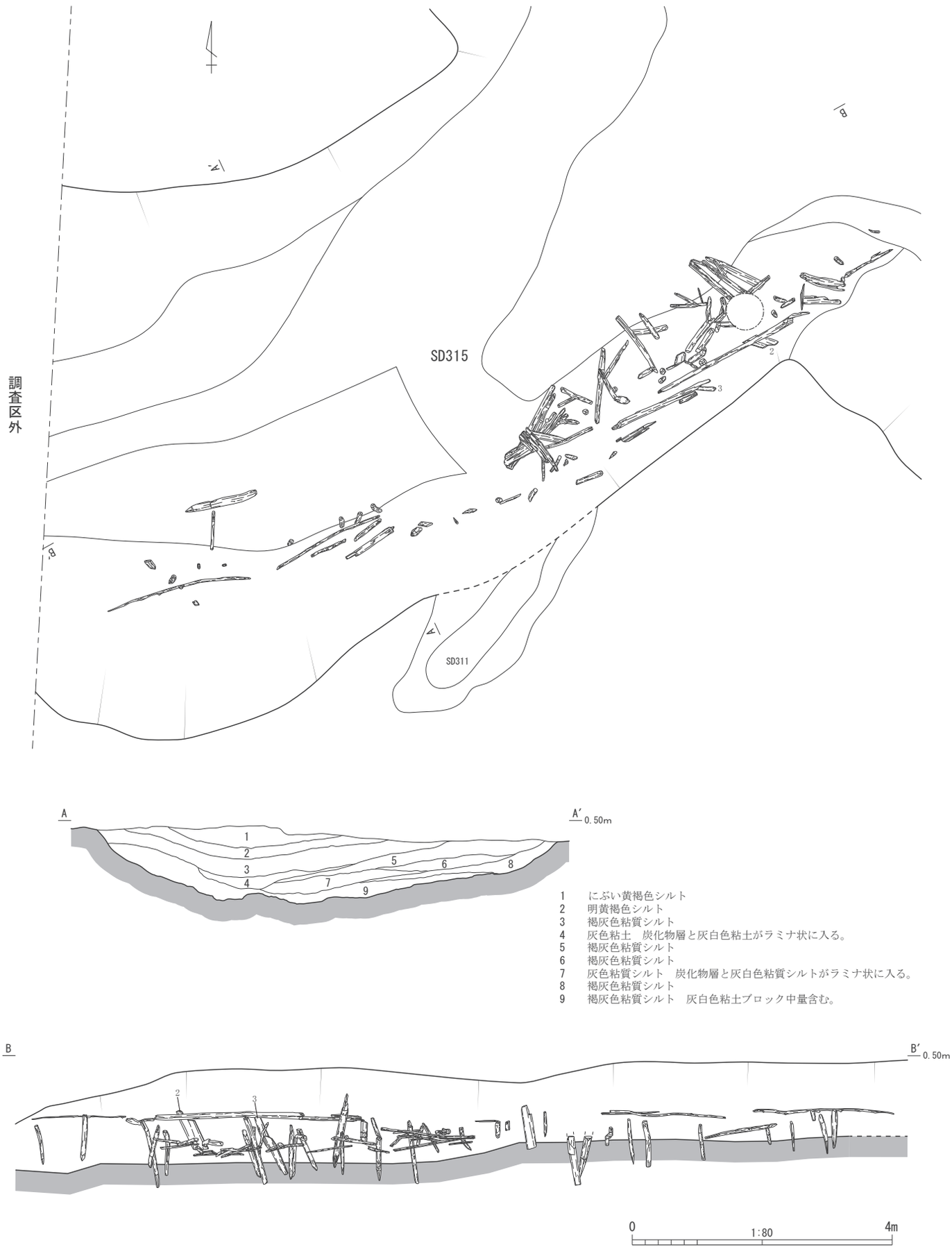


Fig.69　SD315　実測図

大溝形成以前の遺物　Ⅷ層、Ⅶ層中から出土している。出土状況に傾向は窺えず散在的に出土しているが、各層の下位での出土が多い。また、多くは摩耗しており、数は少ない。７点を図示した。

弥生土器　１～４は弥生土器である。１は複合口縁の壷である。口縁部の内外に羽状の刺突が施されている。2は折返口縁壷。口縁端部上面に波状文が認められる。３・４は器台で口縁部は湾曲して端部に面を有する。４は２段に３方向計６箇所の円形のスカシ孔を有する。これらは弥生時代後期の山名式、廻間式に相当すると考えられる。

古式土師器　５～７は所謂、古式土師器。５の高坏は脚部の３方向に円形のスカシ孔を有し中空である。坏部の屈折が明瞭である。６は外面と坏部内面にミガキ調整を施す。７は所謂Ｓ字口縁甕の脚台部。端部を内側に折り返す。

(4) 小結

SD315は、護岸の杭材（３）をAMS（C14）年代測定した結果、39calBC － 80calAD（95.4%）の値を得ており、弥生時代中期後葉に比定される。樹木の伐採から製材、利用、廃棄までの時間差を勘案しても古墳時代初頭の範疇は外れないと考えられる。伊場大溝の形成時期を古墳時代中期とするならば、合流することは考え難い。大溝（SD01）Ⅷ層以前の別溝の存在の可能性を考えるか、大溝(SD01)の初現を弥生時代後期～古墳時代前期まで遡らせなければならないことになる。大溝(SD01)の初現と形成時期は今後の検討課題である。

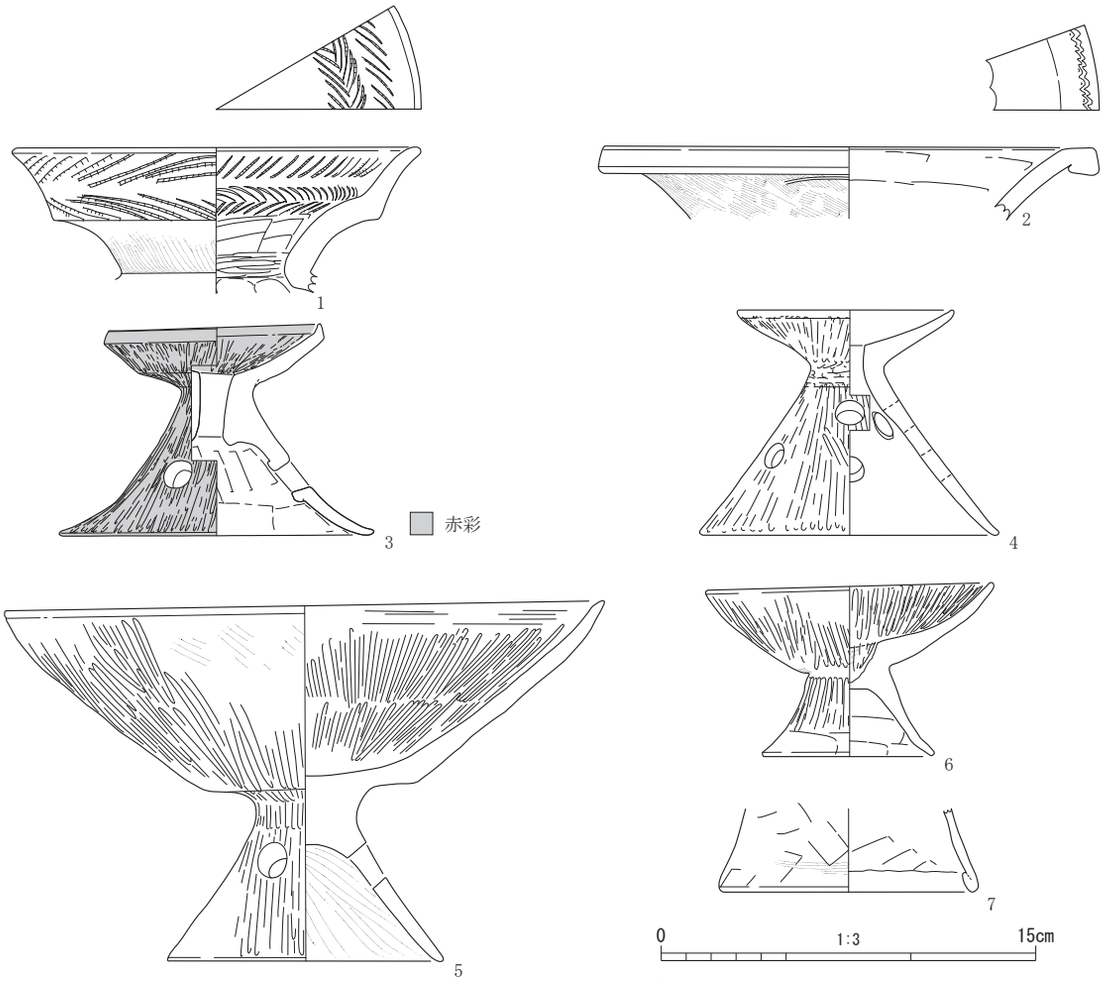


Fig.70　伊場大溝形成以前の遺物

３　伊場大溝Ⅷ層の調査

(1) 概要

Ⅷ層は、伊場大溝の最下層の層位で、灰色系、黄色系、褐色系、黒色系シルト層主体に、未分解の植物片を含む層や砂質シルト層が交互に堆積するラミナ状、クロス状、渦巻き状の堆積が特徴的である。最深部は基盤砂層に到達しており、下層に行くほど砂質が強い土が堆積していた。Ⅷ層の堆積は北西端の Tr-1、中央の Tr-2 では両側に堆積するが、南東端の Tr-3 では南岸のみに遺存しており、北側はⅦ層以降の流路によって削り取られたと考えられる。また、土層断面の観察結果から、流れの緩急や堆積途上での流路の更新があったとも考えられる。古墳時代中期後葉の遺物を主体的に包含するが、弥生時代、古墳時代前期の遺物も少量出土した。大溝東岸南東部に北東方向に延びる枝溝 SD314 を検出している。

(2) 伊場大溝の形状

Ⅷ層の大溝は、完掘時点で幅約 14.7 ～ 17.7 ｍと南東部の方が幅広となる。最深部の標高は -2.5 ｍであった。しかしながら､底面は全体的にⅦ層以降の流路によって大きく浸食を受けており、５箇所の大きな窪みとなっている。溝幅以外は、本来のⅧ層の大溝の規模と形状ではない可能性がある。大溝の底部には幅約 1.5 ～ 6.3 ｍ、深さ約 0.7 ｍの川底溝が形成されている。川底溝が形成されていることや、下層に細砂が多く堆積していることから、この時点では豊富な水量があり流れも比較的速かったと推定される。北西端の北岸の様相が不明瞭であるが、北西方向から南東方向に向かって直線的に流下していたと考えられる。北岸が川の攻撃面に当たると考えられ、オーバーハングしている箇所も多く確認した｡水流により北岸が削られ､流路が南側に湾曲したと推定される。

(3) 遺物の出土状態

Ⅷ層の出土遺物は、他の層位と比較して量が少なかったものの、５世紀後葉を中心とする時期の土器や木製品などが得られた。Ⅷ層の遺物の出土状況は、上層や中層からの出土は点在するものの皆無に等しく、下層や川底溝から集中的に出土する傾向にあった。後述するⅦ層には、５世紀代に遡る遺物が多数含まれている。流路の更新過程でⅧ層中に埋没していた遺物が水流によって掘り起こされ、Ⅶ層中に再堆積したものが存在すると考えられる。

(4) 溝跡

SD314 (Fig.71) Ⅶ層から検出した枝溝である。伊場大溝Ⅶ層に切られるがⅧ層との関係は不明である。SD314 は大溝北東岸の南西側に位置し、幅 8.03 ｍ、検出面からの深さ 1.30 ｍを測る。埋土は 8 層に分層でき、レンズ状に堆積する。大溝に対しほぼ直角に接続することから、合流する溝であると考えられる。北東方向に延びると推定するが既往調査ではこれまで検出されていない。大溝との合流部には径 40 ～ 60 ㎝、長さは最大 200 ㎝程の自然木が数点出土した。これらは人力では持ち上げられない重量であり、かなりの水量と激しい水流が容易に推察される。検出した SD314 の

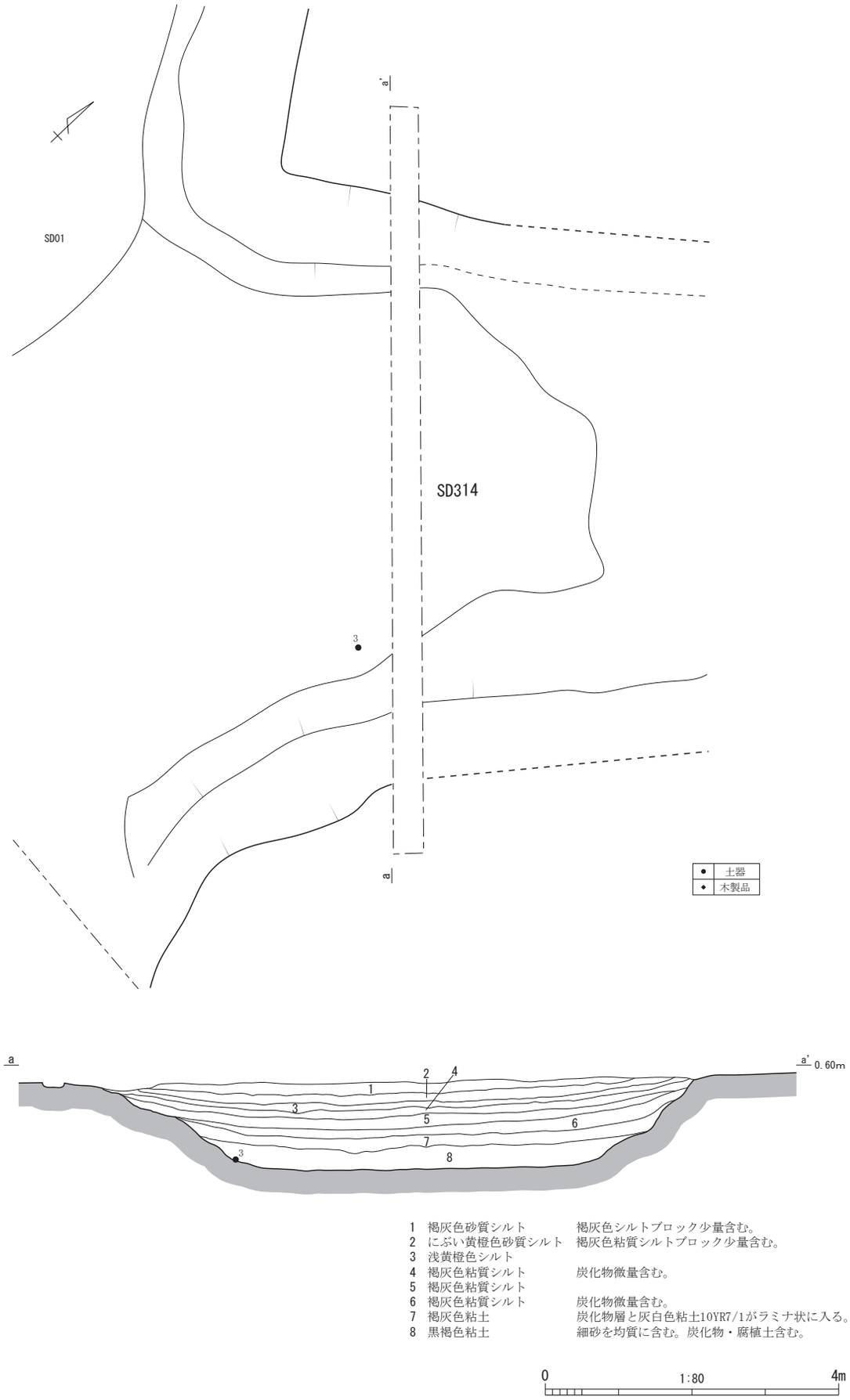


Fig.71　SD314　実測図

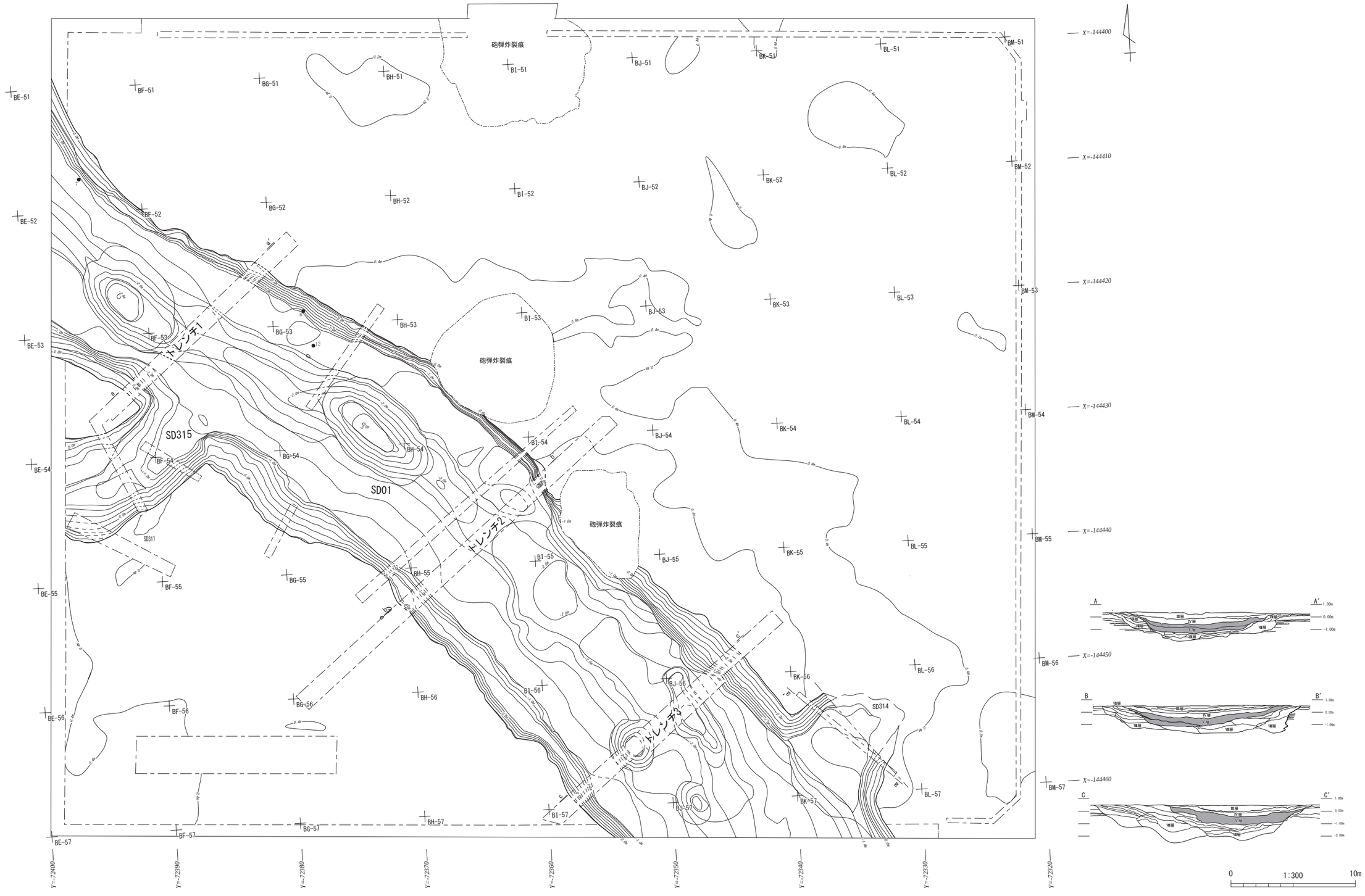


Fig.72　Ｄ区　伊場大溝Ⅷ層

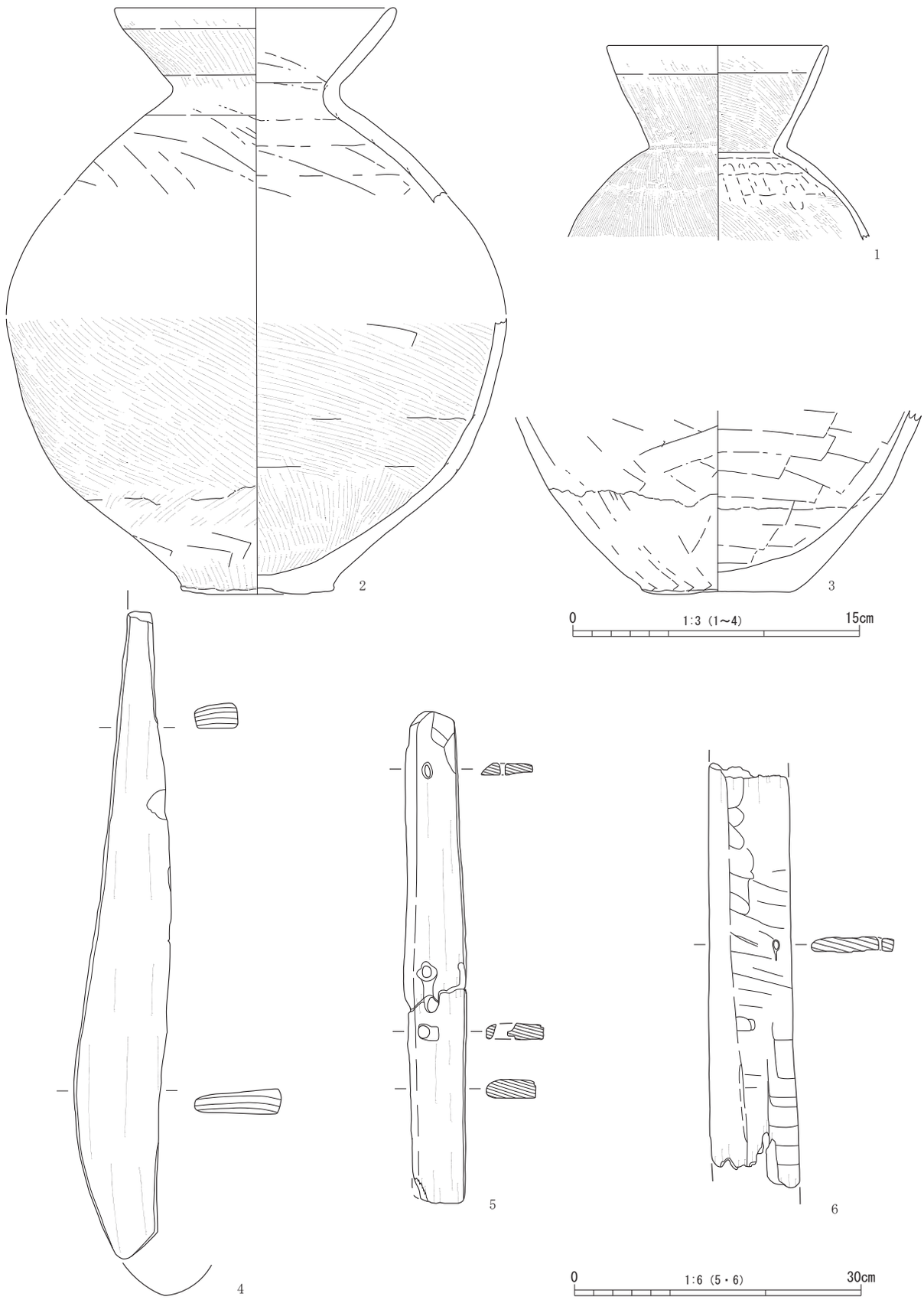


Fig.73　SD314　出土遺物

底部は接続する大溝底面から約６ｍ北東側へ延びる。底面の標高は大溝の底面標高とほぼ一致する。遺物は底面付近から土器、木製品が出土したが細片のため図示していない。底面直上の加工材をAMS年代測定した結果、316calAD － 398calAD（70.5%）の値が得られており、それに従えば古墳時代前期～中期に相応することになり、土器の時期と大枠で一致する。大溝Ⅷ層の形成時期の概念からすれば、SD314はⅧ層以前の所産となる。しかし、前述のとおり、巨大な自然木はSD314と大溝

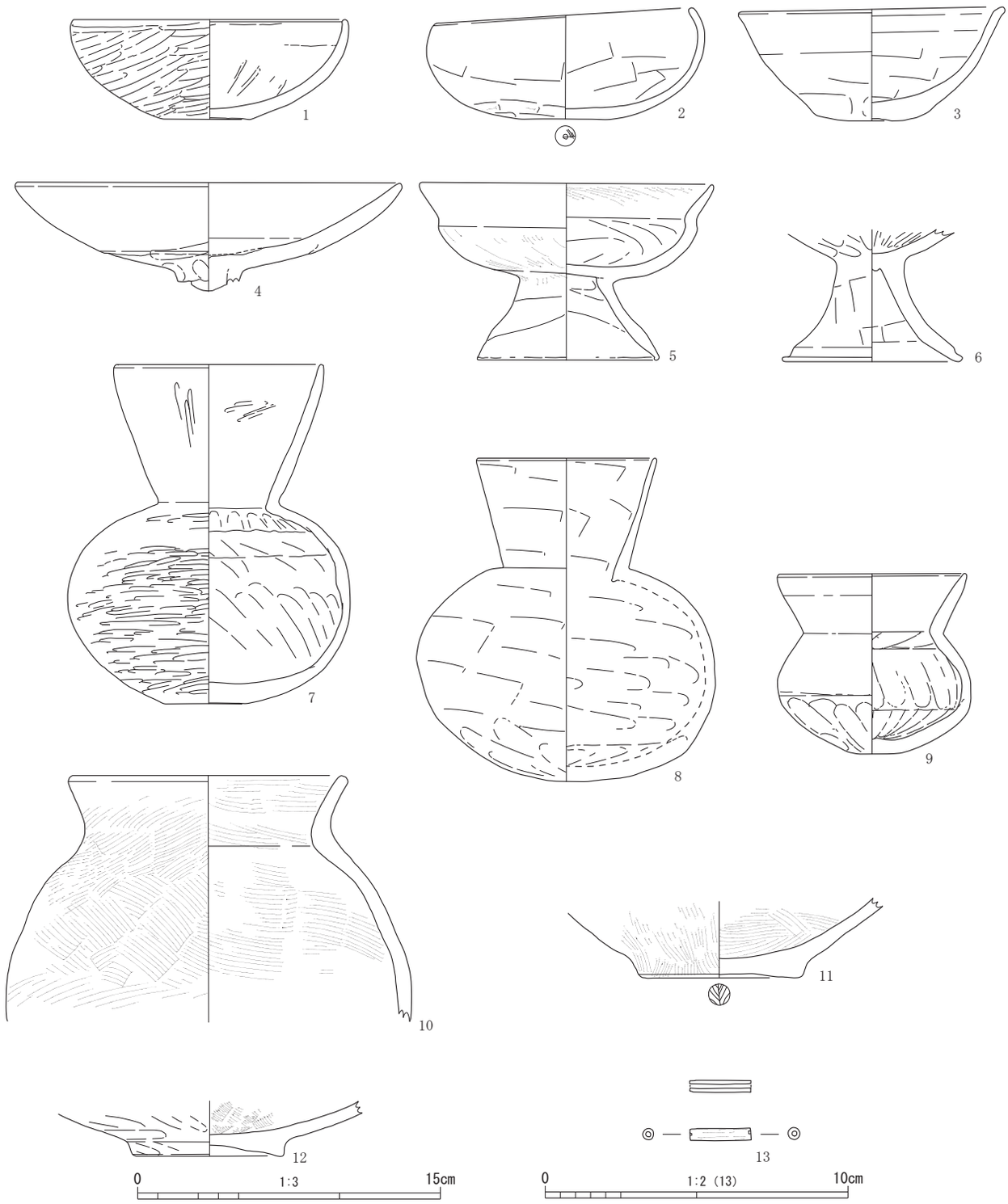


Fig.74　Ⅷ層　出土遺物（1）

のⅧ層もしくはⅦ層をまたいで出土しており、大溝の初現と形成時期については、今後の課題である。

SD314 より出土した土師器を３点、木製品３点を図示した。１は長頸壷の口縁部。２は広口壷。３は壷の底部。いずれも古墳時代後期の所産である。４は鋤と考えられる加工材である。５・６は有孔の加工材で用途は不明。

(5) Ⅷ層出土遺物

概要　平面的にも層位的にも散在的に出土しており、数は少ない。須恵器は出土していない。土器類 12 点、玉類１点、木製品２点を図示した。

土師器（Fig.74）

１～12 は土師器である。１・２は内彎する坏である。１は外面ミガキ調整。２の底部はケズリ調整。３は外反する口縁を有する鉢である。底部を蛇の目状に周回するように静止ヘラケズリ調整を施す。４～６は高坏。４は半球状の坏部。５は鉢型の坏部を有する。７・８は直口壷である。７は外面にミガキ調整を施す。９は小型の甕。10 はくの字口縁。11・12 は壷甕類の底部。11 の外面には木葉痕が観察できる。

石製品（Fig.74）管玉１点を図示した。13 は径 0.42 ㎝、長さ 2.1 ㎝、重さ 0.2g、石針による穿孔と考えられる。材質は碧玉。

木製品（Fig.75）木製品を２点図示した。14 は板状の加工材、中央付近に幅 11.0 ㎝、奥行 0.55 ㎝の抉り状が観察できる。残存長 32.0 ㎝、厚さ 4.5 ㎝。断面形は長方形を呈する。15 は杭状の加工材、先端はあまり丁寧な尖らせ方ではない。残存長は 21.8 ㎝、径は 4.5 ㎝。

(6) 小結

大溝Ⅷ層は既往調査と同様に溝幅が大きく広がる。19 次の調査では、Tr-1、Tr-2 では両側に広がり、Tr-3 においては片側（南側）にのみ大きく広がり、Tr-3 付近で南側が膨らむ、もしくは湾曲すると考えられる。遺物は古墳時代中期後葉を中心とするが、僅かではあるが、弥生時代後期、古墳時代前期のものも出土している。

またⅧ層以前の枝溝である SD314 を検出したことも大きな成果であった。

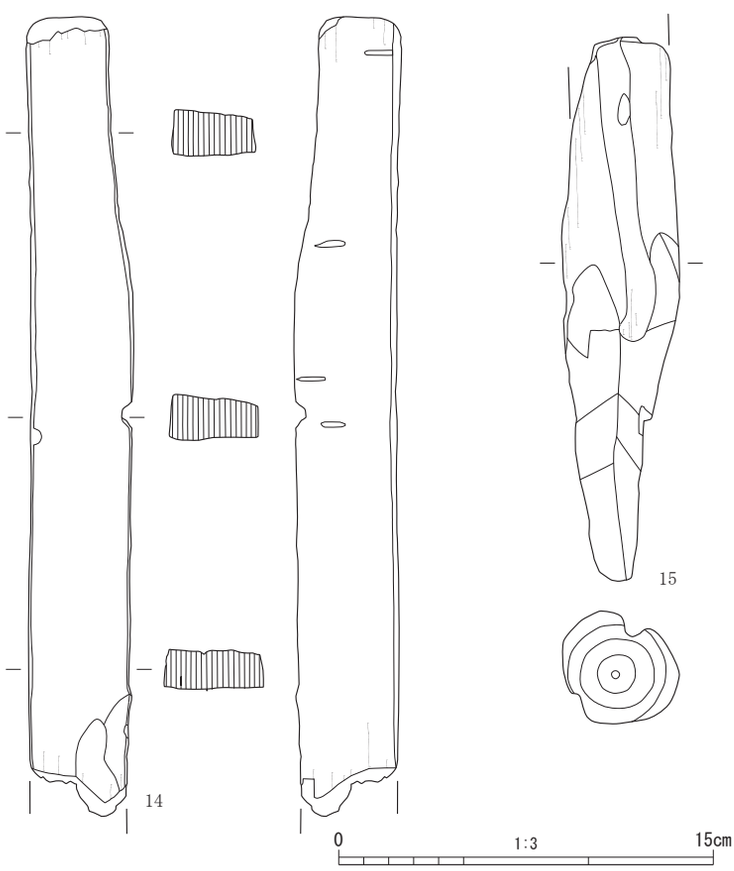


Fig.75　Ⅷ層　出土遺物（2）

4　伊場大溝Ⅶ層の調査

(1) 概要

Ⅶ層は、古墳時代後期（６世紀中葉）から飛鳥時代（７世紀）にかけて堆積が進行したと考えられる。Ⅶ層は灰色、褐色シルトと灰色砂が交互に堆積し、2.7ｍ程の層厚、最深の標高は-2.5ｍ程である。鳥居松遺跡５次調査にてⅦ層堆積中に流路の更新がありⅦb 層とⅦa 層に細分されているが、本調査では確認できなかった。また、伊場遺跡の調査では、Ⅶ層とⅤ層を分層する間層としてⅥ層の堆積が確認されている。Ⅵ層はⅦ層の最上層に堆積した砂層であると考えられているがその堆積は普遍的ではなく、19 次調査においても確認されなかった。貝塚は 2 箇所検出され、伊場大溝では類例の少ないⅦ層に帰属する。

(2) 伊場大溝の形状

Ⅶ層は、標高 -2.15ｍから 0.52ｍに堆積する部分であり、下層のⅧ層を抉り堆積したと考えられる。このため、伊場大溝の底面はⅦ層に相当すると考えられる。Ⅶ層堆積時の大溝の平面形は北西から南東方向にほぼ直線方向に延びるが、Tr-3 周辺にて流路の中心が東側に約 2.1ｍ移動する。Ⅶ層の大溝は幅 15.9ｍ、検出面からの深さ 2.67ｍを測る。底面の高低差は、調査区北西側が南東側より 0.7ｍ程高いことから、北西から南東方向に水が流れていたと考えられる。大溝の底面には激しい水流による部分的な窪みを確認しており、最深部の標高は -2.5ｍ、検出面からの深さは約 3ｍにまで達する。

(3) 遺物の出土状態

Ⅶ層から出土した遺物は、大溝の底部に出土位置が集中する傾向がみられる。大溝の底部から検出した３箇所の窪みからの遺物の出土は少なく、窪みが埋没した後、大量の遺物が底面及び底面付近に堆積したと考えられる。これは、鳥居松遺跡５次調査や梶子遺跡 13 次調査で大溝の底部に位置する川底溝が埋没した段階において、大溝の底面に極めて大量の遺物が堆積した状況に類似する。

Ⅶ層における遺物出土状況を Fig.77 に示したが、大溝が直線状に延びる調査区北西部から中央部付近は遺物が大溝の底面中央付近に偏るが、大溝の中心が東側へ移動する調査区南東部では、遺物が大溝底面の南西岸側に偏る。これは、遺物が SD314 との合流した水流により押し流された可能性や調査区南東部で東側に移動するため流れが緩やかになる南西岸に集中して堆積したと推定される。

(4) 貝塚

SS13　SS13 は大溝の中央部よりやや南側の西岸斜面に位置する。検出された規模は長軸 0.59ｍ、短軸 0.47ｍで、貝層は計測が困難である程薄い。規模はⅣ・Ⅴ層で検出された貝塚も含めて最小規模である。遺物は出土していない。

SS14（Fig.78・79）SS14 は大溝の南東部の底部付近に位置する。検出された規模は長軸 2.75ｍ、短軸 1.74ｍ、貝層の厚さは最も厚い部分で 0.20ｍである。SS14 はⅦ層下位の埋土中より確認さ

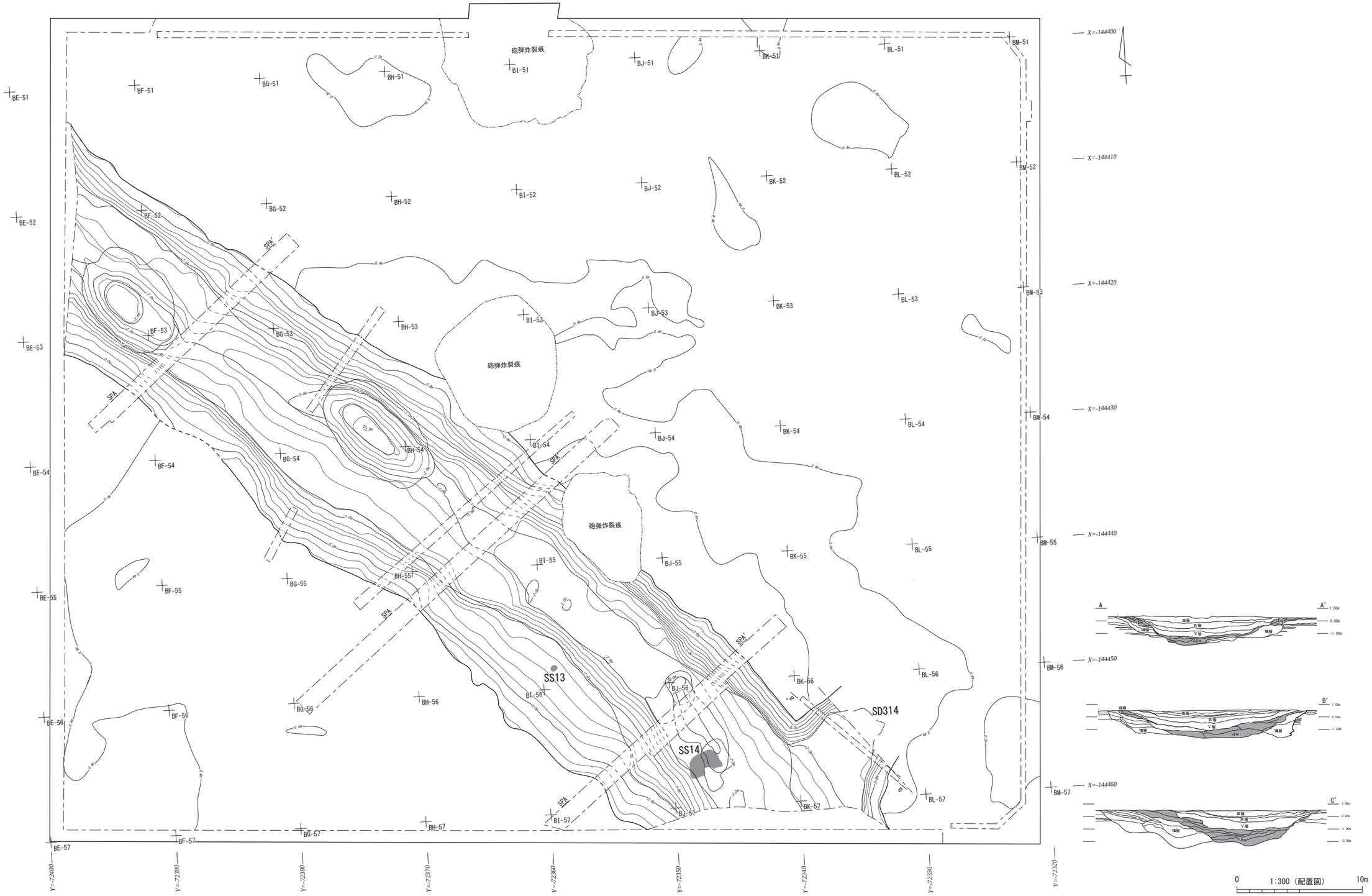


Fig.76　Ｄ区　伊場大溝Ⅶ層

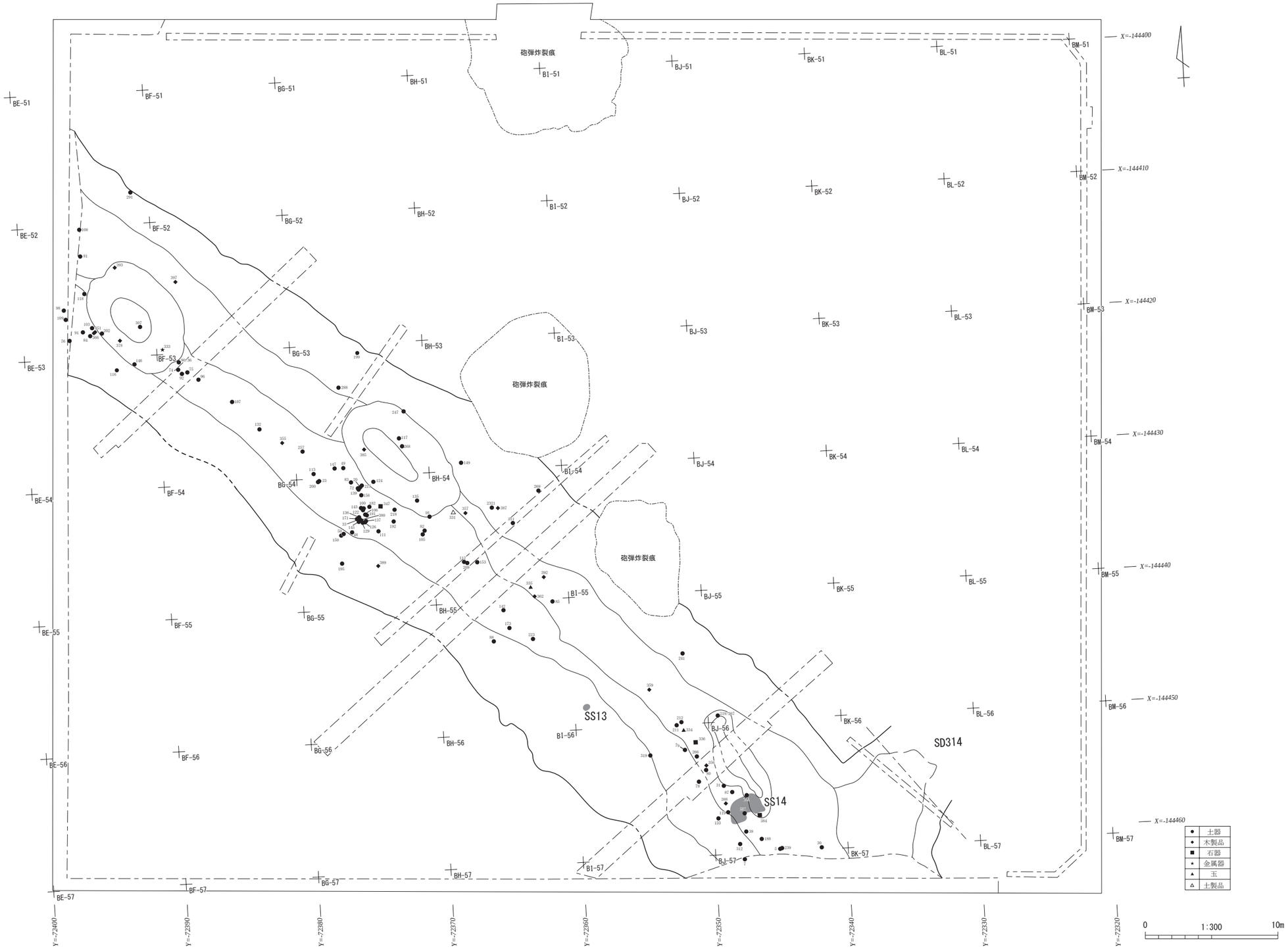


Fig. 77　D区　Ⅶ層における遺物出土位置

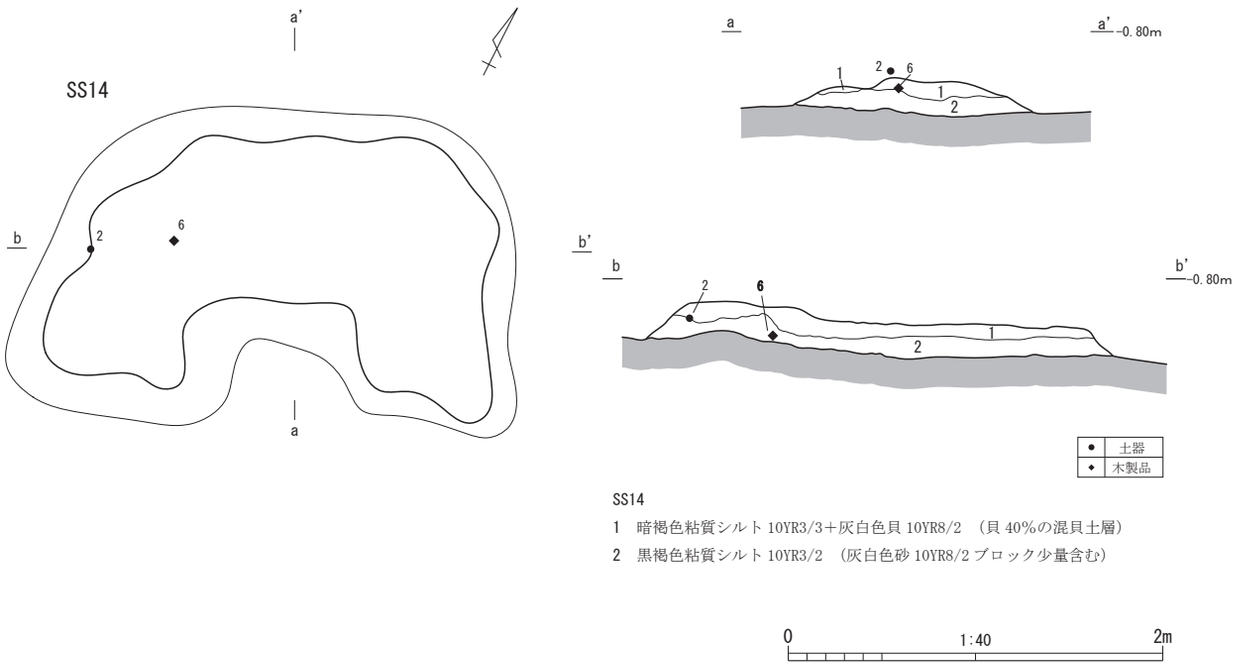


Fig.78　SS14　実測図

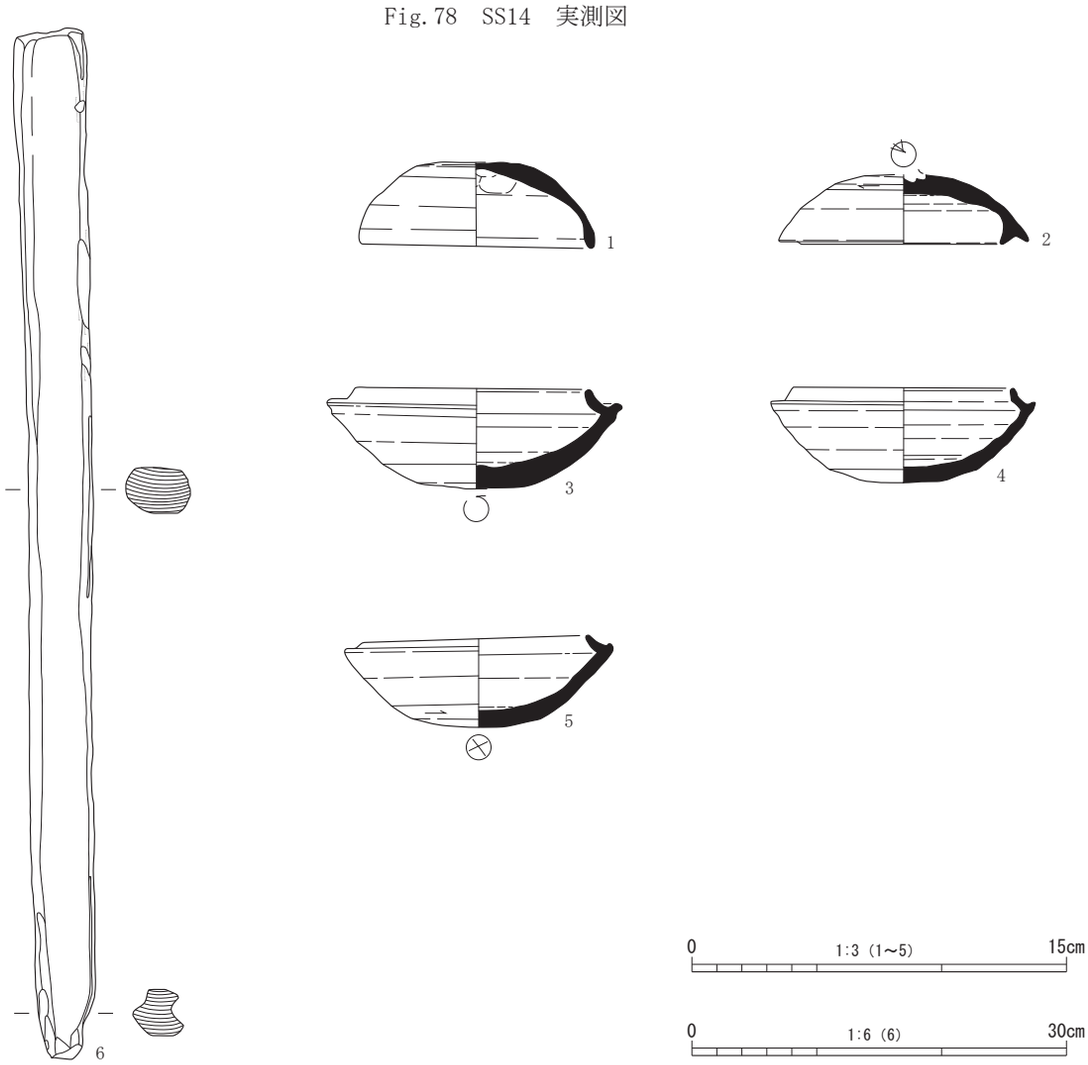


Fig.79　SS14　出土遺物

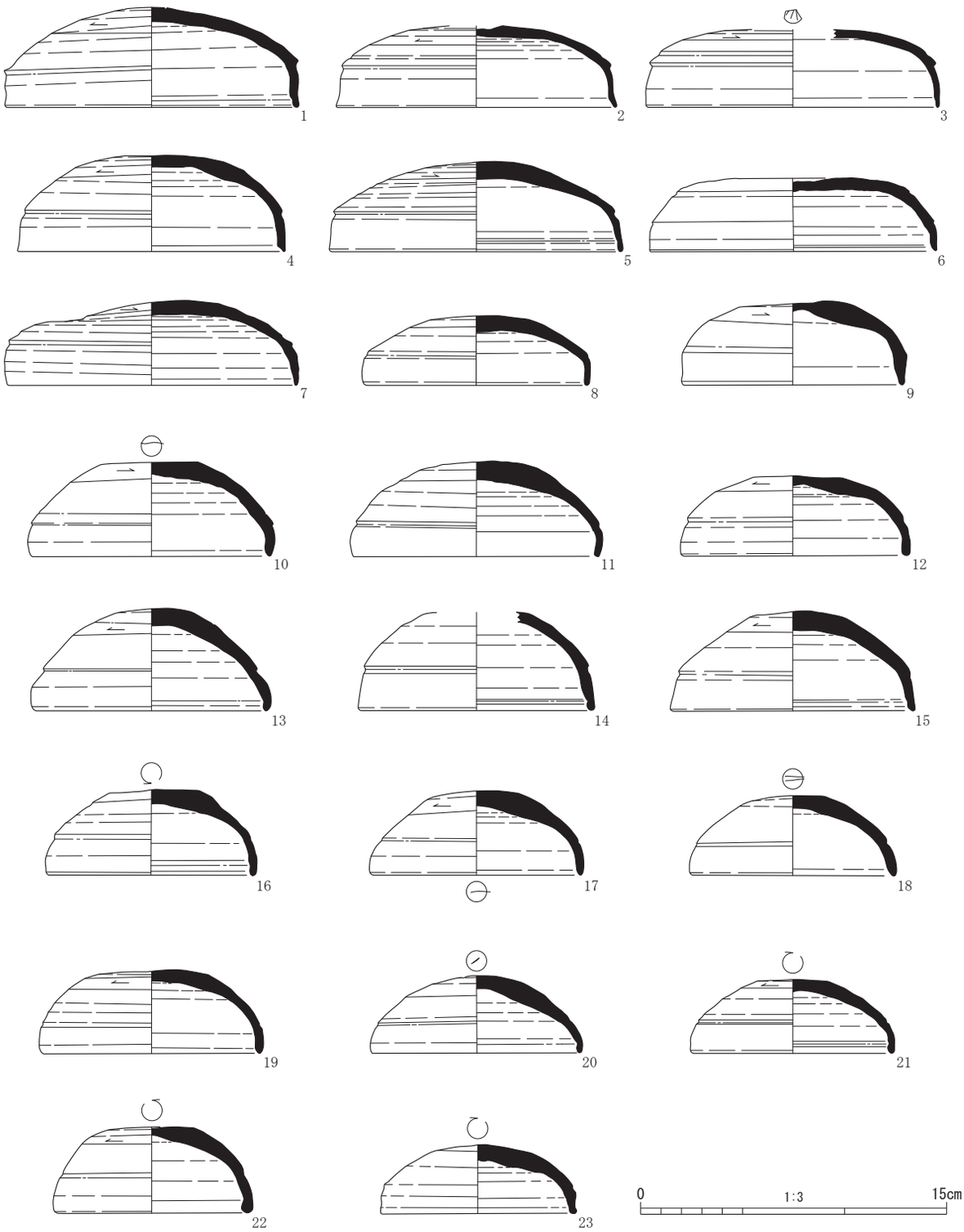


Fig.80　Ⅶ層　出土遺物（1）

れたため、Ⅶ層の埋没過程において形成された貝塚である。貝の組成はダンベイキサゴ（ナガラミ）が最も多く、次いでヤマトシジミとなる。遺物は土器、木製品、石器が出土している。

須恵器５点と木製品１点を図示した。１・２は坏蓋。３は返りを有しており、摘みは剥離している。３～５は坏身。受部を有しており、口縁の立ち上がりは短く内傾する。TK209 ～ TK217（飛鳥Ⅰ期）相当。６は棒状の木製品。残存長 83.0 ㎝、幅 6.4、厚さ 3.5 ㎝。

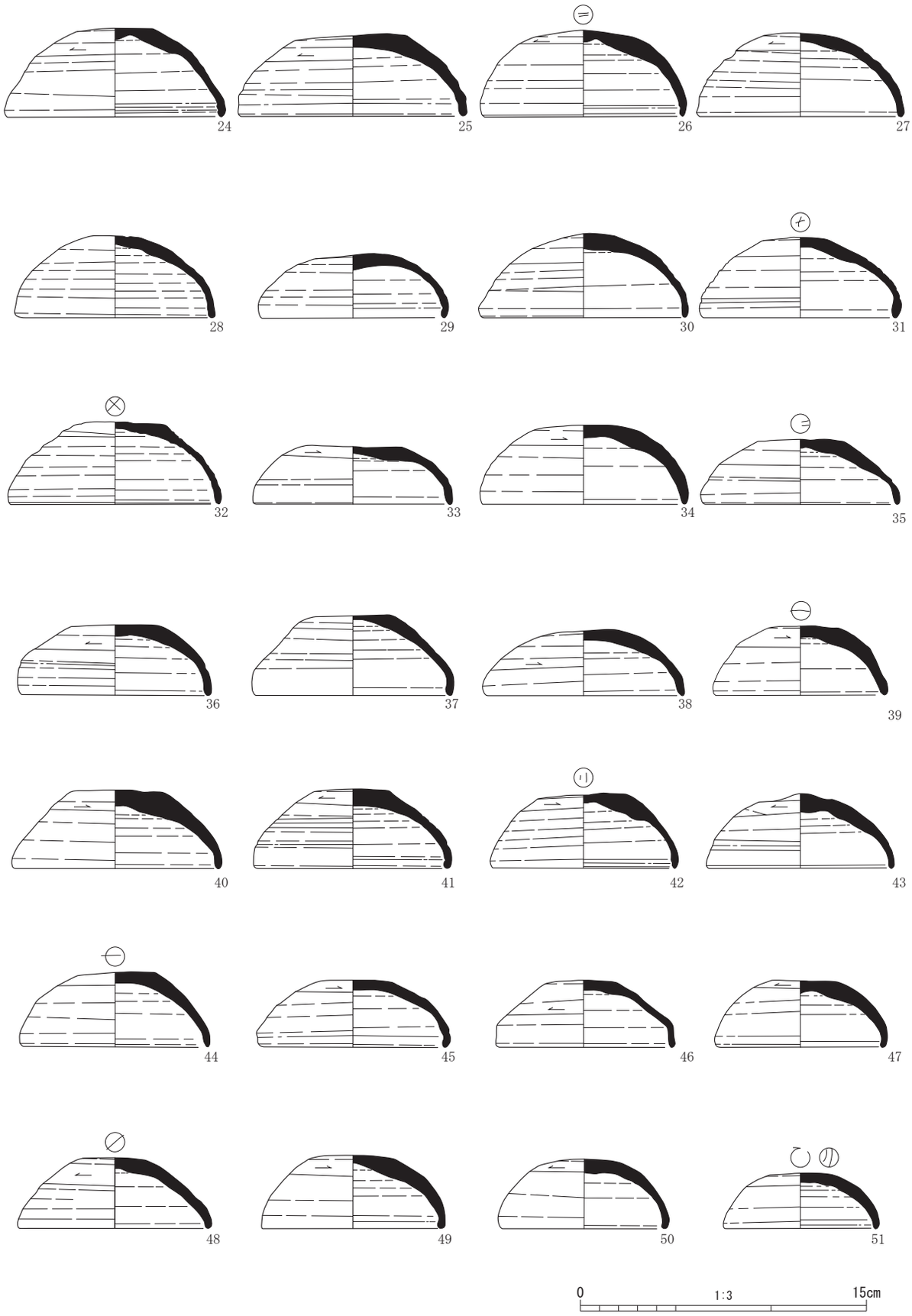


Fig.81　Ⅶ層　出土遺物（2）

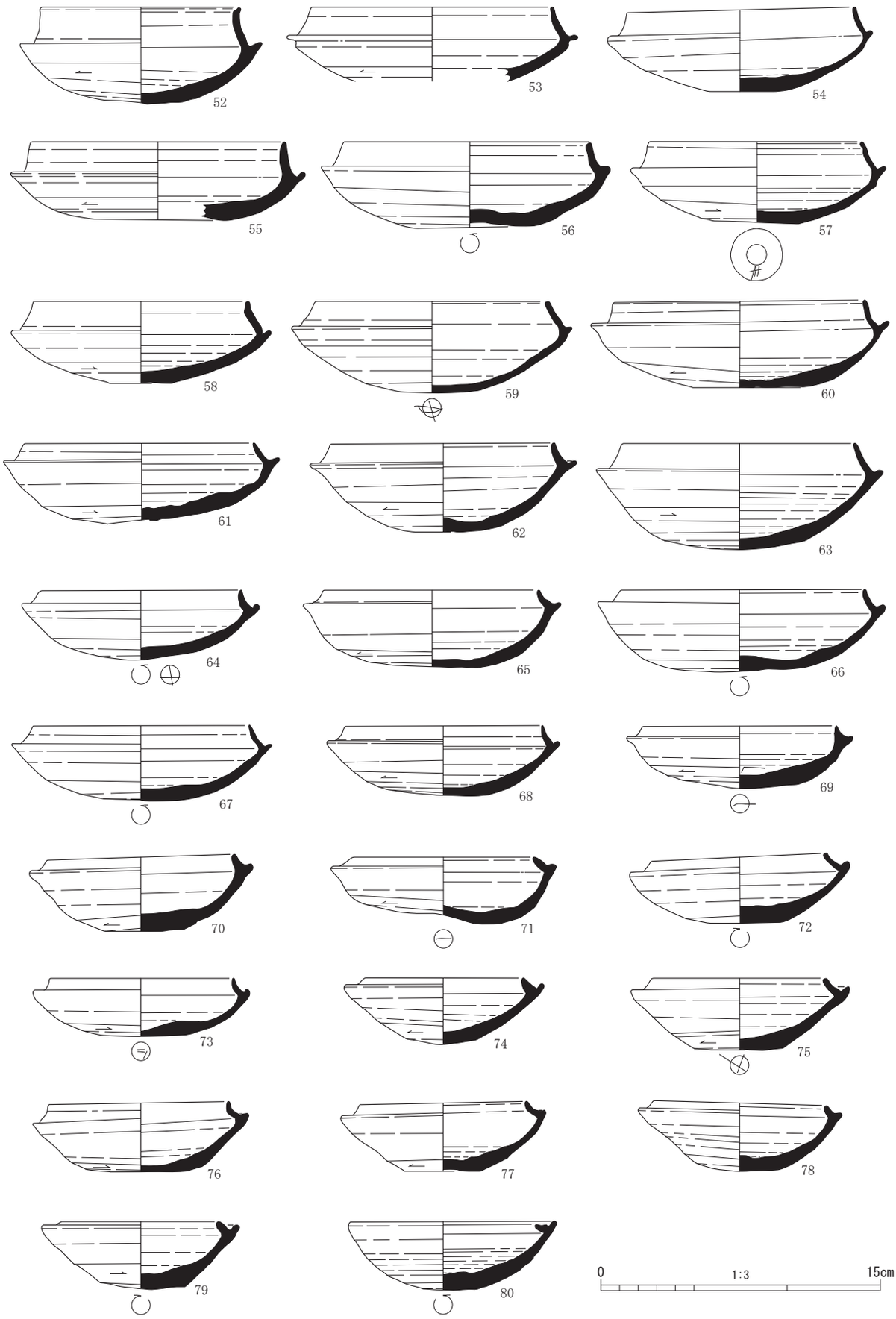


Fig.82　Ⅶ層　出土遺物（3）

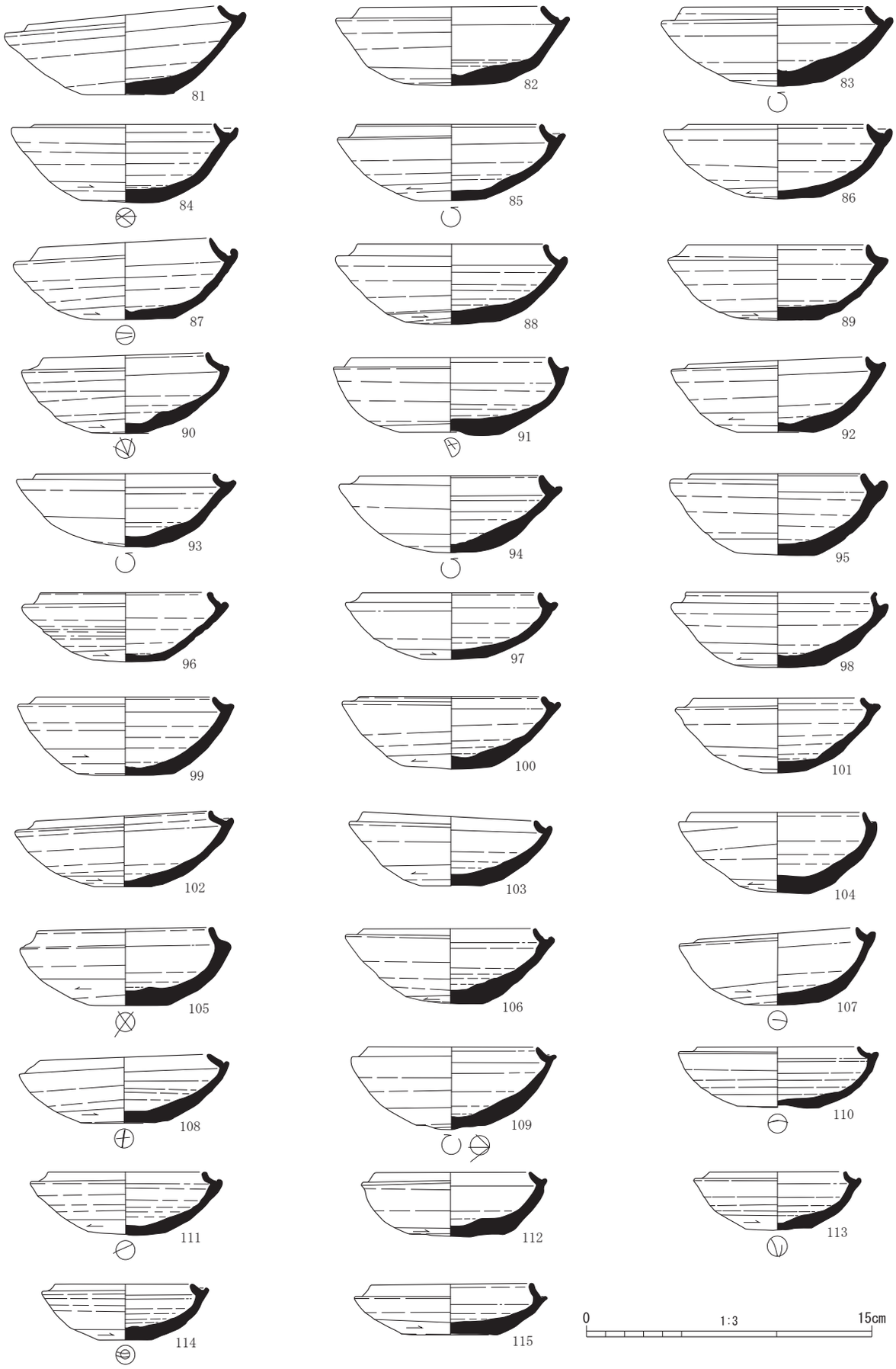


Fig.83　Ⅶ層　出土遺物（4）

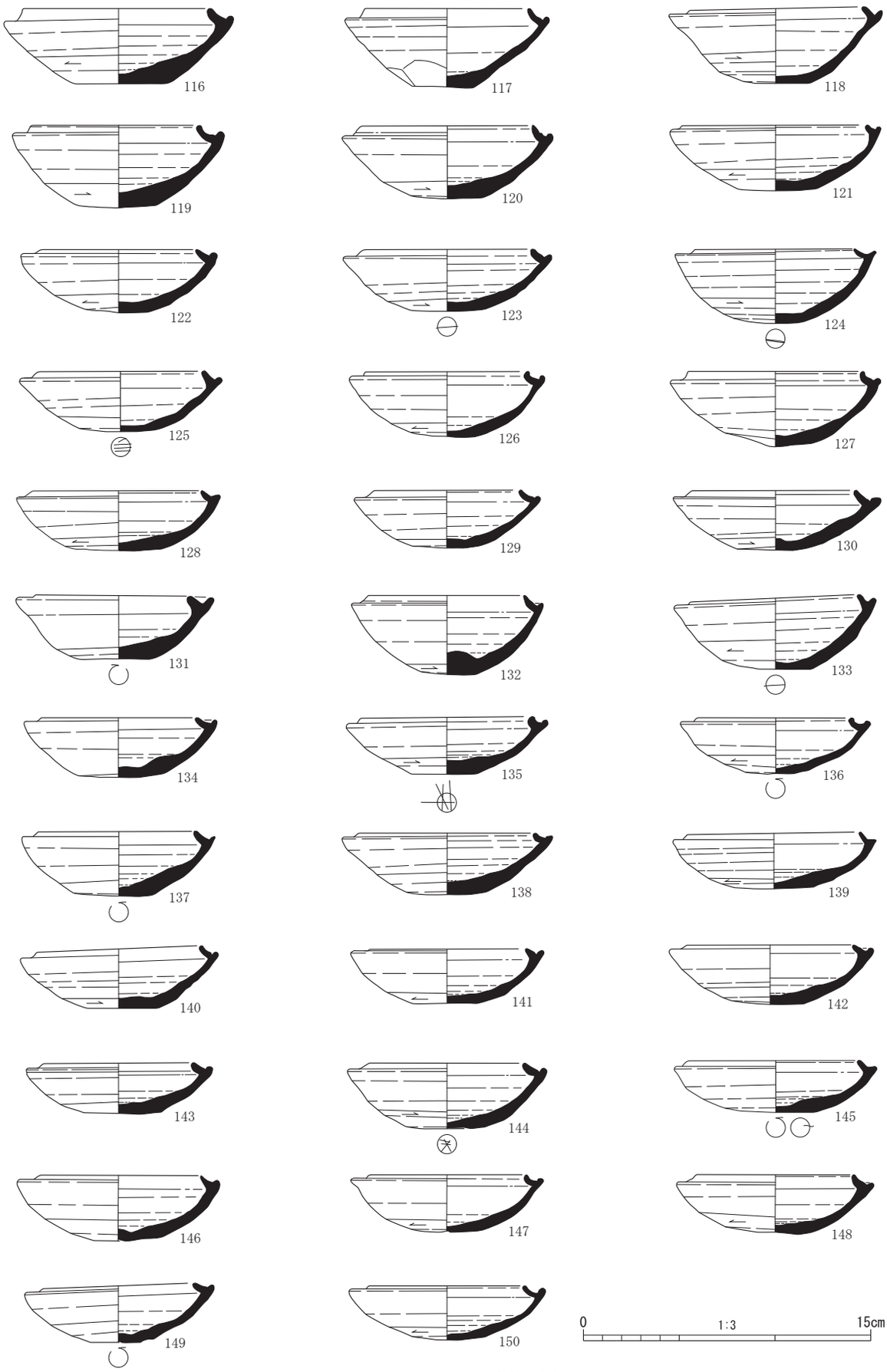


Fig.84　Ⅶ層　出土遺物（5）

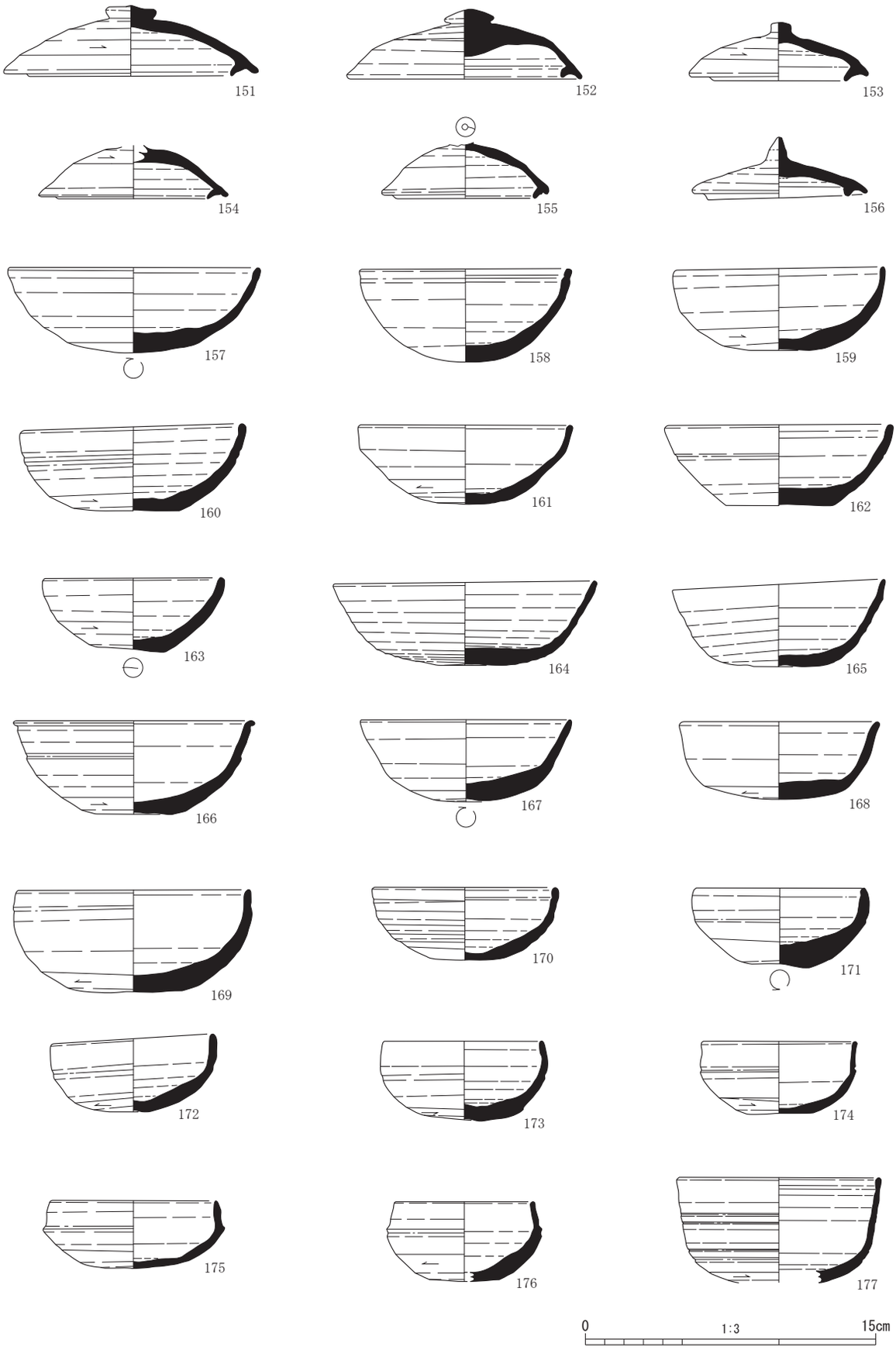


Fig.85　Ⅶ層　出土遺物（6）

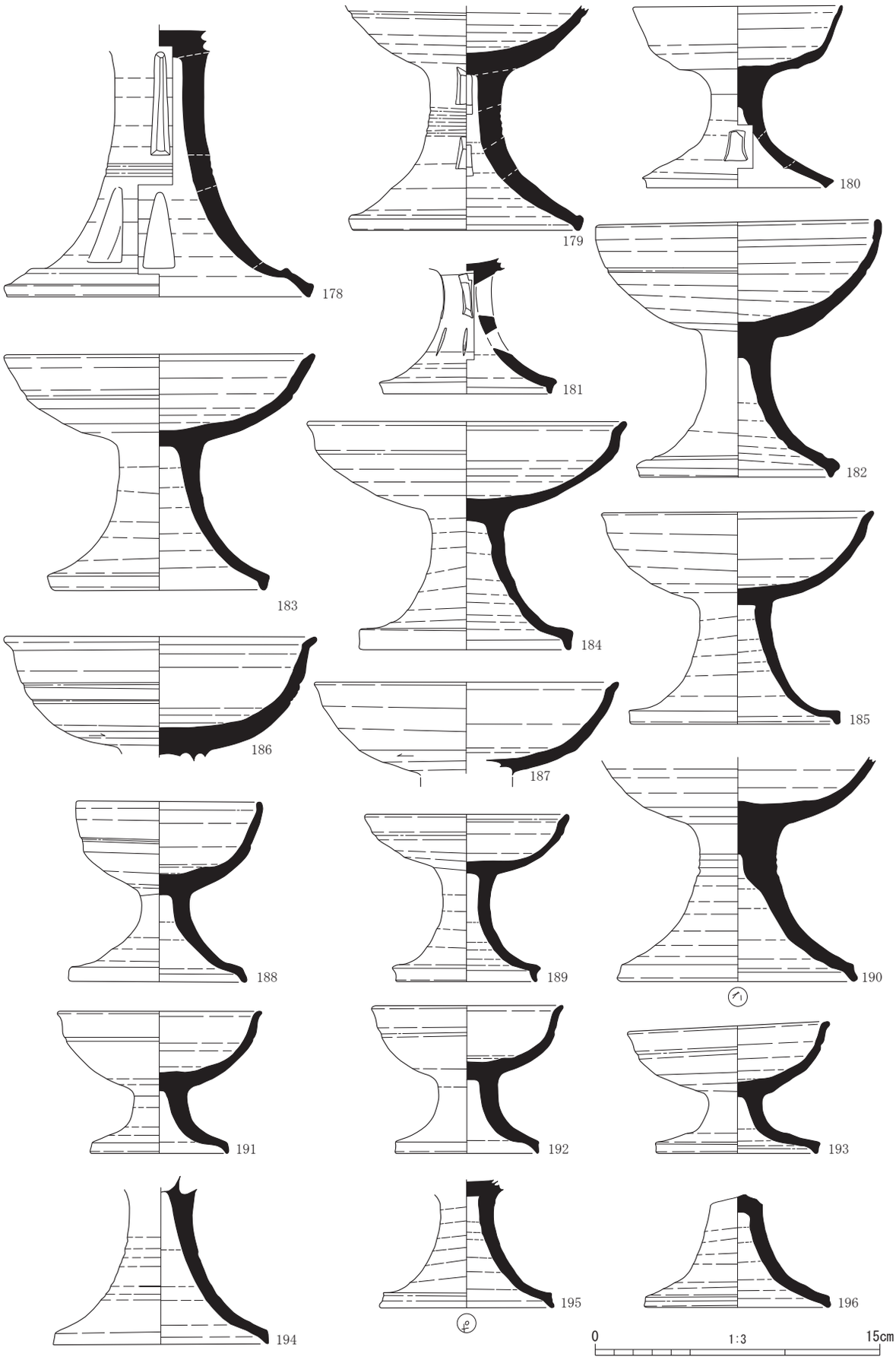


Fig.86　Ⅶ層　出土遺物（7）

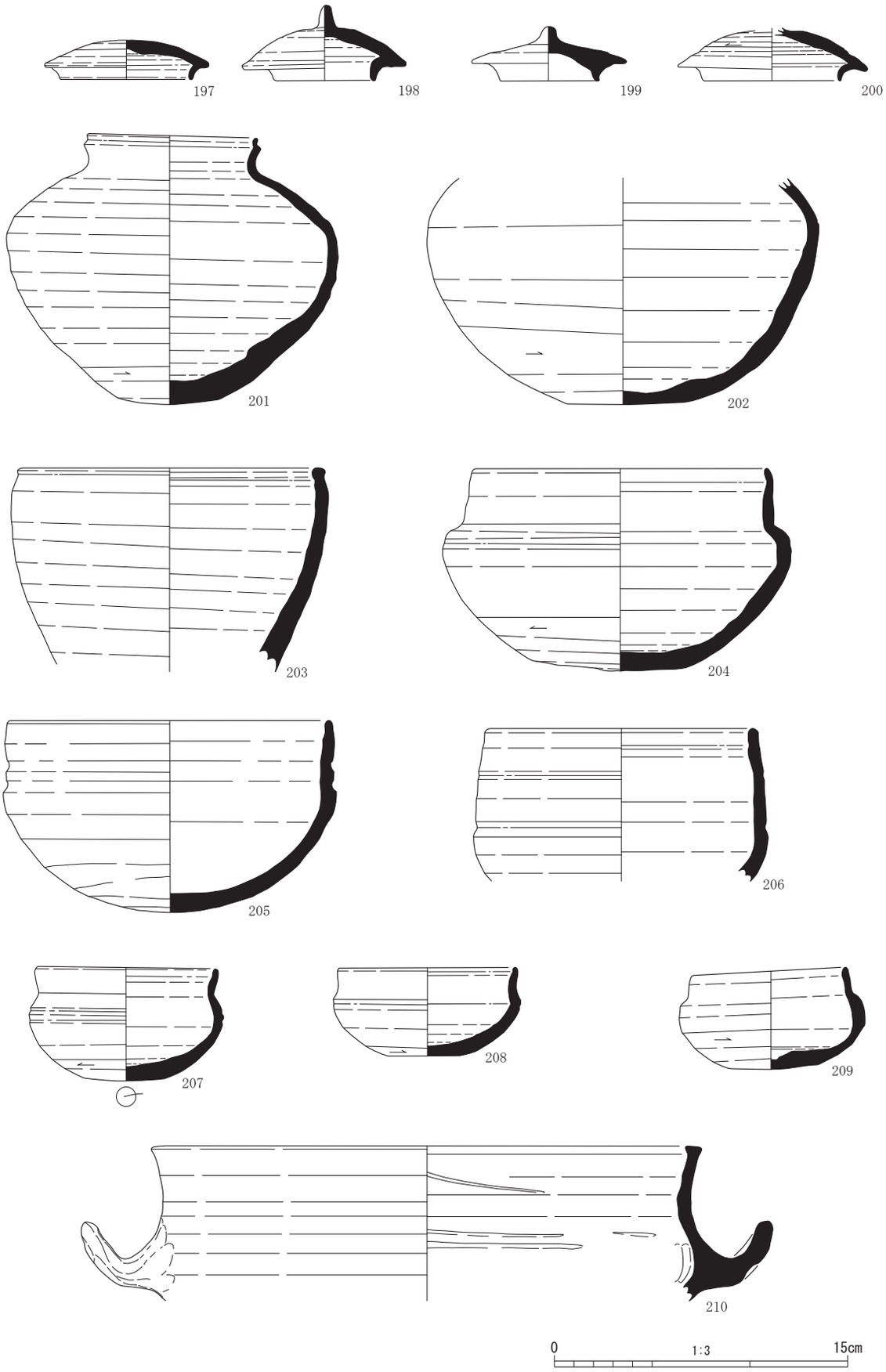


Fig.87　Ⅶ層　出土遺物（8）

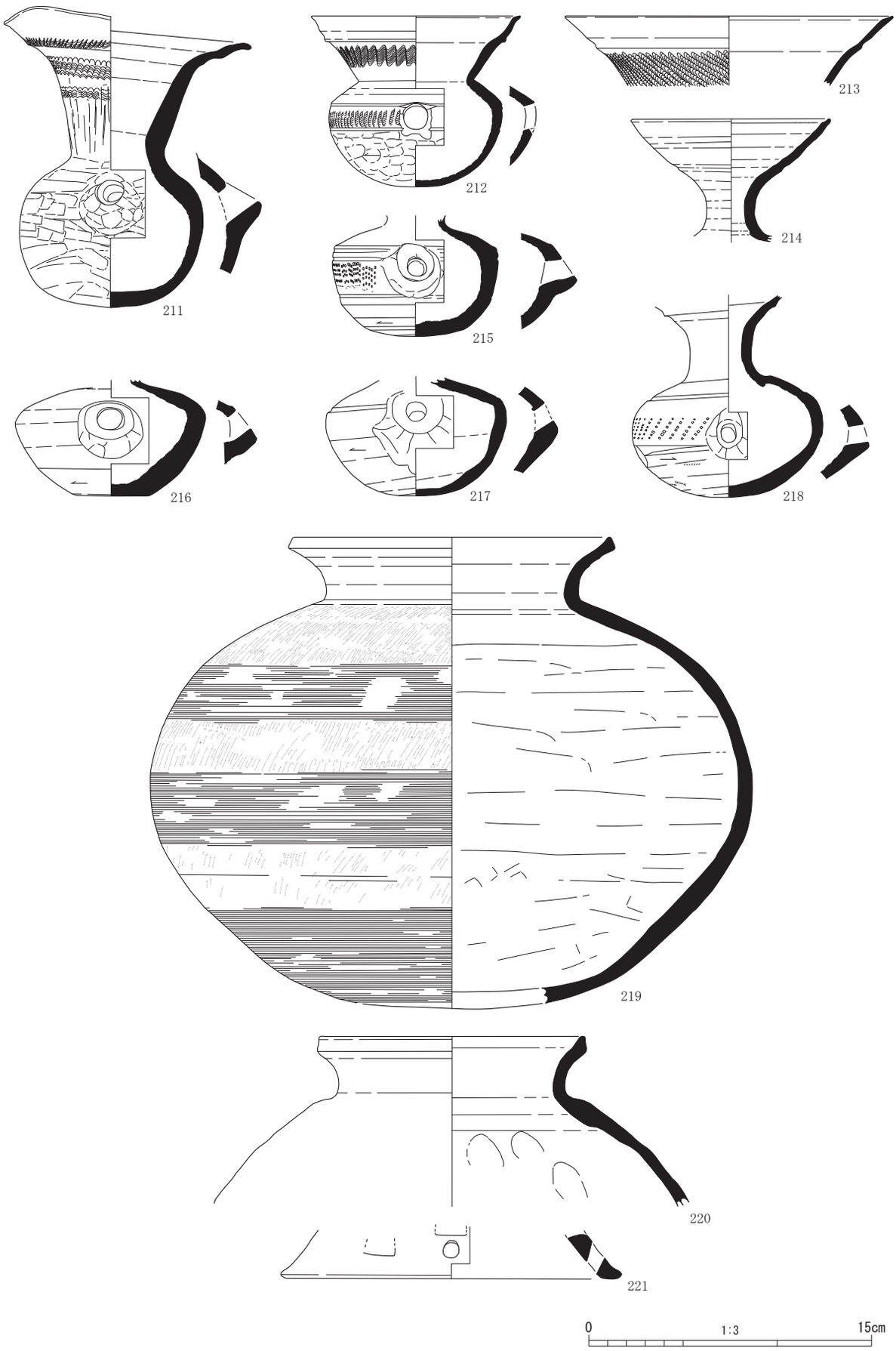


Fig.88　Ⅶ層　出土遺物（9）

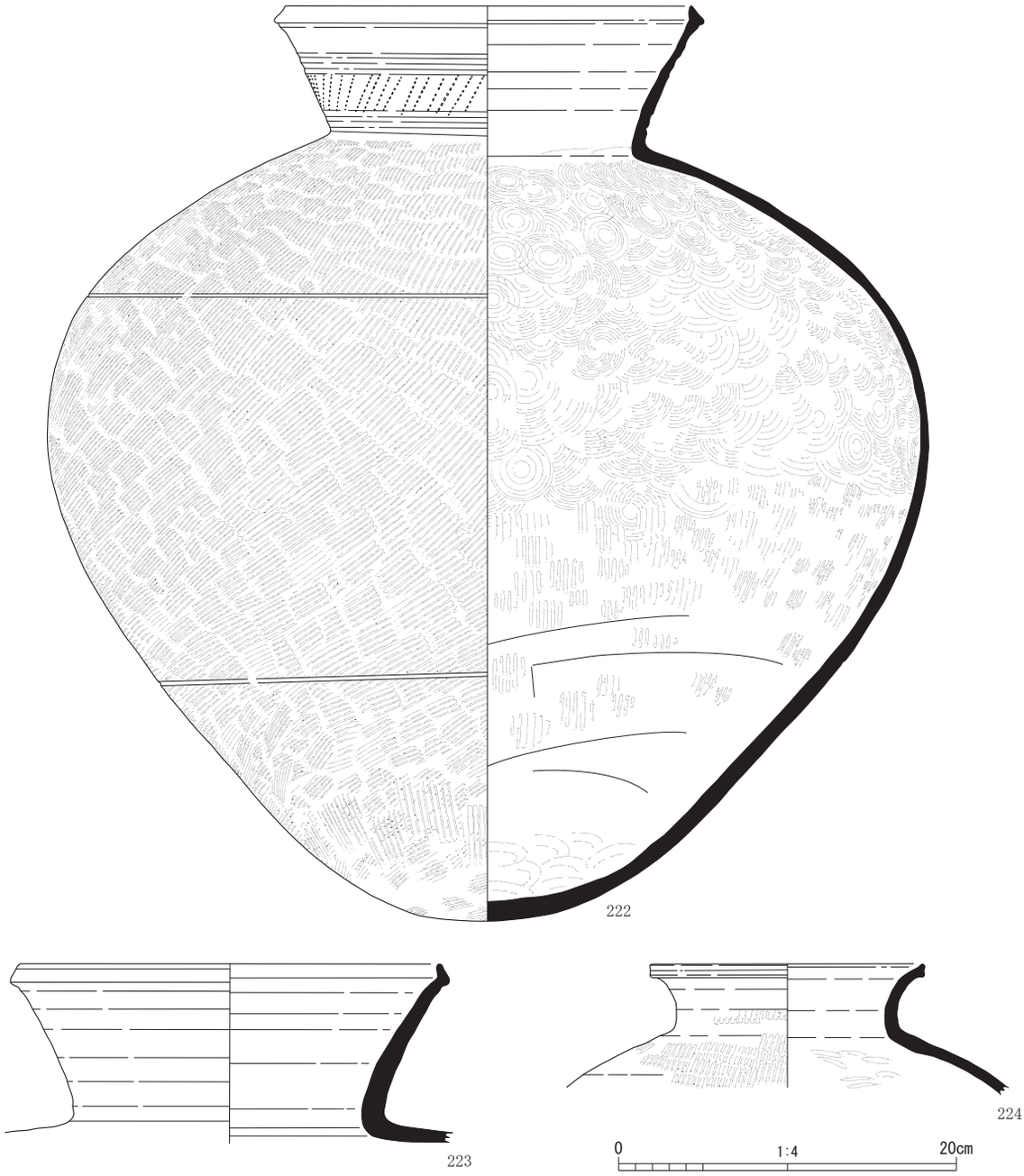


Fig.89　Ⅶ層　出土遺物（10）

(5) Ⅶ層出土遺物

概要　Fig.80 ～ 111 にⅦ層から出土した遺物を示した。Ⅶ層からは須恵器、土師器、玉類、金属器、土製品、石製品、木製品など多種多様な遺物が出土した。図示した遺物点数は 397 点である。少量ではあるが古墳時代前期に帰属する土器が含まれており、Ⅷ層及び周辺遺構からの混入品の可能性が高い。６世紀後半から７世紀代に帰属する土器が大半を占める。

須恵器（Fig.80 ～ 89）Ⅶ層から出土した須恵器を１～ 224 に図示した。坏蓋と坏身が圧倒的多数を占めるが、高坏、壷、陶臼、瑳、甕、盌などの器種が存在する。１～ 51 は坏蓋である。天井部との間に鋭い稜を有する古手の個体も存在するが、主体は６世紀後半（TK43 並行期）以降のものである。52 ～ 150 には坏身を図示した。坏蓋と同様、古手の様相を示すものもあるが、主体は

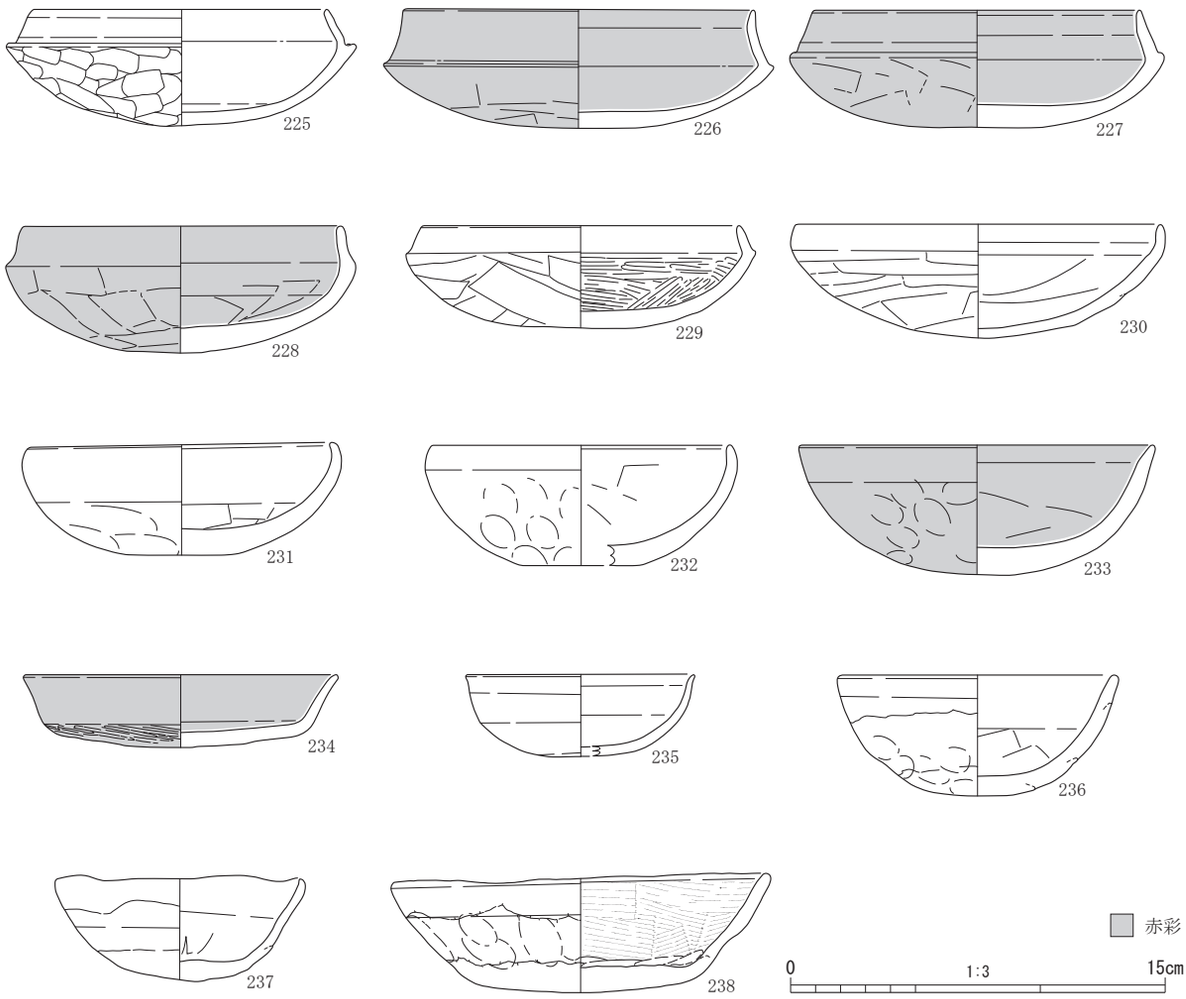


Fig.90　Ⅶ層　出土遺物（11）

６世紀後半以降のものである。143 のように径が小さく立ちあがりも扁平なものも含み、時期と変種は豊富である。151 は宝珠状の扁平な摘み有する。返りは有さない。152 ～ 156 は返り蓋である。157 ～ 171 は無台碗である。172 ～ 177 は盌である。盌は湖西窯特有の器種と考えられている。178 ～ 196 は無蓋高坏である。178 ～ 181 は脚部にスカシ孔を有する高坏である。197 ～ 200 は蓋であるが、直径９㎝以下の小型品であることから、坏身に伴うものではなく壷類の蓋と考えられる。201 は広口壷、202 は壷の底部である。203 は陶臼である。204・207 ～ 209 は短頸壷である。204 は口径が 14.8 ㎝とやや大きい。207 ～ 209 は口径が 10 ㎝以下と小型である。205･206 は丸い底部をもった鉢型の土器である。盌の一種と考えられるが、特異な形態の土器である。210 は把手を有する甑であろうか。211 ～ 218 は瓿である。古手の様相を示す 212 を除き、主として体部に開けられた孔はいずれも突出した形状であり、新しい要素を示す。219 ～ 224 は甕であるが、219・222 ～ 224 には共通して外面に平行タタキで調整されている。220 は壷の可能性もある。221 は壷甕類の脚台。

土師器（Fig.90 ～ 100）225 ～ 328 はⅦ層から出土した土師器である。坏や高坏、壷、甕、甑など多様な器種が確認できる。須恵器と比較して破片化した個体が多く、図示できたものは出土量に対して少なかった。一部の土器には５世紀代の特徴をもつものがあり、Ⅷ層からの混入品と考えられるが、おおむね ６世紀後半から７世紀代の土器組成を良く示している。

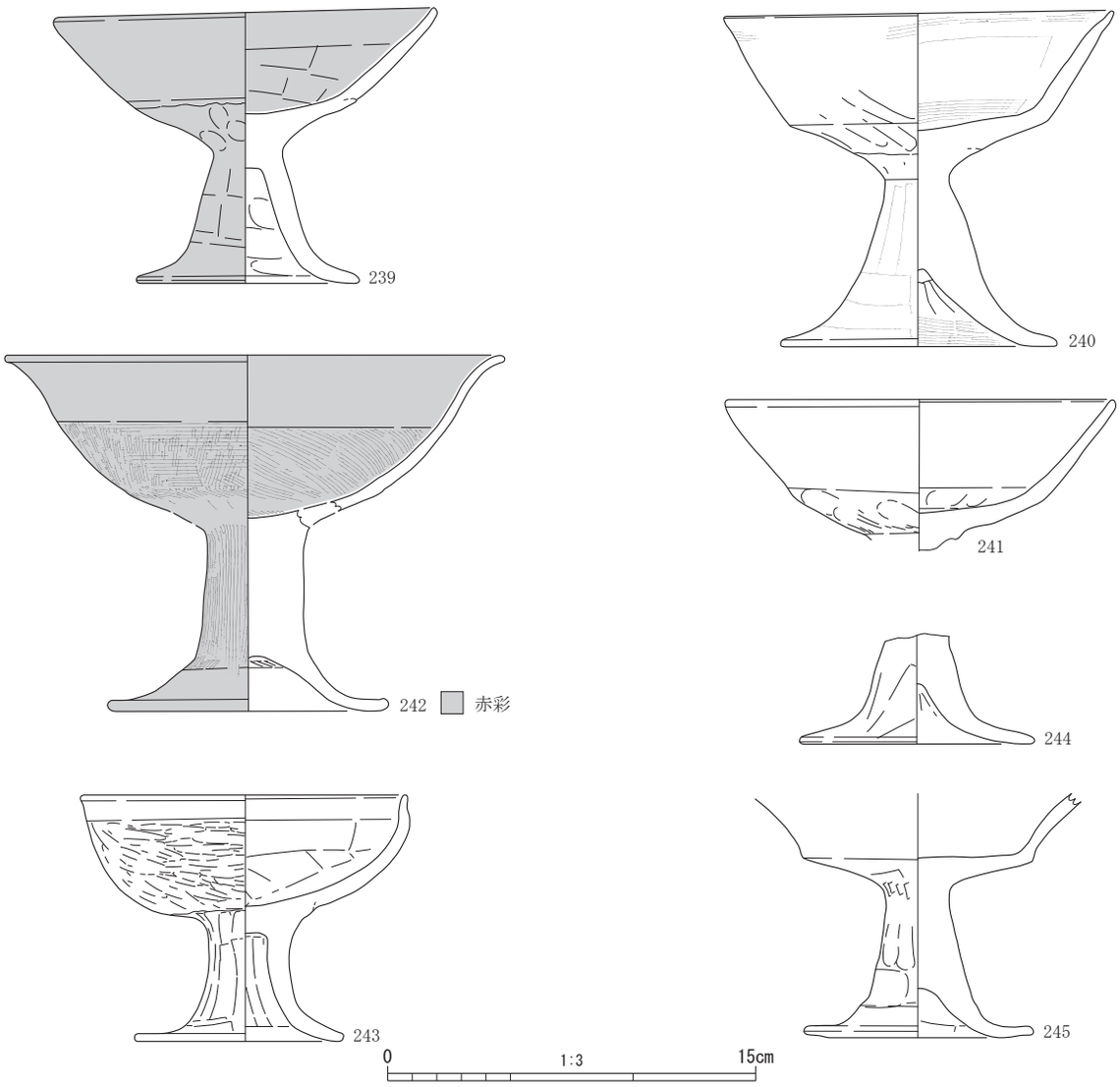


Fig.91　Ⅶ層　出土遺物（12）

225 ～ 230 は模倣坏である。須恵器の坏身を模倣したものである。体部外面はすべて静止ヘラケズリ。229 は内面にミガキ調整が施され、精緻なつくりである。230 は受部を有しない。坏蓋を模倣した可能性もある。231 と 232 は口縁端部が内彎する形状の坏である。233 ～ 237 は口縁部が外反もしくは外傾する坏。238 は逆台形の鉢。内面にハケ調整を施す浅鉢。239 ～ 245 はいずれも高坏である。240 は長脚高坏である。坏部の形態は 239・240・241・245 のような有稜のものと、242・243 のような鉢形のものに分けられる。240・242・245 は中実になるなど新手の様相を示している。脚部は中実になるとともに屈折も不明瞭になり、新手の様相を良く示す。６世紀後葉のごく短期間に出現する形態の高坏である。鉢形坏部高坏は、坏部が外反するものと、口縁が内彎傾向のものの２形態がある。有稜高坏と比較して脚部の形態にも明確な違いがあり、底部に向かってハの字形に開く形状である。246 ～ 256 には壷類を示した。246 は広口壷。247・248・255・256 はいずれも外反口縁壷と考えられる。247 のような球形の体部に大きく反り返った口縁部が付くが、250 ～ 254 は口縁部のみで甕である可能性もある。251 は折返口縁壷。257 ～ 299 には甕類を示した。甕類は大きく分けて 257 ～ 259・262 ～ 265 のような台付のものと、266 ～ 299 のような無台のもの

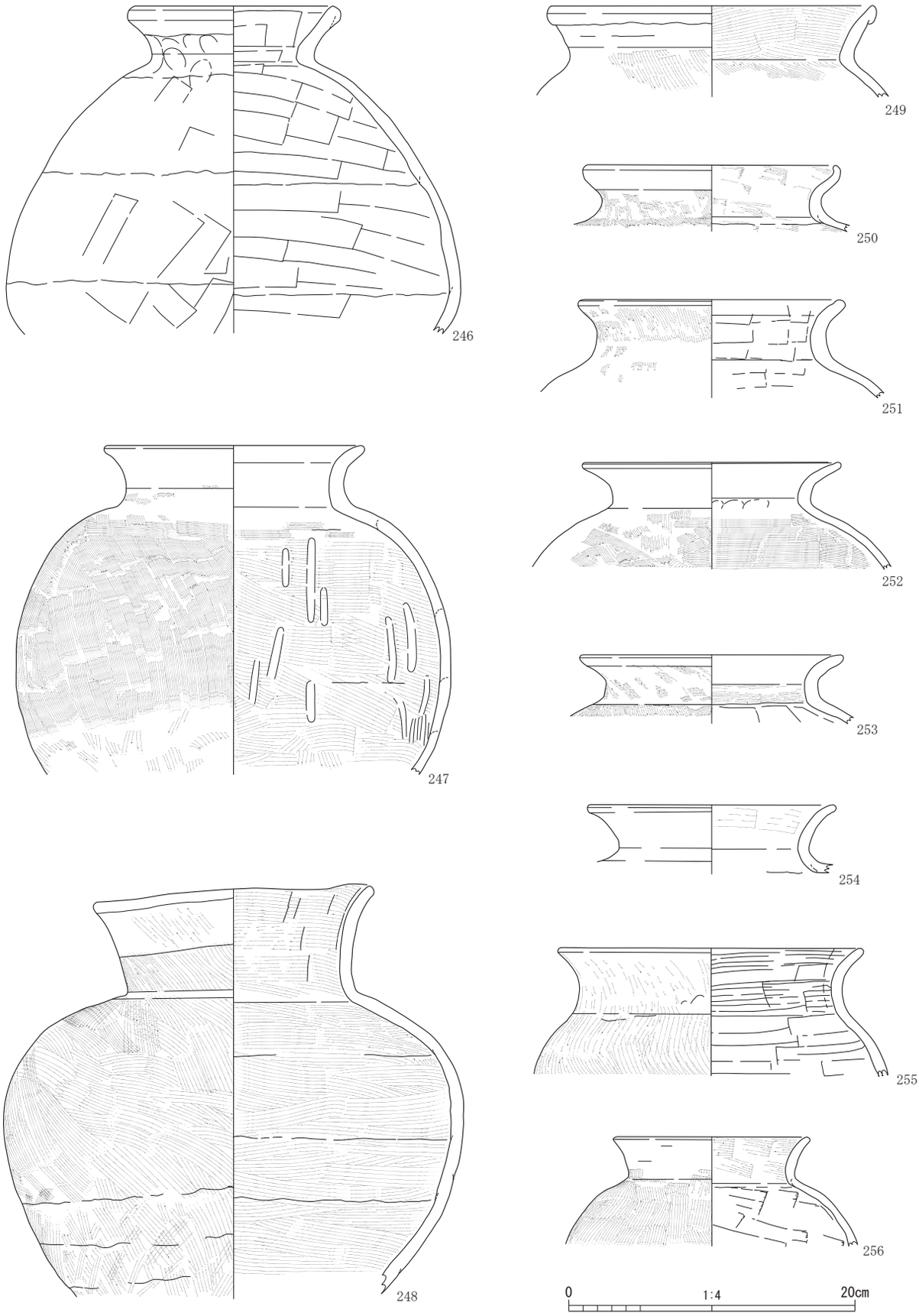


Fig.92　Ⅶ層　出土遺物（13）

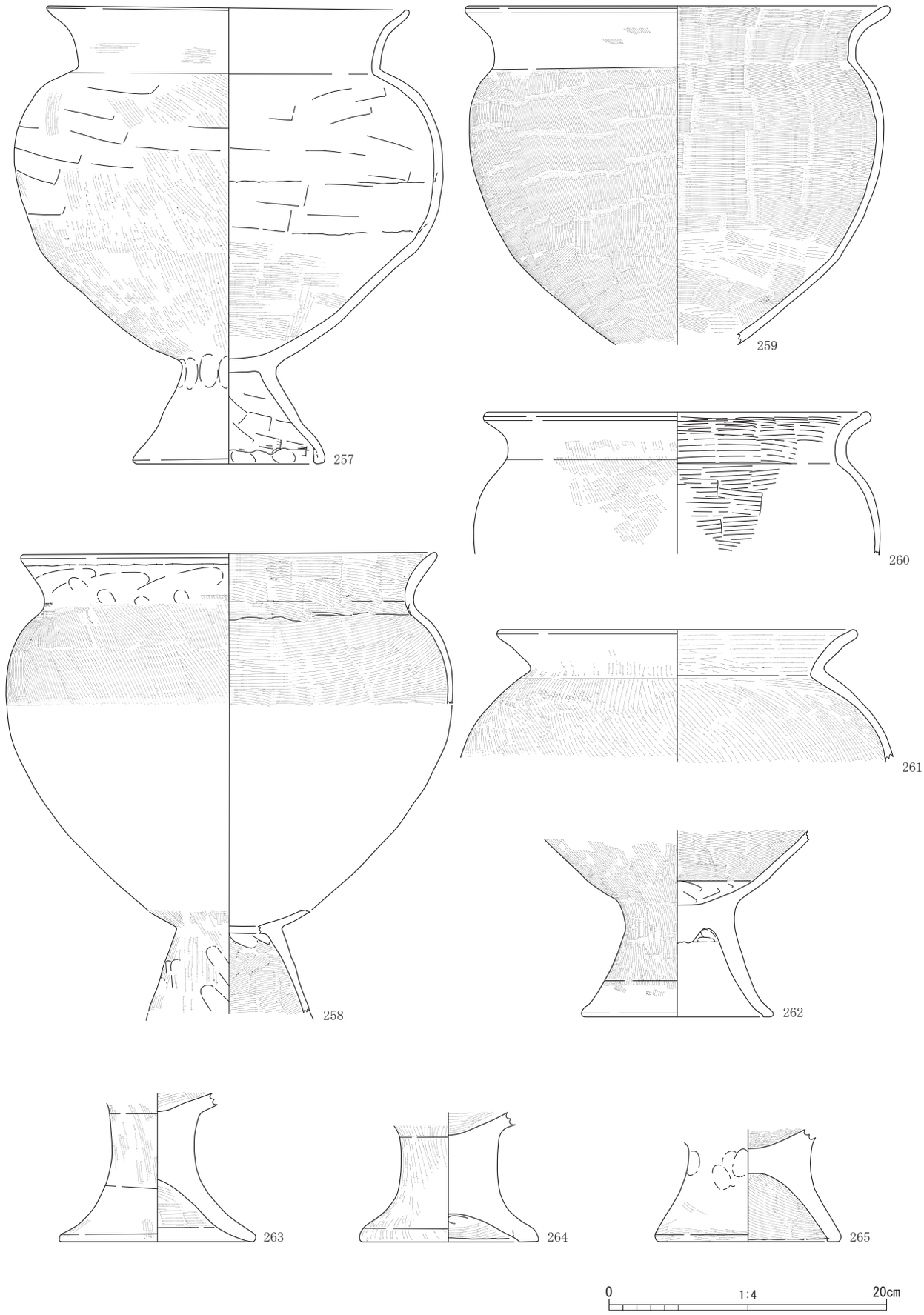


Fig.93　Ⅶ層　出土遺物（14）

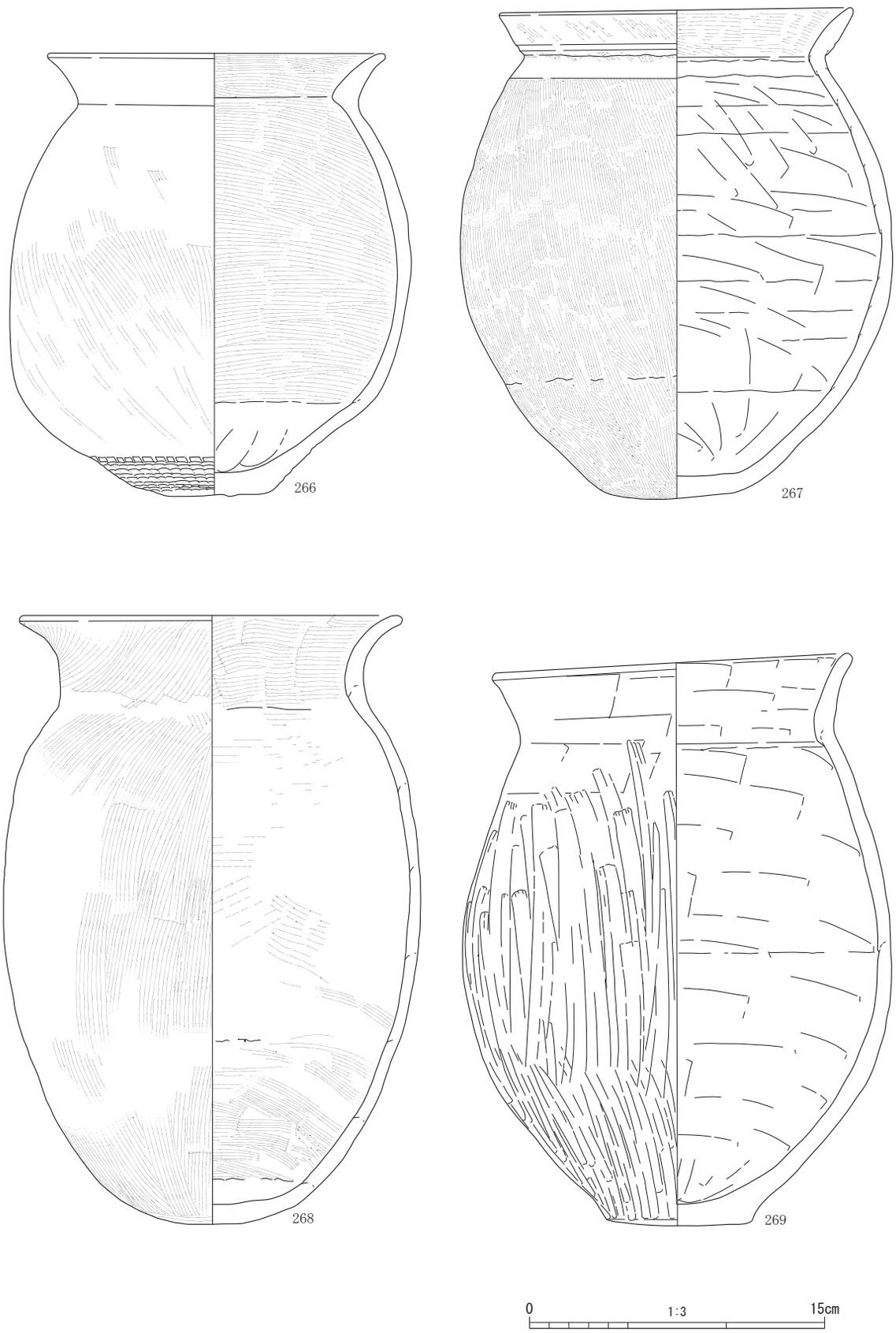


Fig.94　Ⅶ層　出土遺物（15）

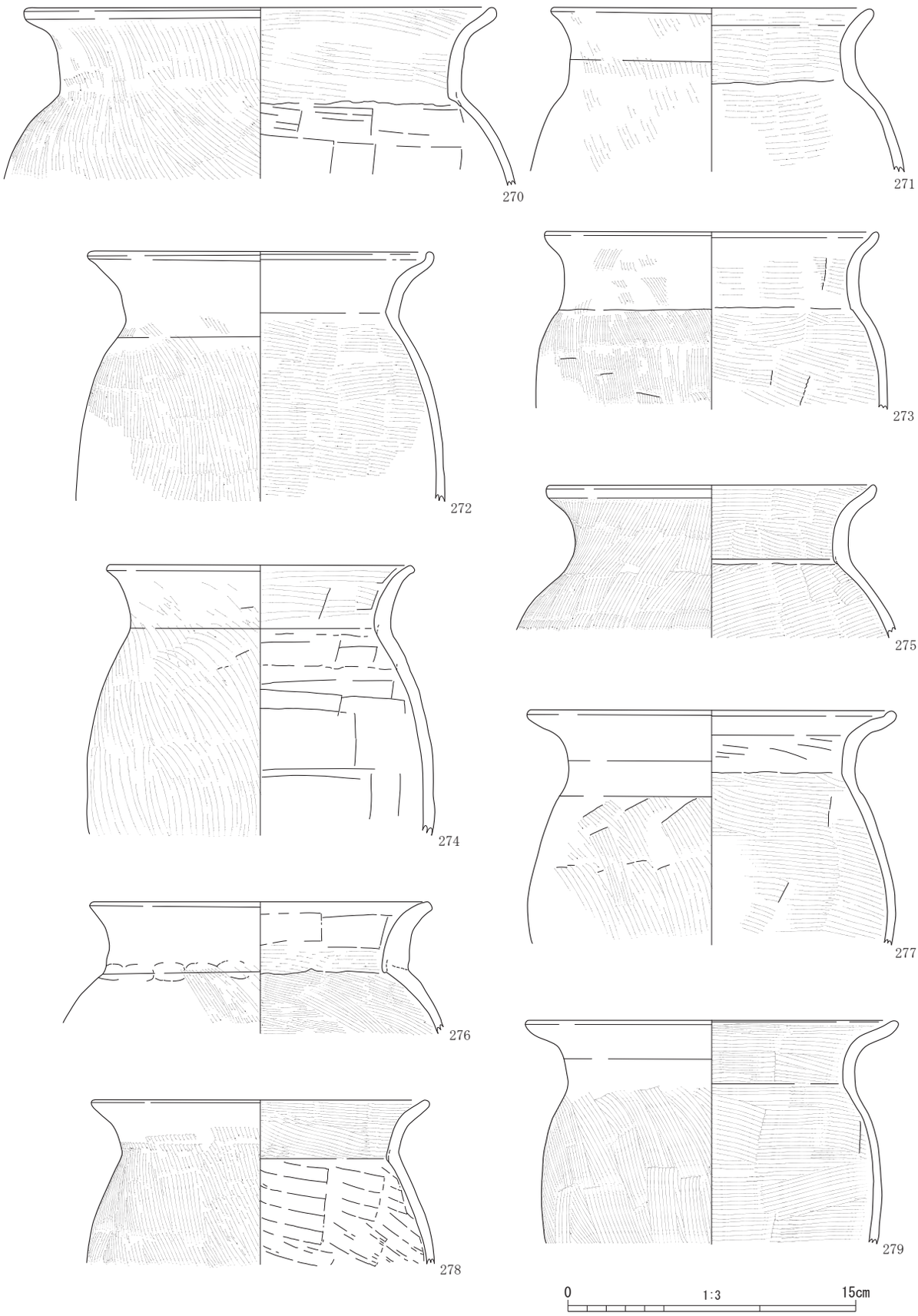


Fig.95　Ⅶ層　出土遺物（16）

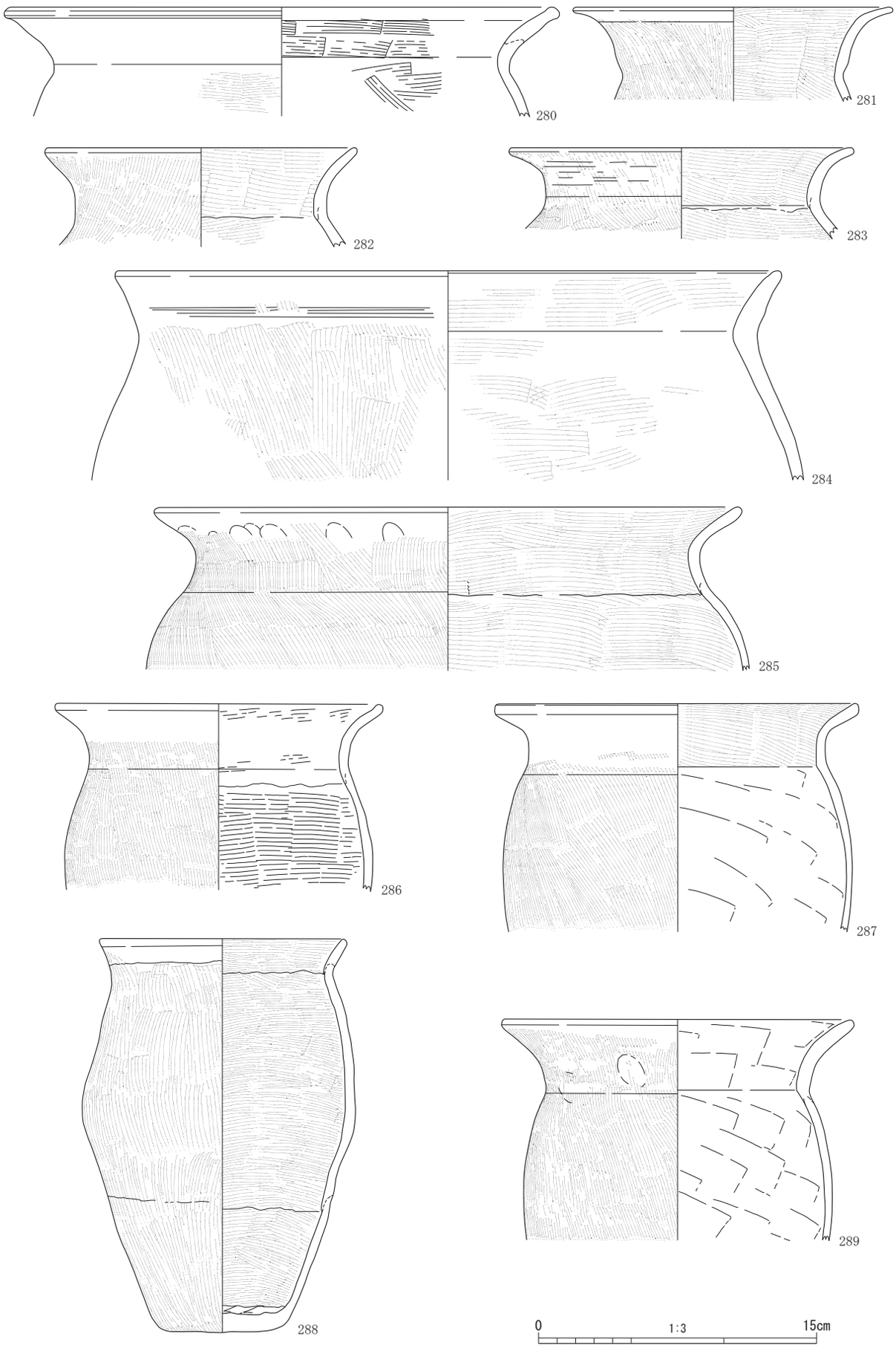


Fig.96　Ⅶ層　出土遺物（17）

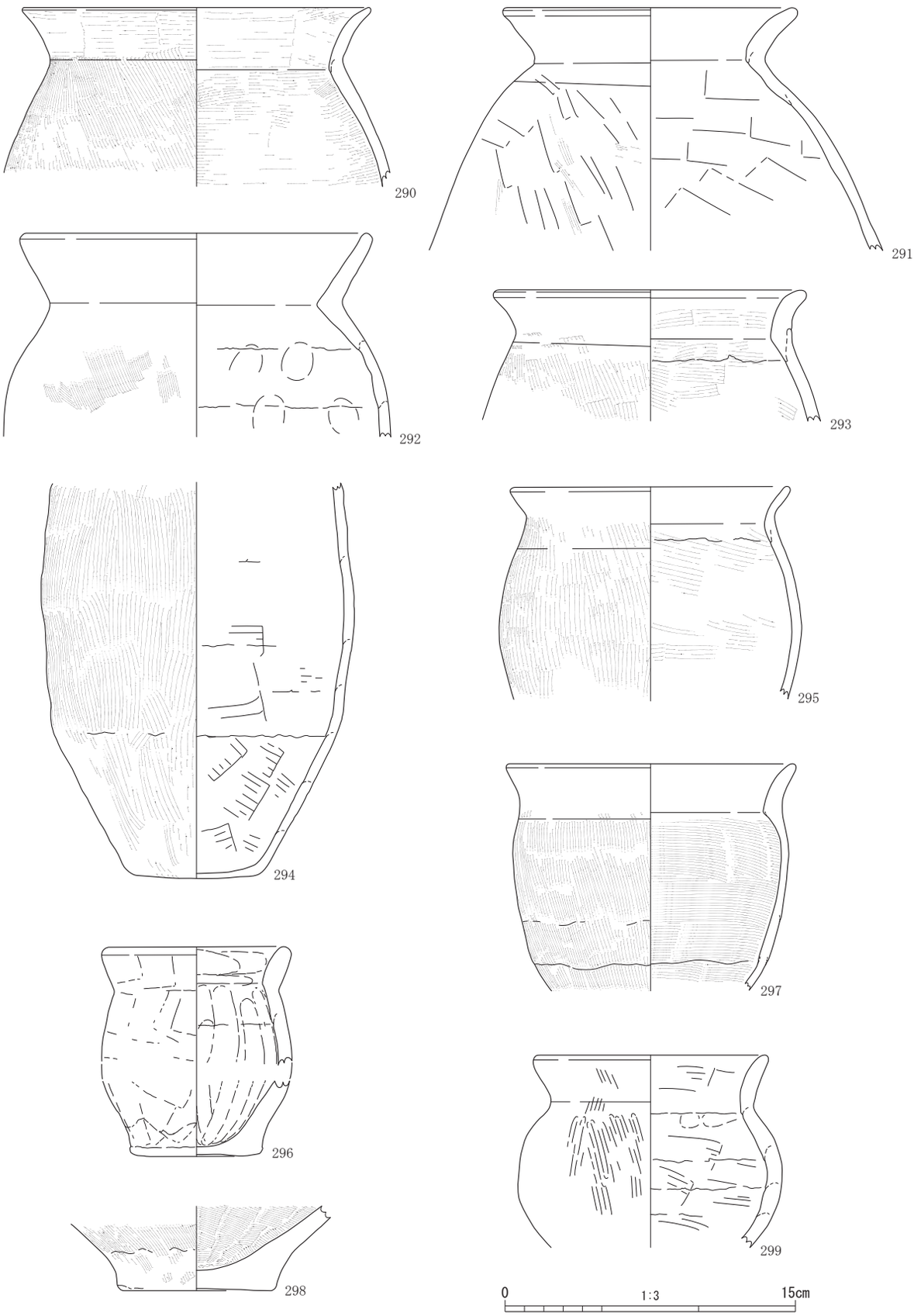


Fig.97　Ⅶ層　出土遺物（18）

Fig.98　Ⅶ層　出土遺物（19）

が存在する。台付甕は全般的に口径が大きく、底部には台形型の脚部が付く。脚部には中空のものと、中実になるものが存在する。無台の甕は、小型かつ短胴のものと長胴のものがある。長胴甕の肩部は張っておらず、底部は丸底で楕円形に近い形状である。長胴甕は7世紀以降長胴化と平底化が進んでいくが、その前段階の特徴を良く示している。266の底部には網代痕が遺る。299は甕

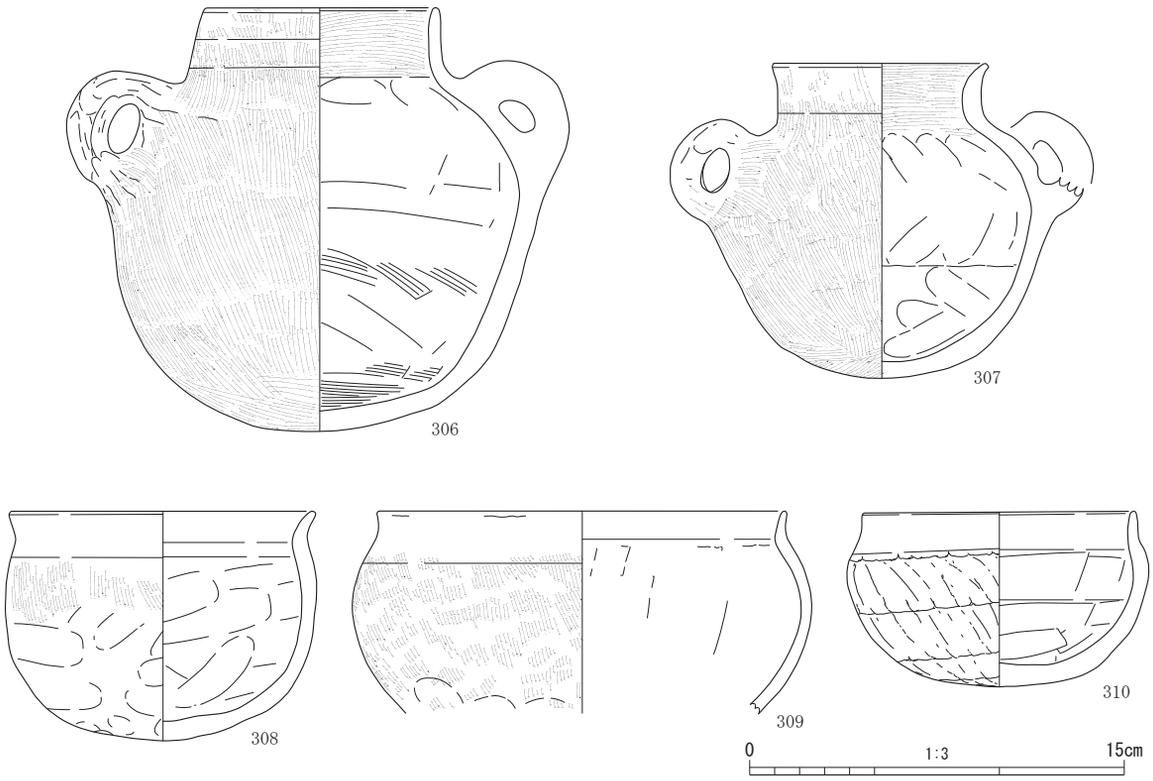


Fig.99　Ⅶ層　出土遺物（20）

に分類したが、壷の可能性もある。300 ～ 304 は甑である。300 は底部の窄まりが砲弾型になる古式の形態である。305 は大型の把手付鉢。306・307 は耳付短頸壷。308 ～ 325 は鉢である。形態は大きく分けて３形態あり、口縁が短く外反する 308 ～ 310 のようなもの、315 ～ 320 のような口縁が内彎するもの。318 は須恵質である。321 ～ 325 のような外形が逆台形を呈するものがある。326 ～ 328 は小型模倣品、それぞれ鉢、碗、小壷を模倣している。

土製品（Fig.100）329 ～ 332 は土製品である。329 は支脚か。330 は焼成前に穿孔しており、勾玉を模したものか。331 は土製円盤。中央部に穿孔を有する。332 は筒状の土製品、土錘か。

金属製品（Fig.101）333 は鉄斧である。基部を袋状にする所謂、袋状鉄斧。刃線を若干欠く。長さ 9.9 ㎝、幅 4.0 ㎝、基部径 2.5 ～ 3.15 ㎝、刃部厚 0.8 ㎝、重さ 153.8g。

玉類（Fig.101）334 は管玉、長さ 2.95 ㎝、幅 0.91 ㎝、径 0.89 ㎝、重さ 4.2g。材質は碧玉。335 は小玉。長さ 1.1 ㎝、径 1.0 ㎝、厚さ 0.8 ㎝、重さ 1.1g。

石製品（Fig.101 ～ 103）336 ～ 353 は石製品である。336 は石斧、337 は玉砥石、338 は石錘か。339・342・345・347・350 は磨石。340・341・343・344・346・348・349 は砥石。

木製品（Fig.104 ～ 111）Ⅶ層から出土した木製品は、47 点を図示した。351 ～ 354 は形代。351 は長さ 30.2 ㎝の舟形。352 は長さ 13.5 ㎝、幅 3.3 ㎝、厚さ 0.7 ㎝の両端を尖らせた薄い板状木製品。舟形もしくは斎串と考えられる。353・354 はともに先端を刃のように尖らせている武器形。355 は刻歯式の横櫛。他層出土のものと法量的にはほぼ同じであるが棟（胴）に稲妻文の透かし彫を有する。356 は横杓子か。357 ～ 360 は木錘である。360 のみ形状、径や長さが異なる。361 は下駄。362 は竪杵を転用した木製品か。363 は長さ 32.0 ㎝、径 4.0 ㎝の杭状の木製品。上部に螺旋状の抉りがある。陽物形を部材に転用したものか。365 は曲物底板、径は 36.2 ㎝。366 は大きさや形状か

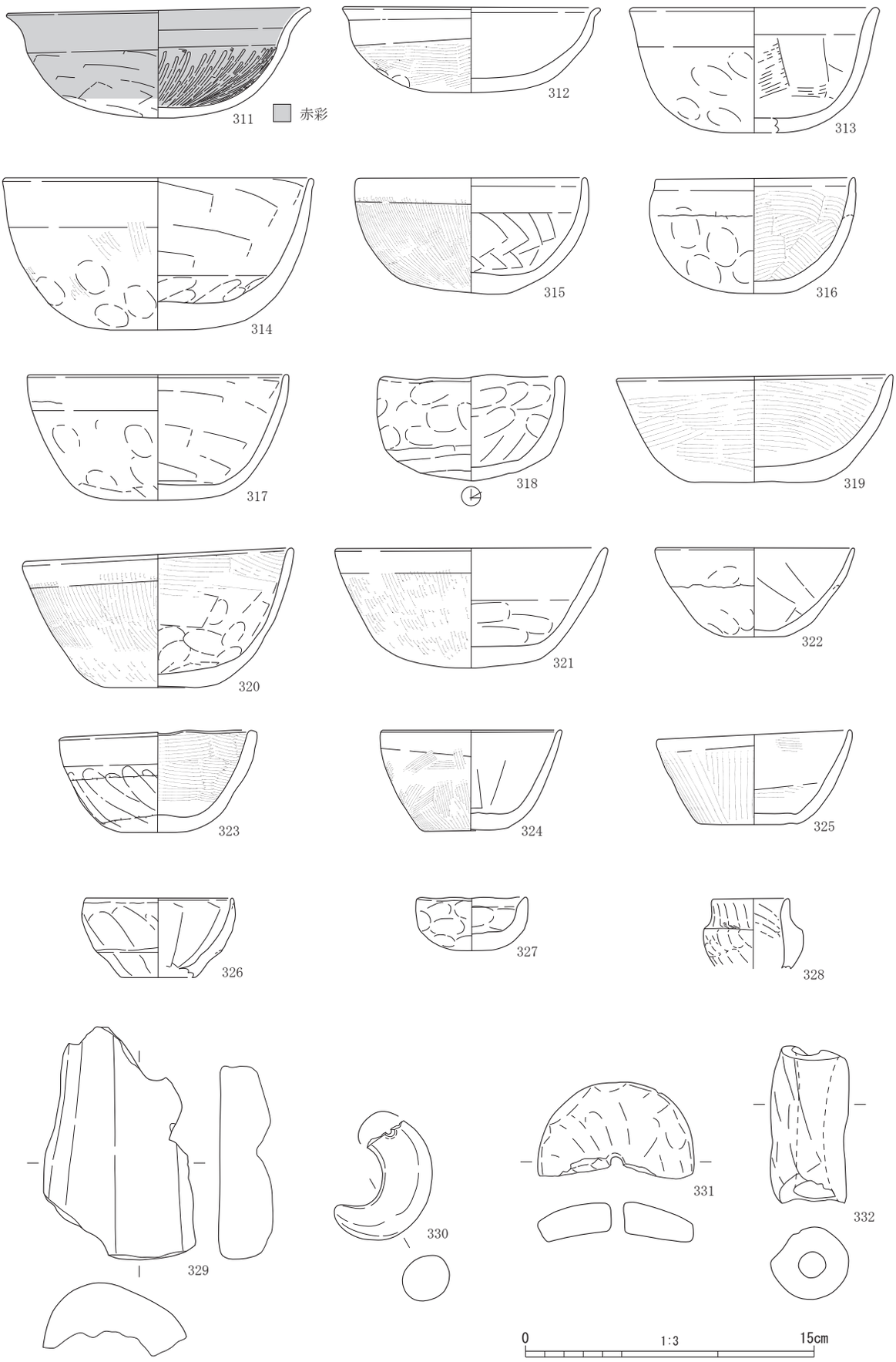


Fig.100　Ⅶ層　出土遺物（21）

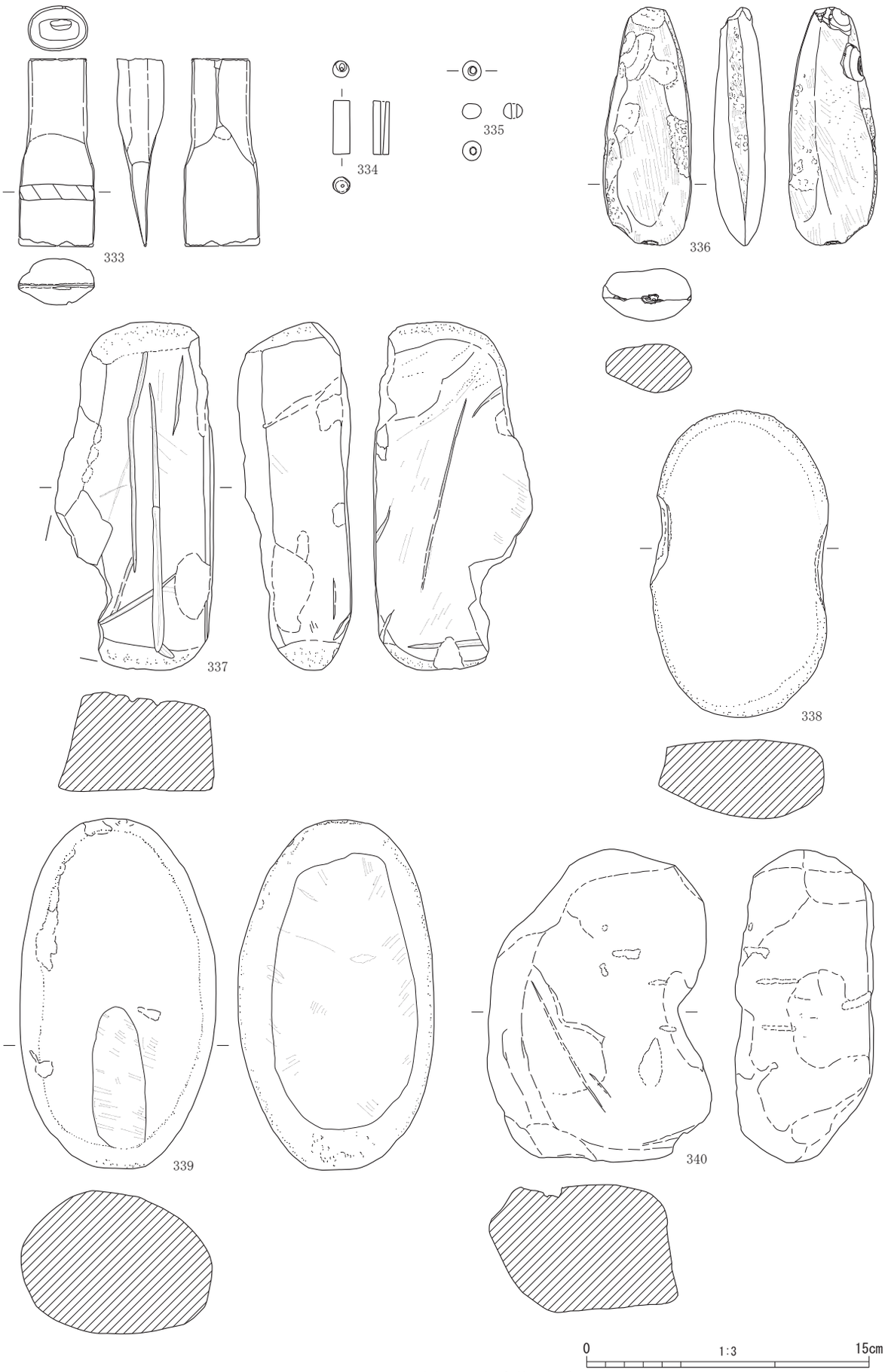


Fig.101　Ⅶ層　出土遺物（22）

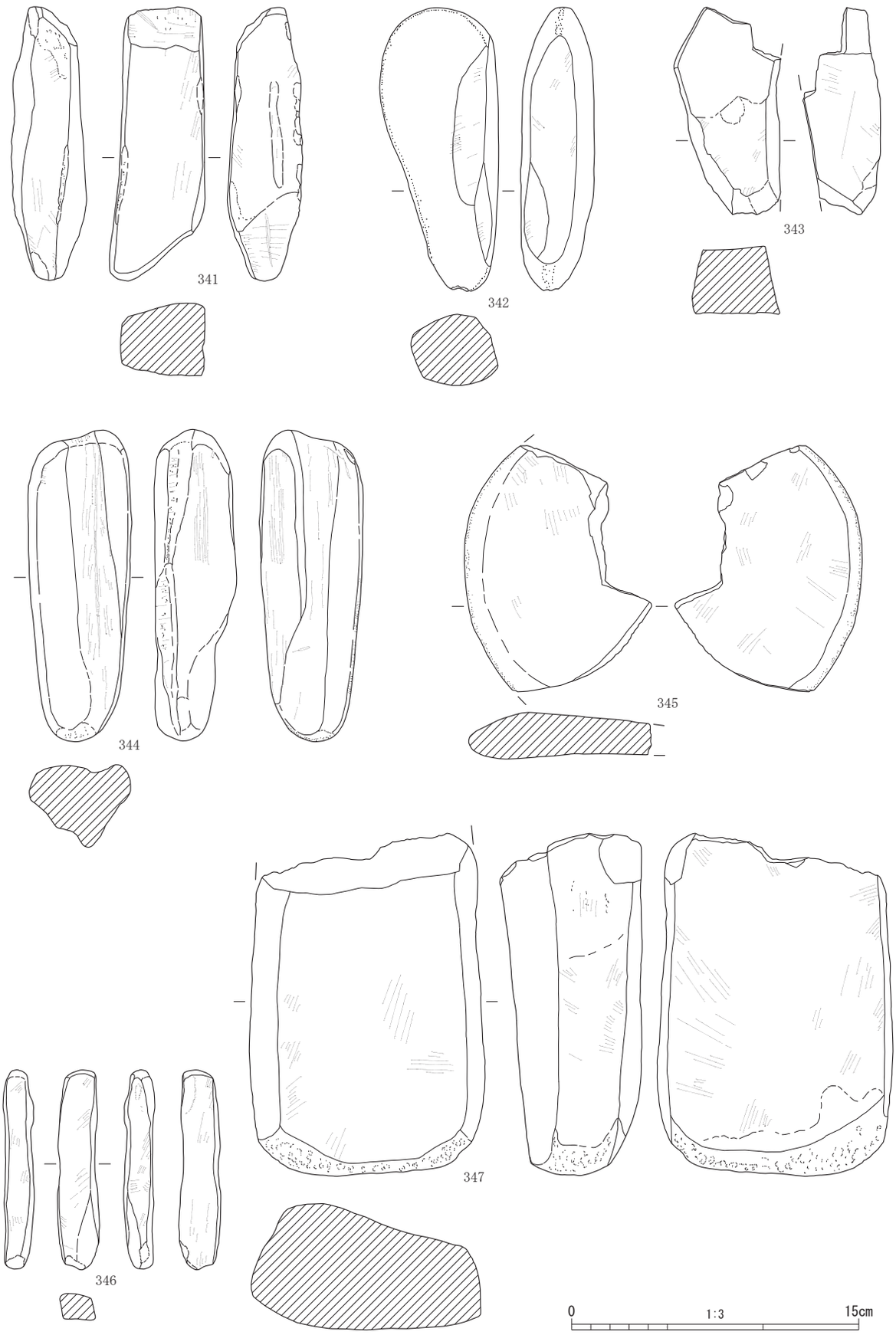


Fig.102　Ⅶ層　出土遺物（23）

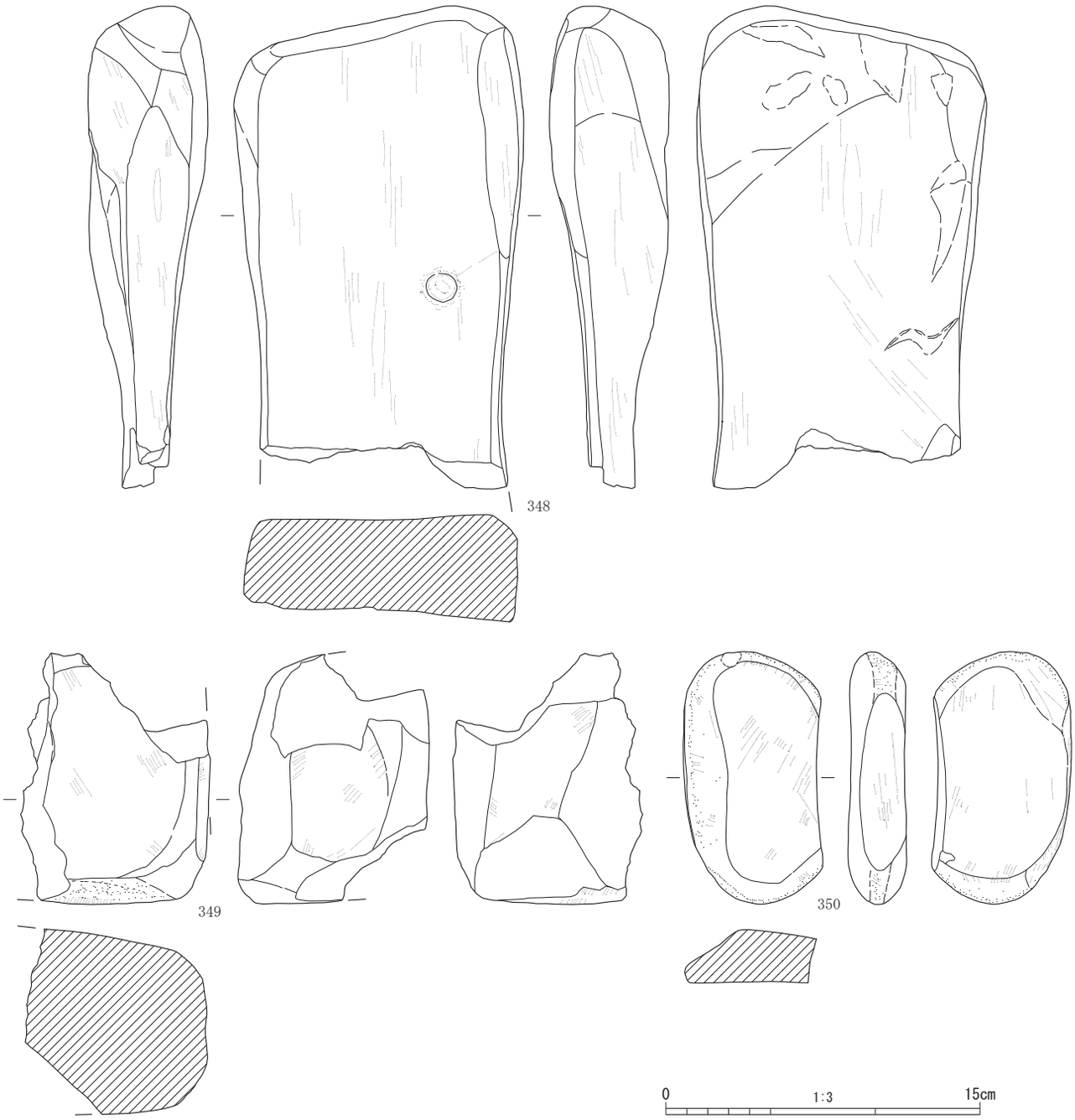


Fig.103　Ⅶ層　出土遺物（24）

ら田下駄の可能性も考えられる。367・371 ～ 373 は有孔板。371 ～ 373 は形状から木簡の可能性もあるが文字などは確認できない。369 は所謂、Ｙ字型木製品と称されている木製品。375 ～ 380 は部材。顕著な加工が確認できるが用途は不明。381 ～ 384・390 は杭などの先端部。385・386 は竪杵。385 は復元長 82.5 ㎝、握り部の径２～３㎝、使用部の径は約８㎝となる。使用部の片側が全体的に摩耗しており歪である。片側を杵、もう片側を横槌として使用した可能性も考えられる。387 は残存長 75.5 ㎝、幅 10.6 ㎝、厚さ 2.5 ㎝の櫂状の木製品。櫂としては、短く幅も厚みもなく別の用途が考えられる。389 は有頭の長さ 77.2 ㎝の棒状木製品。有頭の反対側の加工痕が顕著でないことから陽物形の未製品の可能性がある。393 は長さ 135.5 ㎝、径約５㎝程度の細長い有頭の棒状木製品。先端は尖らせている。364・380・391・392・394 ～ 397 は棒状の部材である。368 はやや扁

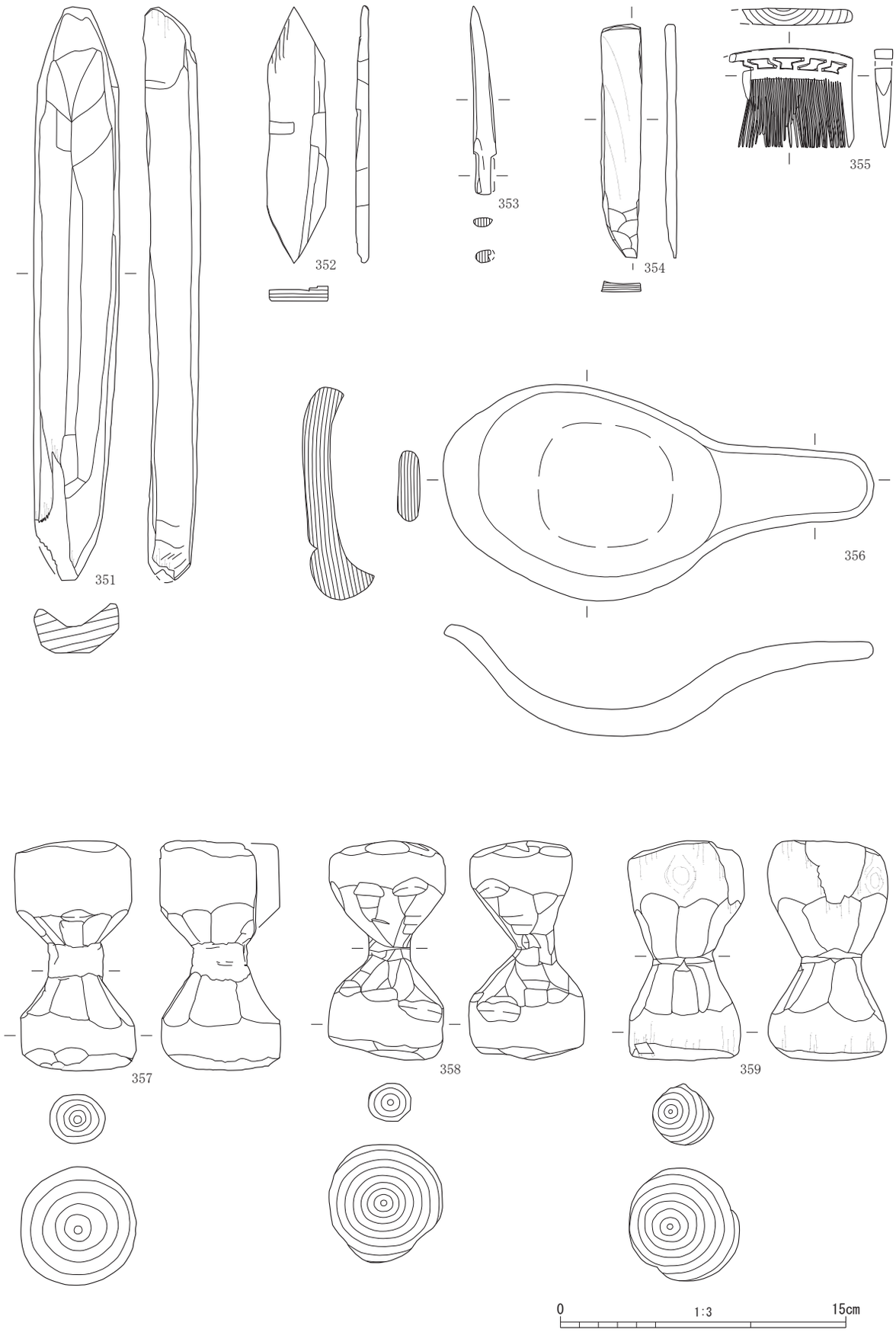


Fig.104　Ⅶ層　出土遺物（25）

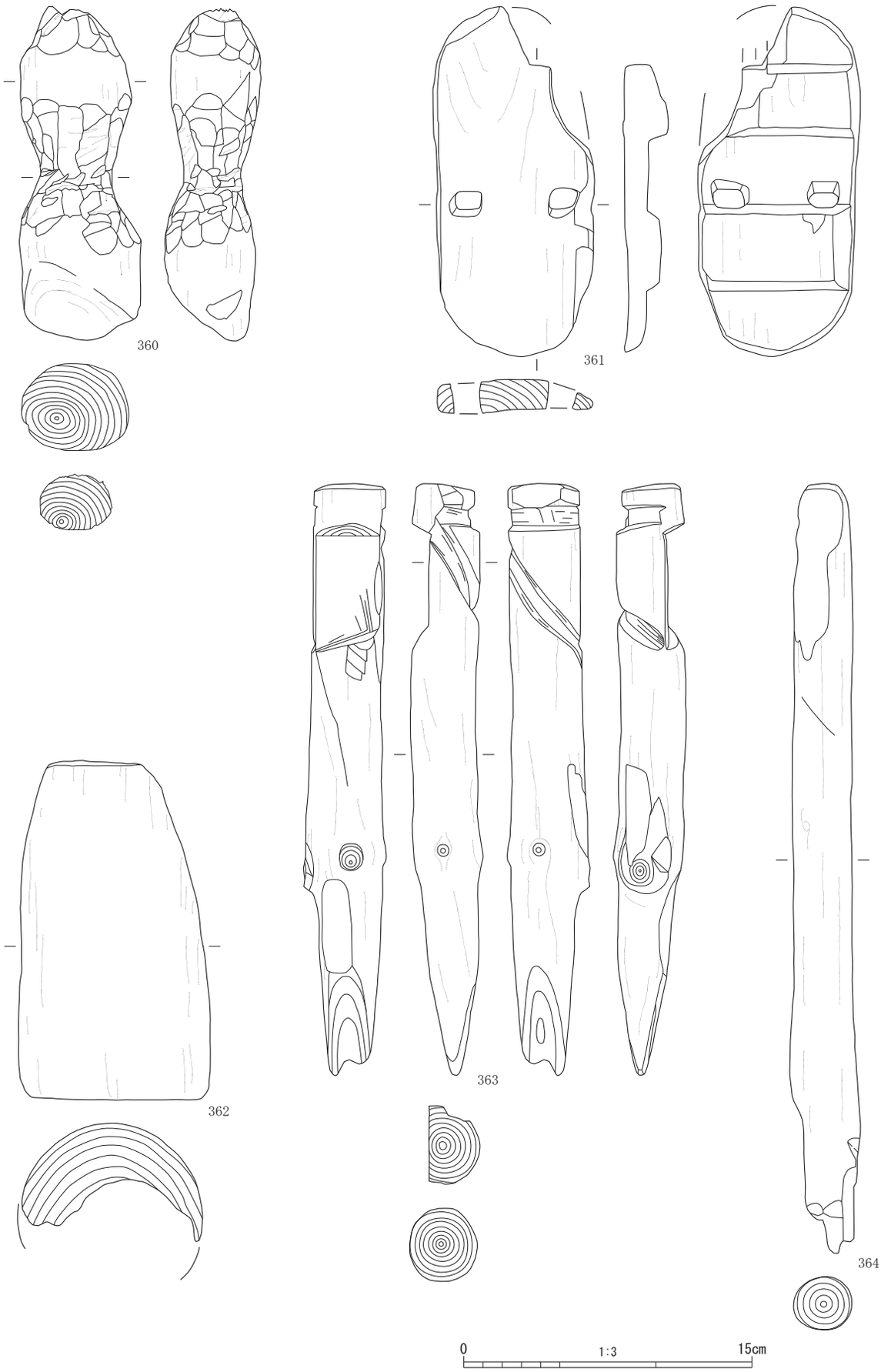


Fig.105　Ⅶ層　出土遺物（26）

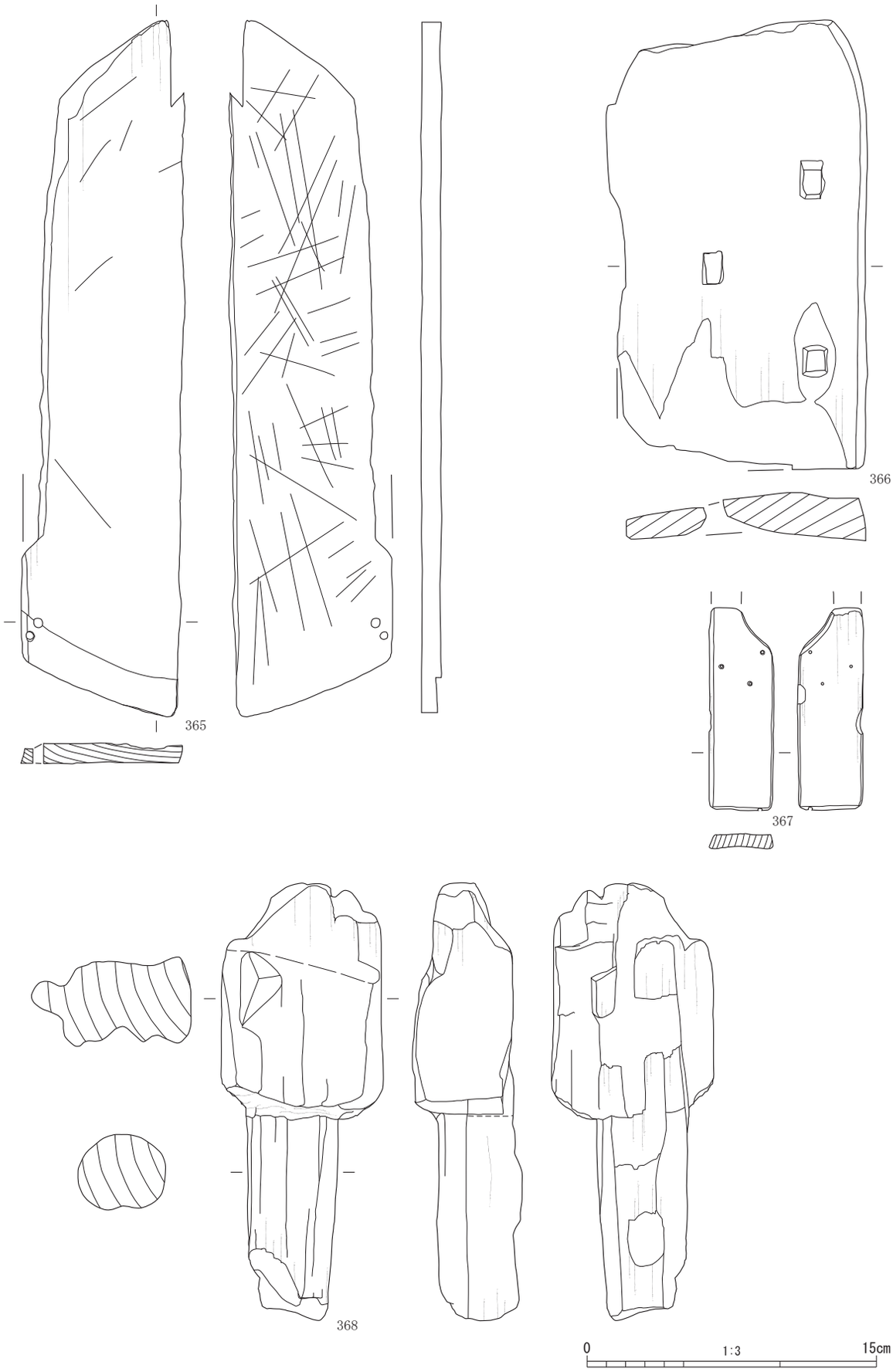


Fig.106　Ⅶ層　出土遺物（27）

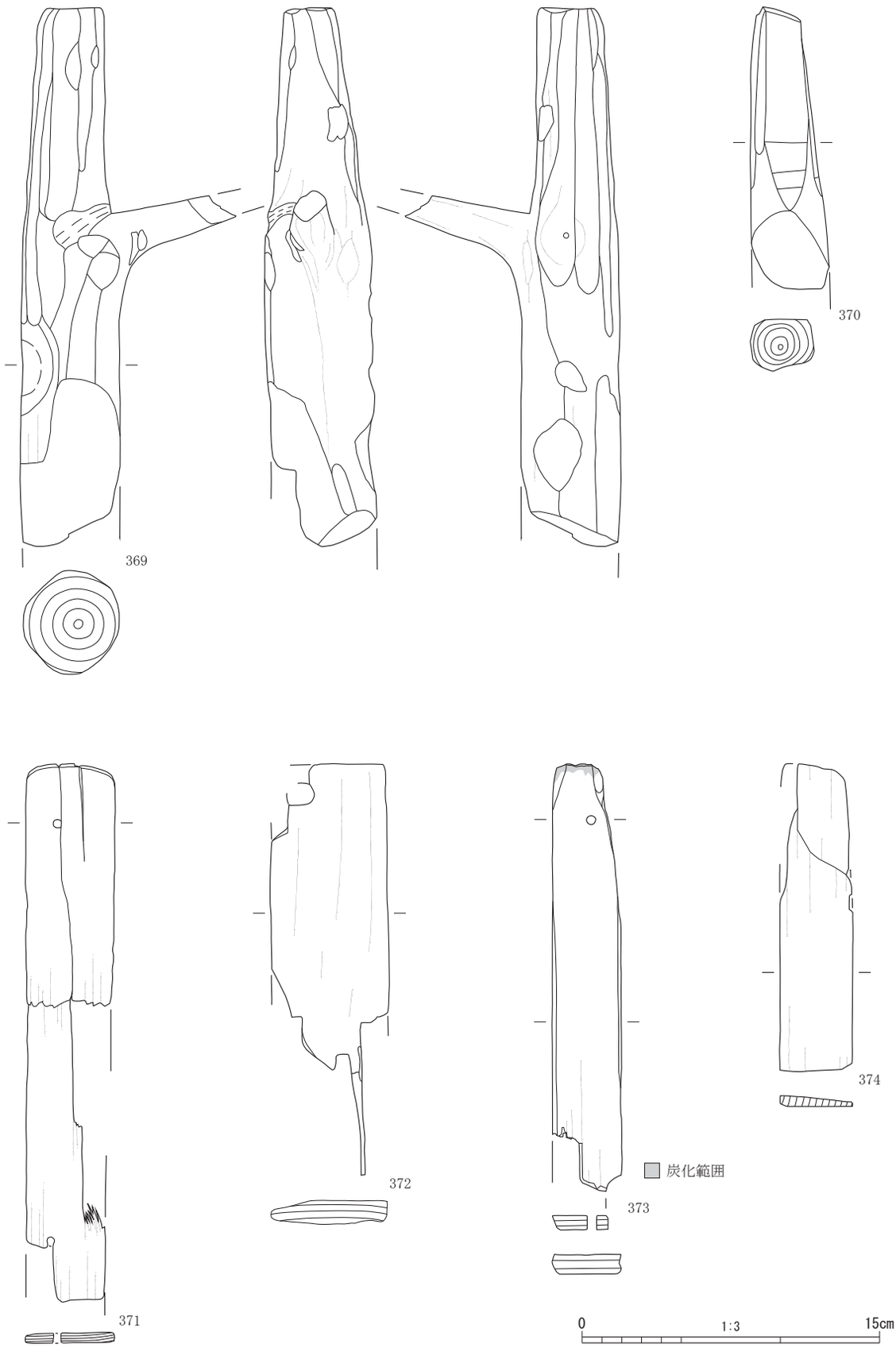


Fig.107　Ⅶ層　出土遺物（28）

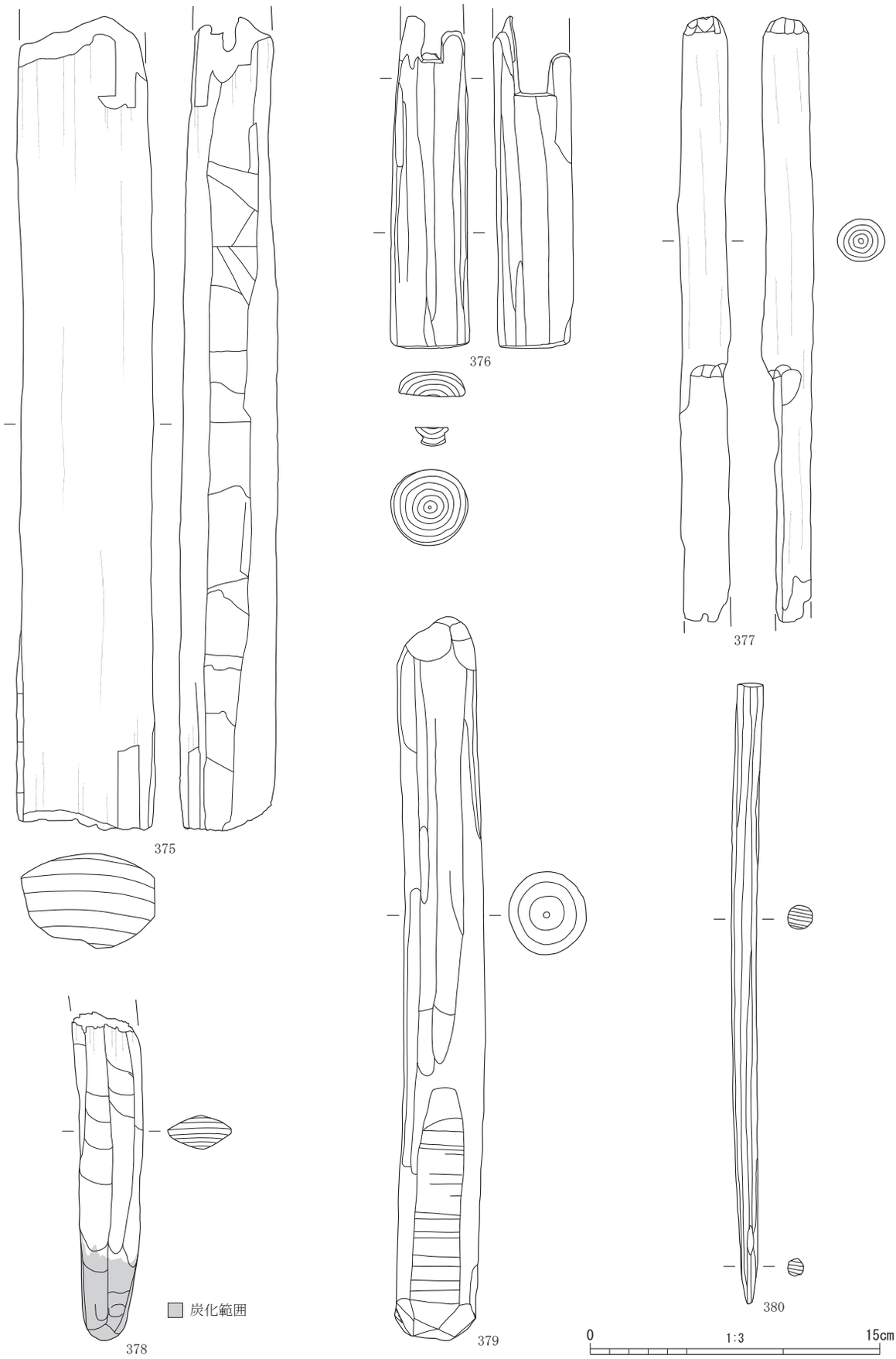


Fig.108　Ⅶ層　出土遺物（29）

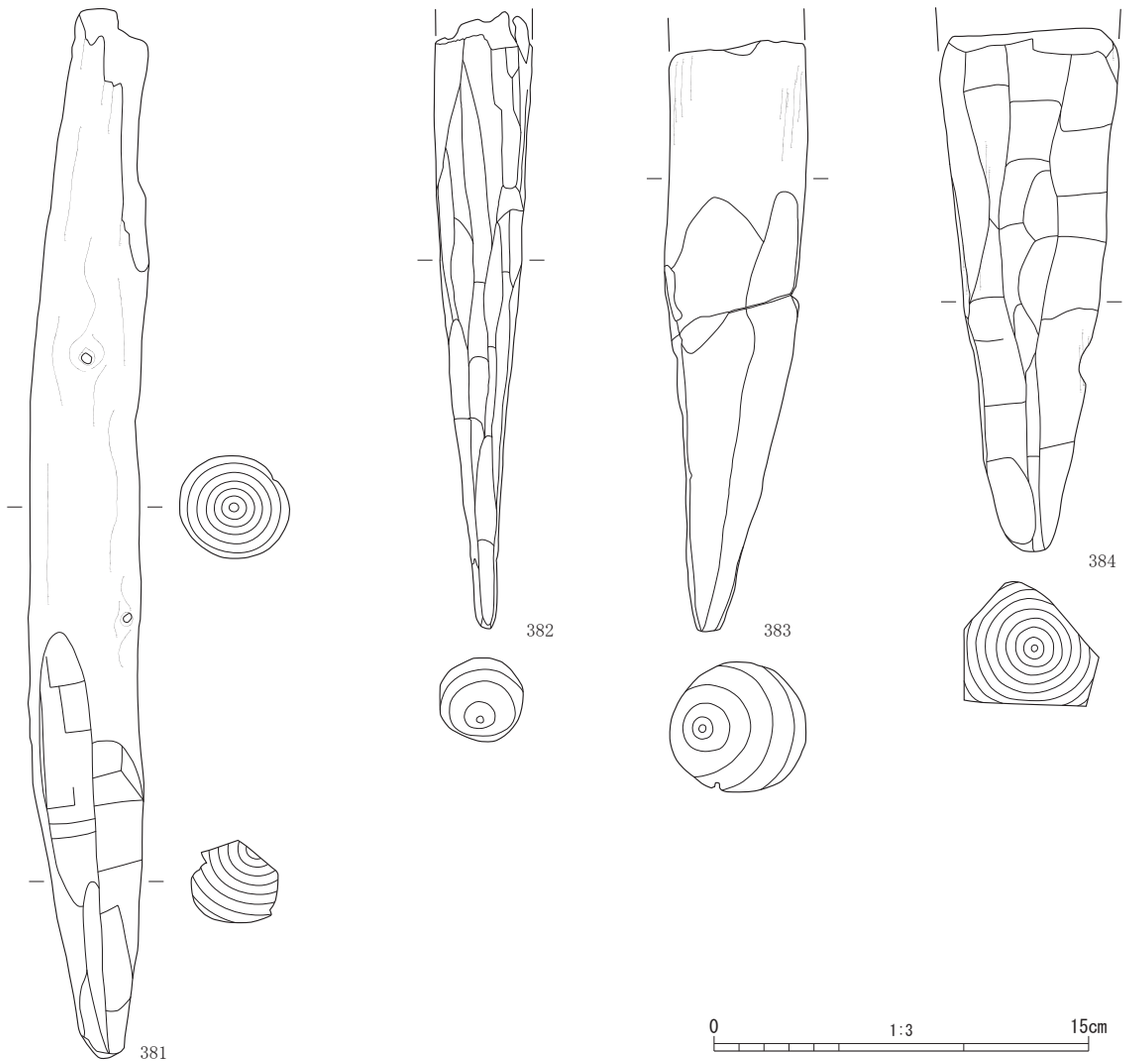


Fig.109　Ⅶ層　出土遺物（30）

平な有頭。379 は完存する。380 は留針か。391 は片側の端部を銛先のように加工している。392 は両端を細く加工していることから織機の可能性も考えられる。370・375・376・388 はすべて部材。376 はホゾ穴のような加工がある。378 は先端部が炭化している。388 は長さ 52.3 ㎝の部材。１箇所に浅い抉りと径 0.6 ～ 0.8 ㎝程の穿孔がある。端部の太い方に緩やかに湾曲する。

(5) 小結

Ⅶ層の遺物は大溝の底面及び底面付近から大量に出土した。種類も多く土器、木製品、石器、金属器、玉類等も出土している。大溝の上流に位置する梶子遺跡 13 次調査や下流に位置する鳥居松遺跡５次調査おいても同様な状況が確認されている。本調査では、この時期の遺物は概ね古墳時代後期（６世紀中葉～７世紀）であり、Ⅶ層堆積の開始時期について再認識できたことは大きい。

Ⅶ層は水流により下層のⅧ層を破壊し大溝の底面を形成したと考えられる。鳥居松遺跡５次調査では溝の底面より川底溝が確認され、19 次調査では底面に大きな窪みを５箇所確認している。砂が多く含まれる層を堆積することから、水量は豊富で激しい水流であったと推定され、洪水等の周囲への影響も窺える。またⅦ層以前の枝溝である SD314 を検出したことも大きな成果であった。

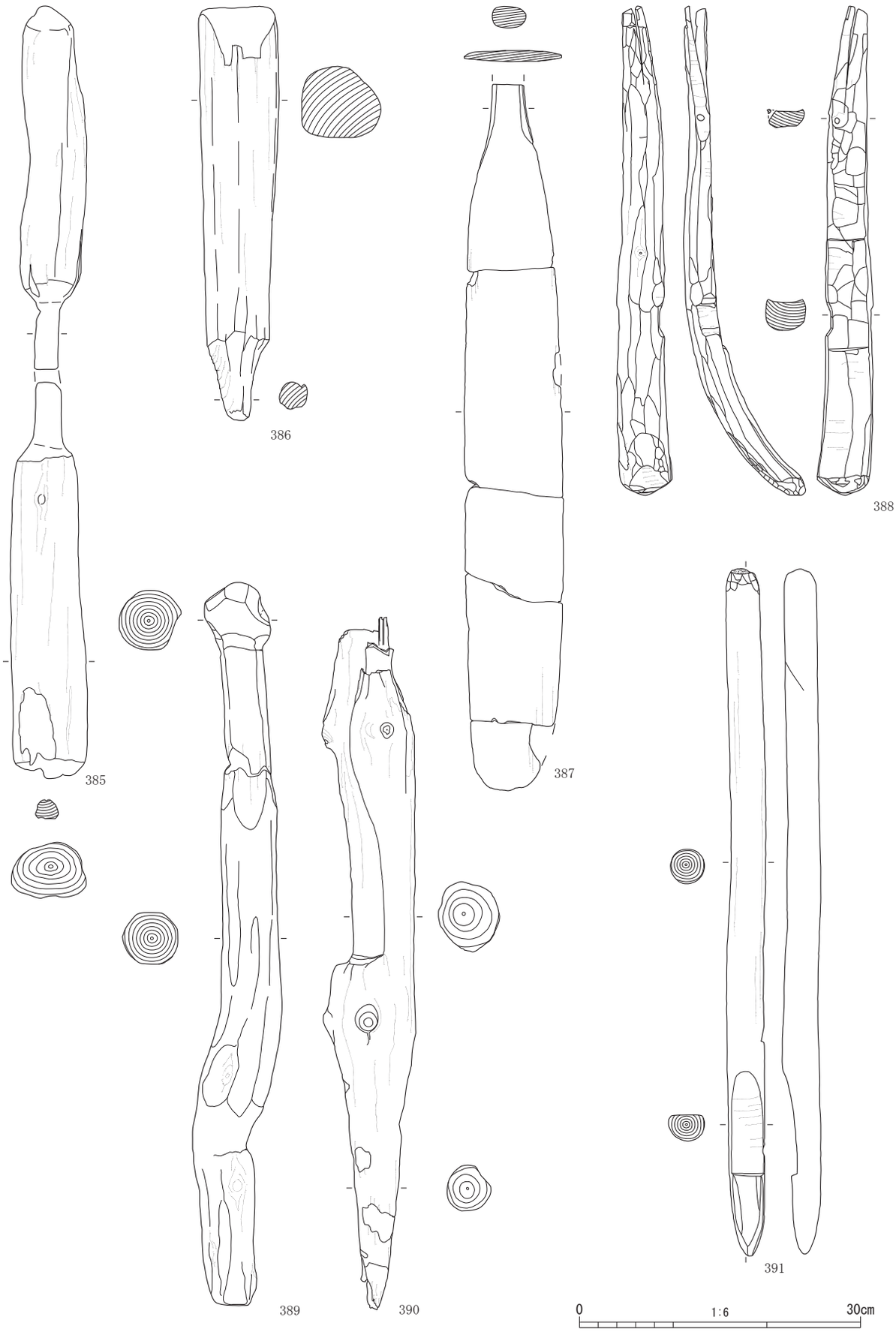


Fig.110　Ⅶ層　出土遺物（31）

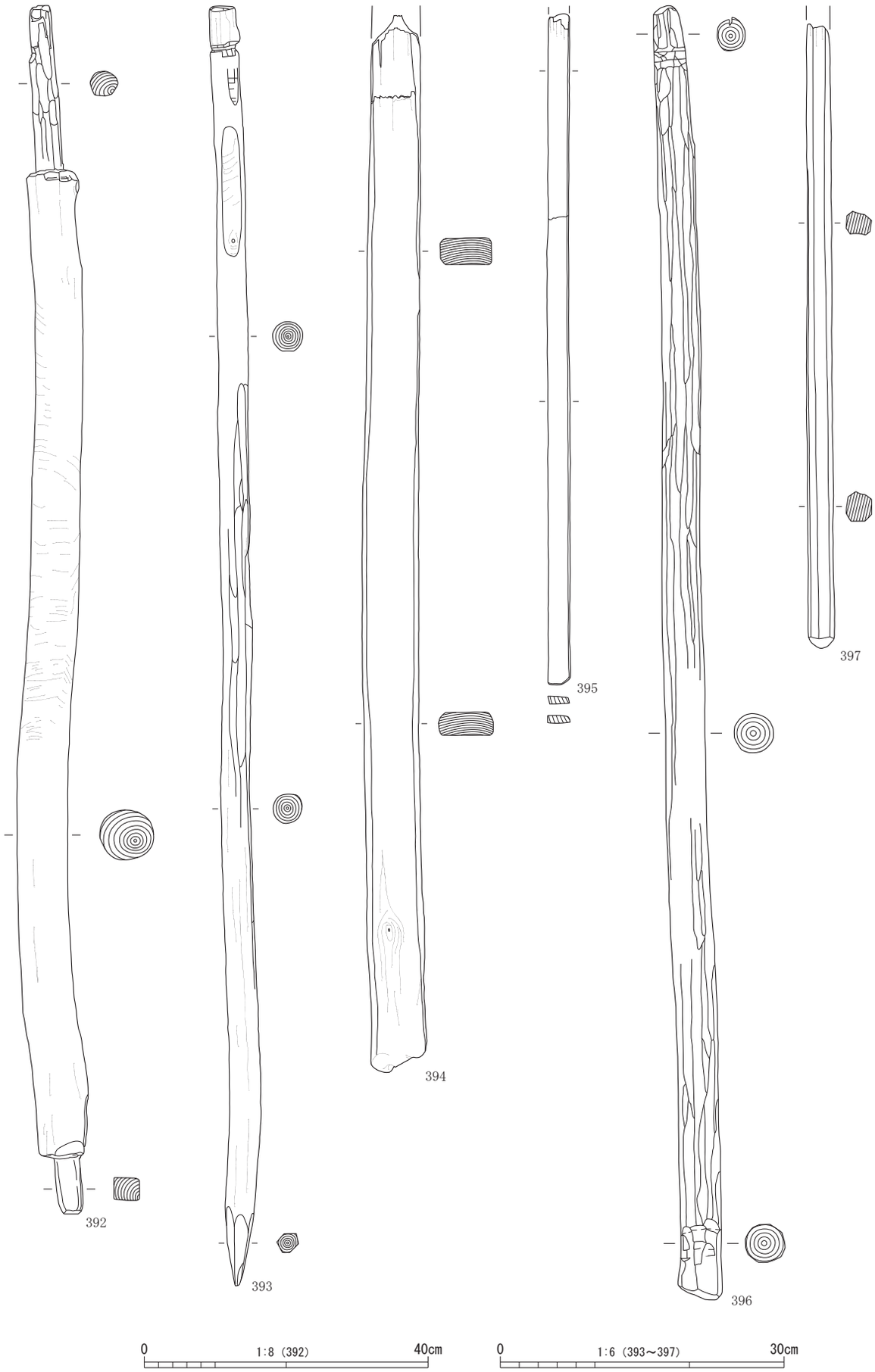


Fig.111　Ⅶ層　出土遺物（32）

5　伊場大溝Ⅴ層の調査

(1) 概要

Ⅴ層は、褐色、灰色シルトを基本とする層位で奈良時代（８世紀前葉～中葉）に堆積した層である。上層のⅣ層と比較して植物遺体を含む割合が多いが堆積土は類似しているためⅣ層との識別は出土遺物の時期や溝底の標高などを踏まえて分層した。

Ⅶ層と比較すると、埋没により溝幅が狭くなり深度が浅くなる。大溝に関連する遺構として貝塚５箇所、護岸状遺構１箇所、枝溝１条を確認した。検出された遺構は大溝の南岸から底面付近に集中する傾向がみられ、急傾斜の北岸では確認されず、Ⅶ層やⅣ層でも同様な状況がみられる。護岸状遺構（SX03）は土留と考えられる木製構造物で、直下に貝塚（SS11）の形成が確認される。

過去の伊場大溝の調査では、木簡や墨書土器など敷智郡家関連遺物が多数出土しているが本調査でも同様、木簡や墨書土器などの文字資料の他に絵馬や斎串、舟形などの木製祭祀具が出土している。特に木簡は８点出土しており、うち梶子 28 号木簡は「天平十六」とあり、年号と考えられる記述がなされている。なお、遺物の出土傾向を検討するため大溝を北西部、南東部の２箇所に分け遺物を示す。

(2) 伊場大溝の形状

Ⅴ層の大溝は、幅 13.6 ｍ、最深部は標高 -1.4 ｍ程で遺構検出面からの深さは 1.80 ｍである。流路はほぼ直線的に延びるが、南東側で僅かに西側に湾曲する。底面は落ち込みを有するⅦ層と異なり、ほぼ平坦となる。大溝の北岸は等高線が密で急傾斜となる。南岸は調査区北東側や中央部付近の一部で急傾斜となるが、北岸と比較するとやや緩やかな傾斜となる。伊場遺跡の調査にて確認されたⅤ層とⅦ層を分層する砂層であるⅥ層は、本調査では確認できなかった。Ⅴ層内に植物遺体が多く含まれていることから大溝内を流れる水量が減少、または穏やかになった結果、植物が繁茂していた環境であったと推定される。

(3) 遺物の出土状態

遺物出土の傾向　Ⅴ層における遺物の出土状態は、大溝南岸にやや集中する傾向がみられる。ただし、北岸部においても遺物が多く出土する地点が確認される。Ⅶ層では水量が多く、岸辺に廃棄された遺物が大溝の底に遺物が集中するのに対して、Ⅴ層では前述のとおり水の流れが穏やかなため、岸辺に廃棄した遺物が流されずに停滞して比較的岸辺に近い場所に集中する出土状態となったと推測される。Ⅶ層と比較すると木製品の出土量が増加傾向にある。

土器　Ⅴ層では比較的岸辺に遺物が集中し、やや南岸に偏る。１箇所に遺物が集積する出土状態は確認されていないが、貝塚内またはその周囲に遺物が出土することから貝類とともに土器などを廃棄していたと考えられる。本調査では貝塚内含め製塩土器が多数出土している。また、過去の調査では墨書土器が多く出土しているが、本調査でも大溝南東部を中心に多数出土している。墨書土器など郡家に関連する遺物が出土していることから近隣に敷智郡家に関連する施設等が存在してい

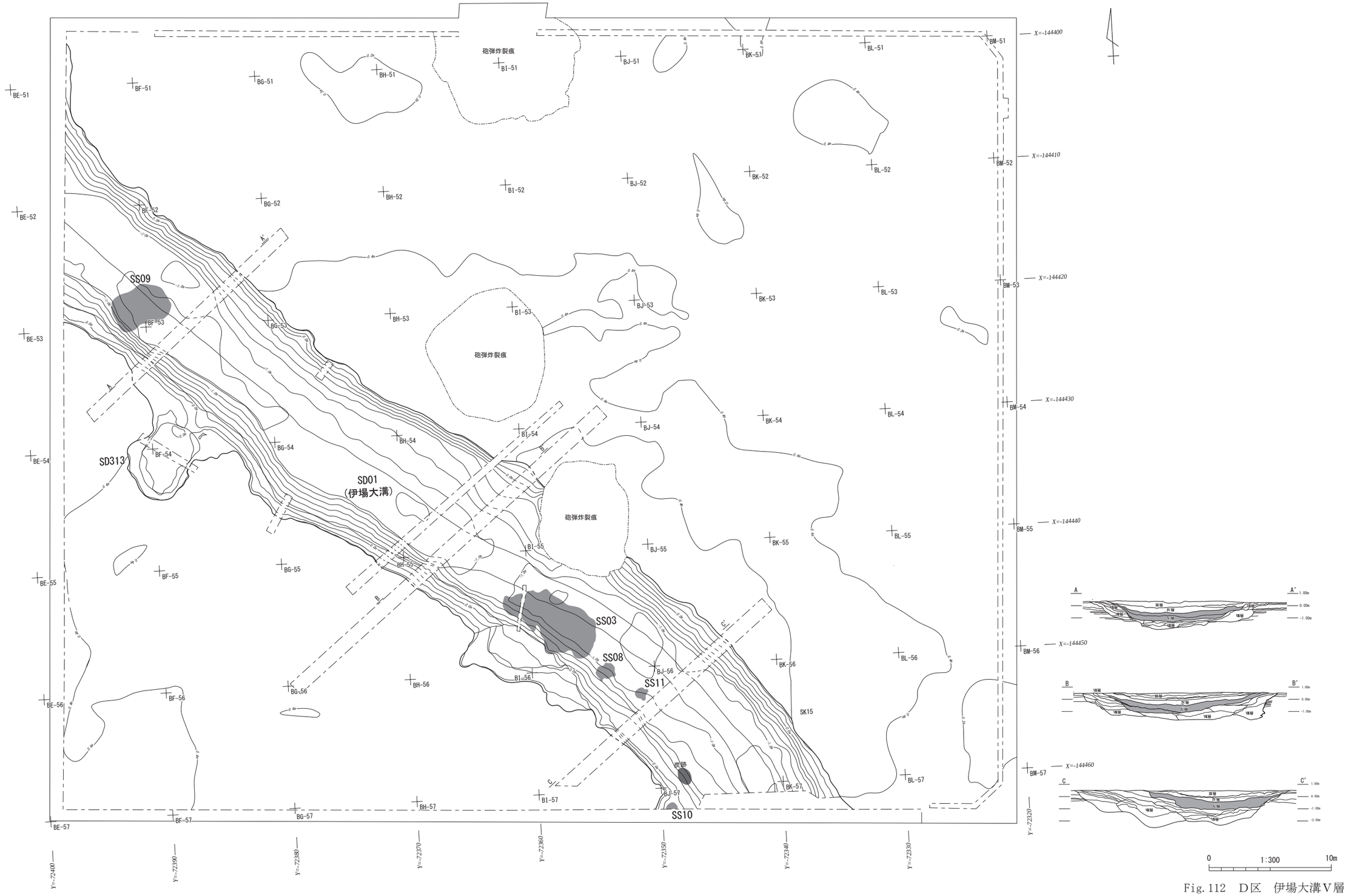


Fig.112　Ｄ区　伊場大溝Ｖ層

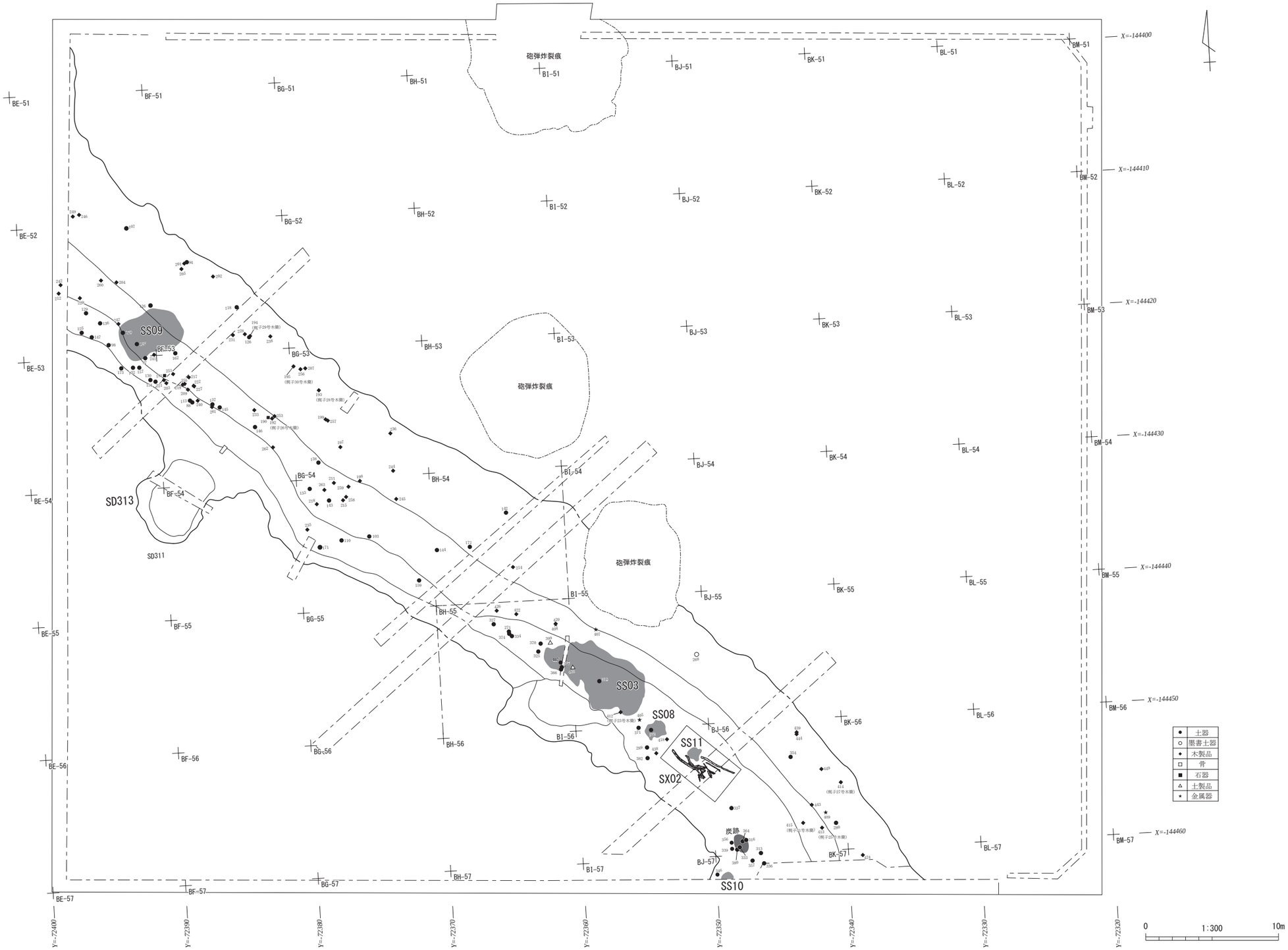


Fig. 113　D区　Ⅴ層における遺物出土位置

たと考えられる。

木製品　土器とほぼ同じ出土状態が確認される。流されやすい木製品がこのような出土状態であることは、大溝内の水流が穏やかで比較的流されにくい環境下であったことがうかがえる。出土遺物は、用途不明の組み物や大型曲物の底板、鋤や鍬、馬鍬などの農具、織物関連の道具と考えられる木錘、Ｙ字形木製品など多数出土している。他にも絵馬や舟形、斎串、人形など祭祀関連の遺物が多数出土しており、特に人形（197）は上部に人面が墨書されている。

木簡　本調査ではＶ層から木簡８点が多数出土しており、伊場大溝内で２箇所ややまとまった出土状態を示す。北西部から４点（梶子 26 号木簡・192、28 ～ 30 号木簡・193 ～ 195）、南東部から４点（梶子 23 号木簡・412、25 号木簡・413、27 号木簡・414、31 号木簡・415）出土している。出土位置は北西部、南西部ともにややまとまる傾向が確認される。特記すべき事項として梶子 28 号木簡（193）が挙げられる。28 号木簡は「天平十六」と明記されており、年号の可能性がある。天平十六年（744 年）とすればＶ層の堆積した年代と一致する。

その他の遺物　土製品では陶質の土馬（399）が南岸より出土している。その他に革袋形土製品が出土している。金属製品では刀子や鎌、鉄鏃の一部が出土している。中でも刀子は多数出土しており、殆どが貝塚内やその付近に集中する。石製品は、砥石や凹石が出土している。

(4) 護岸状遺構

SX03（Fig.114）伊場大溝南東部の南岸に大型の木材と杭が出土した。その直下に貝塚（SS11）

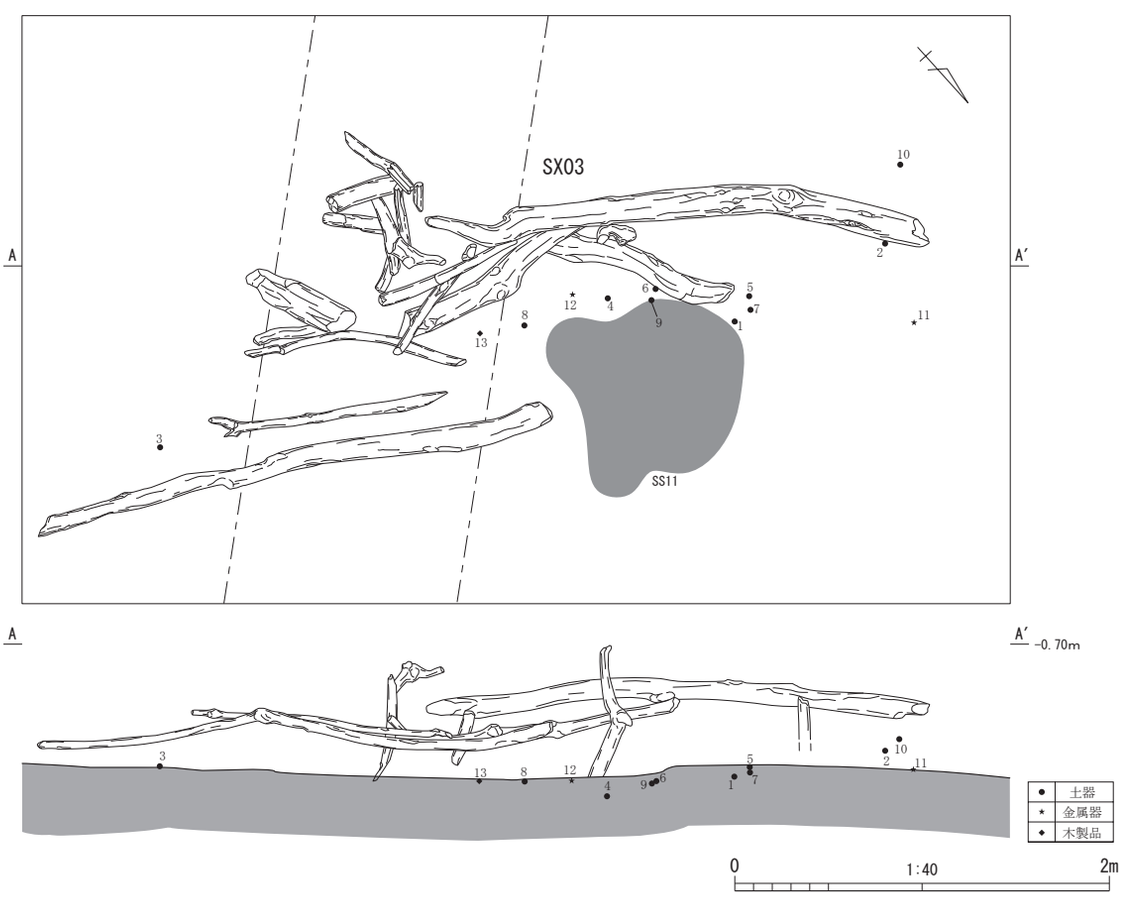


Fig.114　SX03　実測図

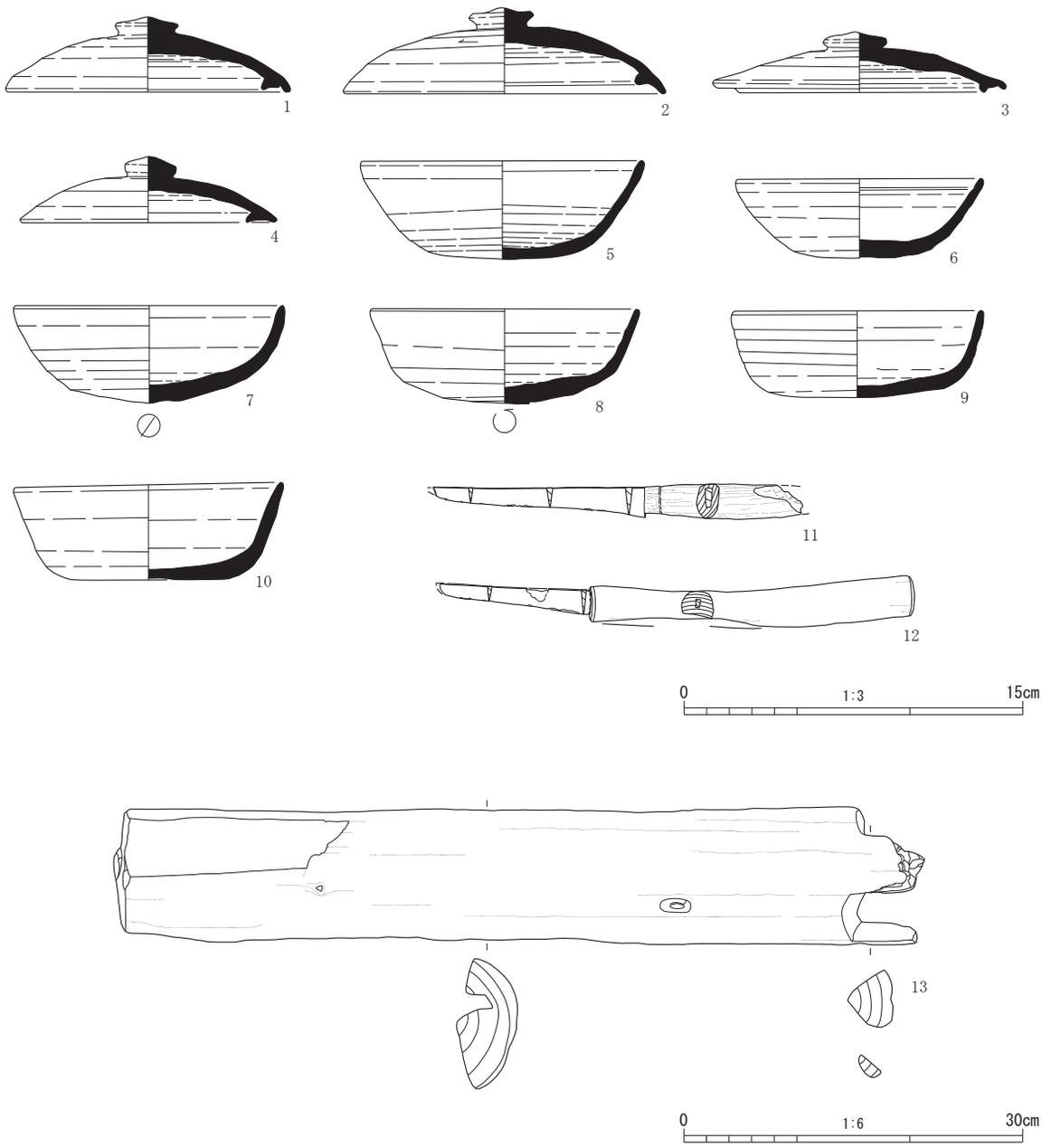


Fig.115　SX03　出土遺物

が検出されている。

横木の殆どは、加工のなされていない芯持ち丸木材で伊場大溝に対して平行に置かれている。杭は横木に対して大溝底部側に打ち込まれており全体の構造をみると土留による護岸施設と考えられる。南側に位置する横木はやや下流へ流されている出土状況を示す。SX03 北側の直下に SS03 が確認されることから護岸状遺構から大溝内へ貝などを投棄していたと考えられる。

1 ～ 10 は SX03 より出土した須恵器である。1 ～ 4 は返り蓋、5 ～ 10 は無台碗である。出土した標高がやや低いこと、遺物の特徴からⅦ層に帰属する遺物となる。7 の底部にはヘラ記号が記されている。11・12 は鉄製の刀子であり、両方ともに柄が残存する。13 は建築材と考えられる木製品で、木製構造物に近い位置で出土していることから二次転用され構造材の一部であった可能性が

高い。

(5) 貝塚

SS03（Fig.116・147 ～ 119）　伊場大溝中央部やや南側の南岸斜面から底部付近に位置する。検出された規模は長軸 8.33 m、短軸 4.44 mである。貝層の厚さは最も厚い部分で 0.86 mであり、多量の貝が廃棄されている。貝の組成はヤマトシジミが多数を占めており、ダンベイキサゴも割合は高い。アサリ・ハマグリも少量確認される。

SS03 では須恵器や土師器、木製品、金属製品、石製品など多数出土している。

14 ～ 48 は須恵器であり摘蓋、有台坏身、無台坏身、無台碗、壺類、甕が出土している。14 ～ 21 は摘蓋である。21 は内面に墨書が記されているが欠損により判読はできなかった。22 ～ 32 は有台坏身である。そのうち 23 は底部が高台より突出した形状である。出土した有台坏身は全体的に底部から口縁部にかけて屈曲する形状であるが、22・29 ～ 32 の屈曲は特に鋭角であり、32 は他と比較して高台が高い。22 は底部に 1 文字墨書が記されているが､欠損により判読はできなかった。33 ～ 35 は無台坏身で口縁部がやや外反する形状である。36 ～ 44 は無台碗である。44 は底部に墨痕が認められる。

45 は長頸壺の口縁部から頸部である。46 は短頸壺で、外面体部に沈線が施されている。47 は広口壺の口縁部である。48 は甕で体部下半が欠損しており、 外面は緻密な並行タタキで調整されている。体部下半は別方向のタタキ調整されており、内面上半は同心円状の当て具痕が確認される。下半はハケ・指ナデが施される。

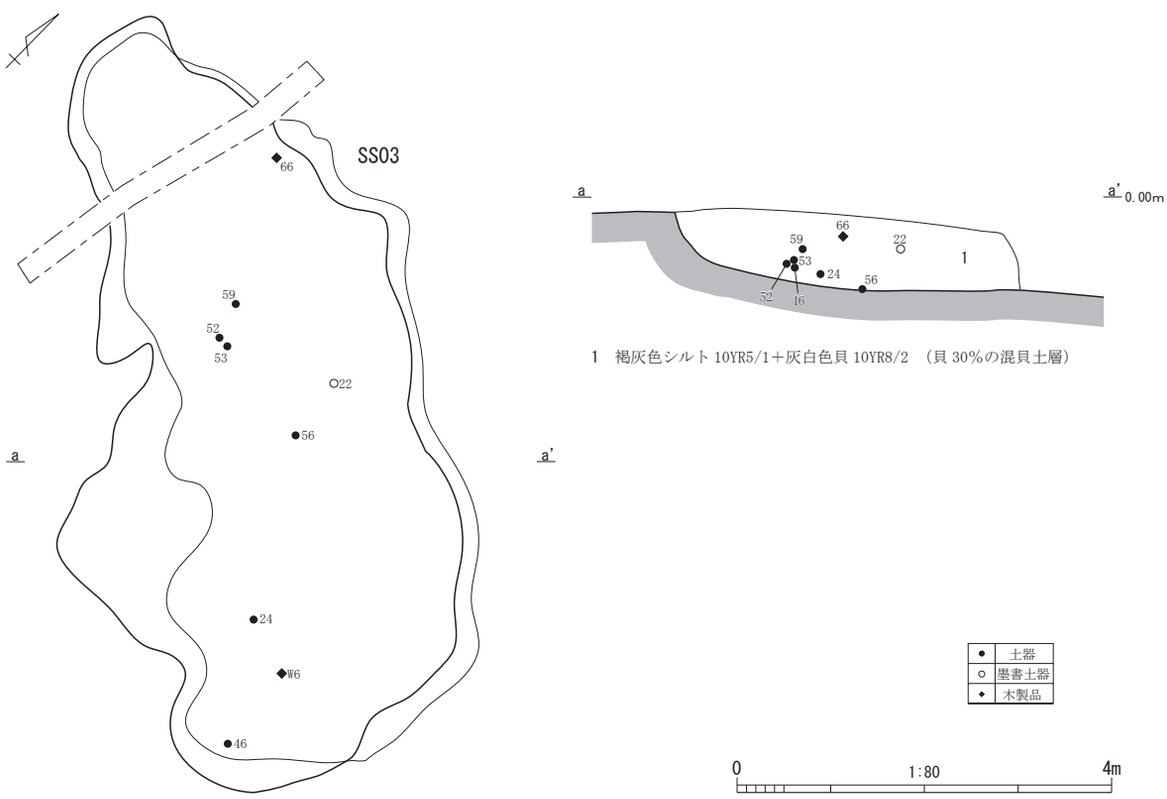


Fig.116　SS03　実測図

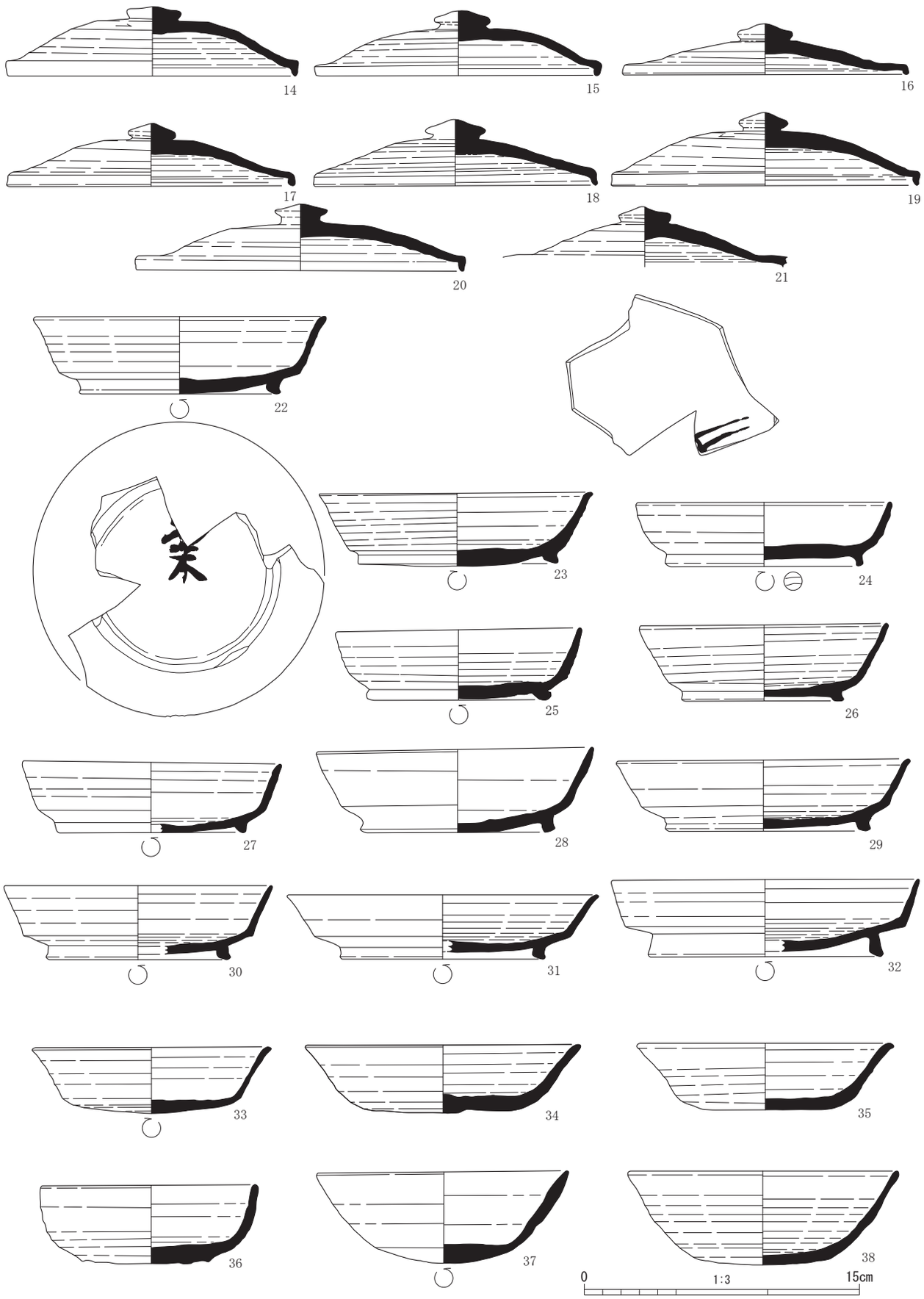


Fig. 117　SS03　出土遺物（1）

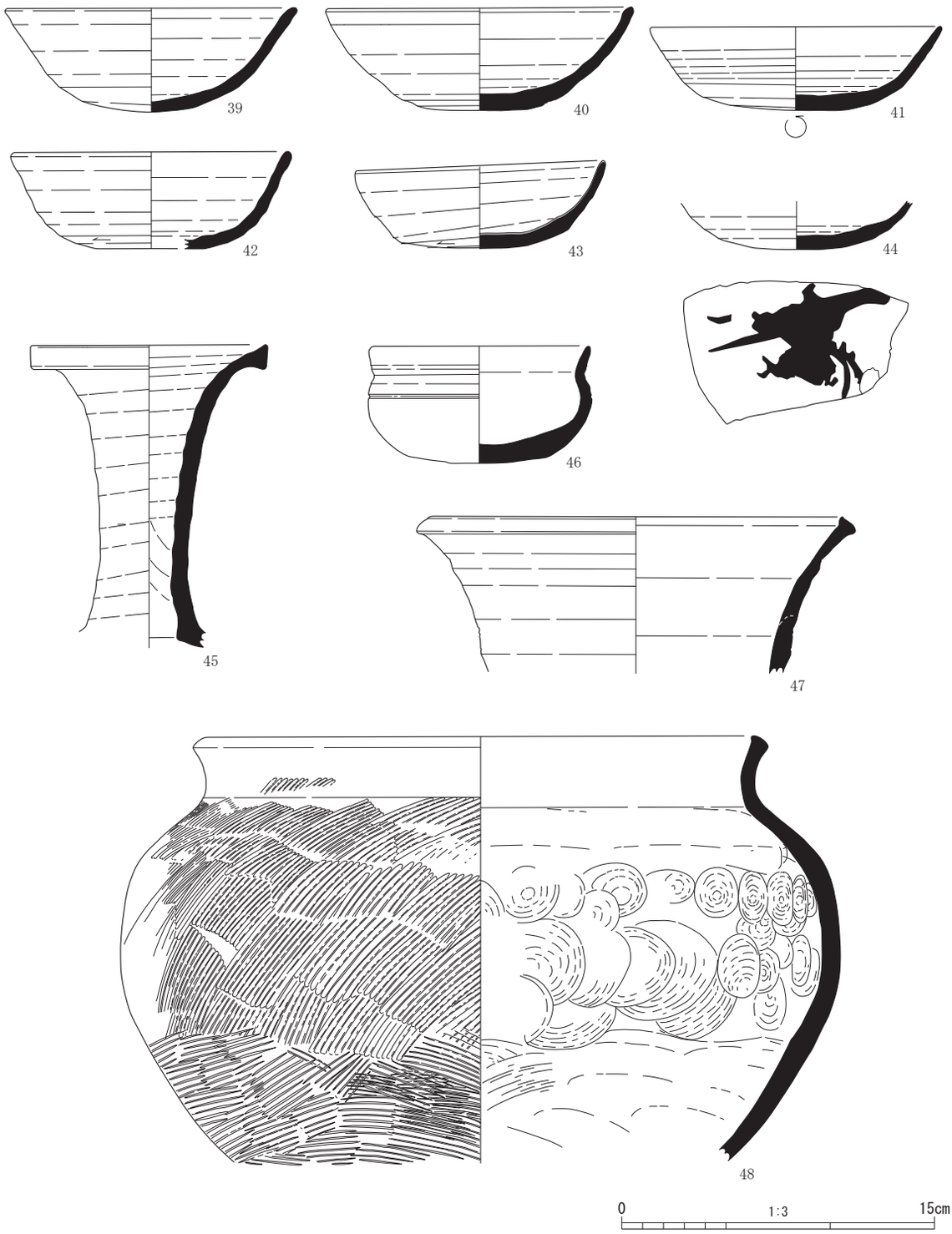


Fig. 118　SS03　出土遺物（2）

49 ～ 63 は土師器である。51・52 は坏で 51 は内面に赤彩されている。52 は外面に丁寧なミガキ調整が施され、内面は暗文が認められる。49・50 は皿類で、49 は内外面ともに赤彩されている。外面は丁寧なミガキ調整が施され、内面は暗文が認められる。50 は台付皿である。外面は摩滅により不明瞭であるが、内面は暗文が認められる。

53・54 は甕で 53 は体部から口縁部で内外面ともにハケメ調整が施される。54 は台付甕の脚部で

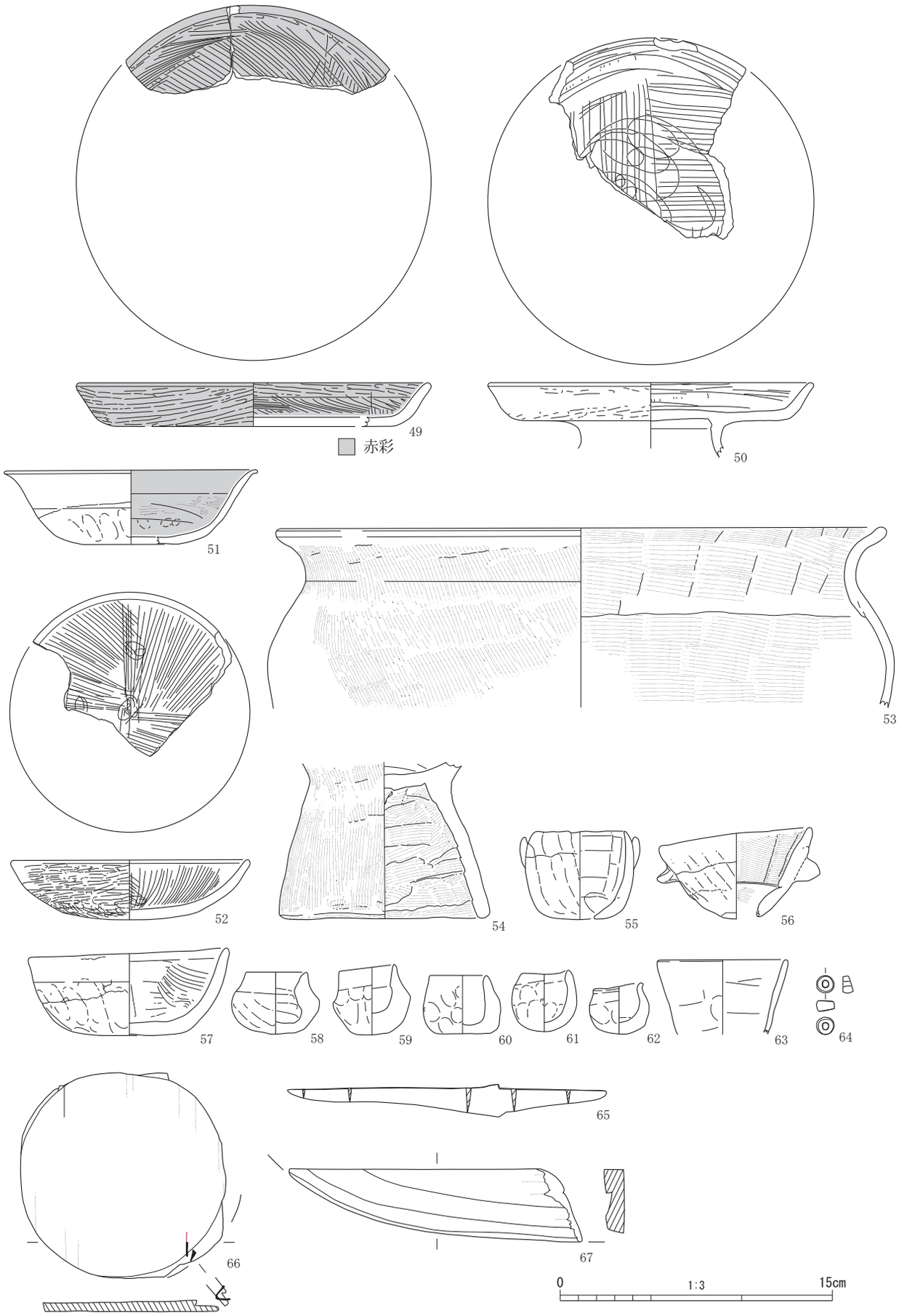


Fig. 119　SS03　出土遺物（3）

ある。55 ～ 62 は小型模倣品である。55・56 は甑の模造品であり、55 はやや碗形の形状である。57 は碗、58 ～ 62 は壺の模造品である。63 は製塩土器である。

石製品は 64 の１点が出土している。64 は滑石製の臼玉である。金属製品は 65 の１点が出土している。65 は刀子であり、使用により刃部が薄くなっている。

木製品は 66・67 の２点が出土している。66・67 ともに曲物の底板であり、67 は破片であるが形状は楕円形と考えられる。

SS08（Fig. 120・121）　伊場大溝中央部よりやや南側の SS03 と SS11 の間で検出されている。検出された規模

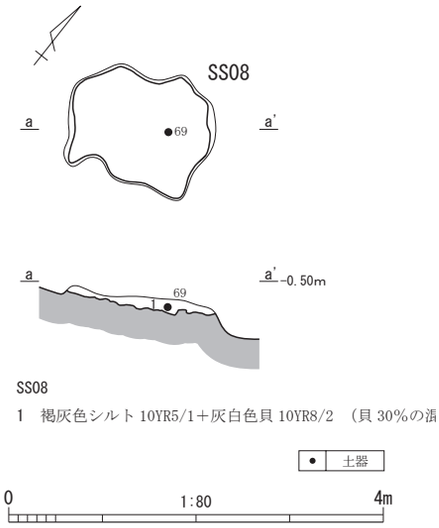


Fig. 120　SS08　実測図

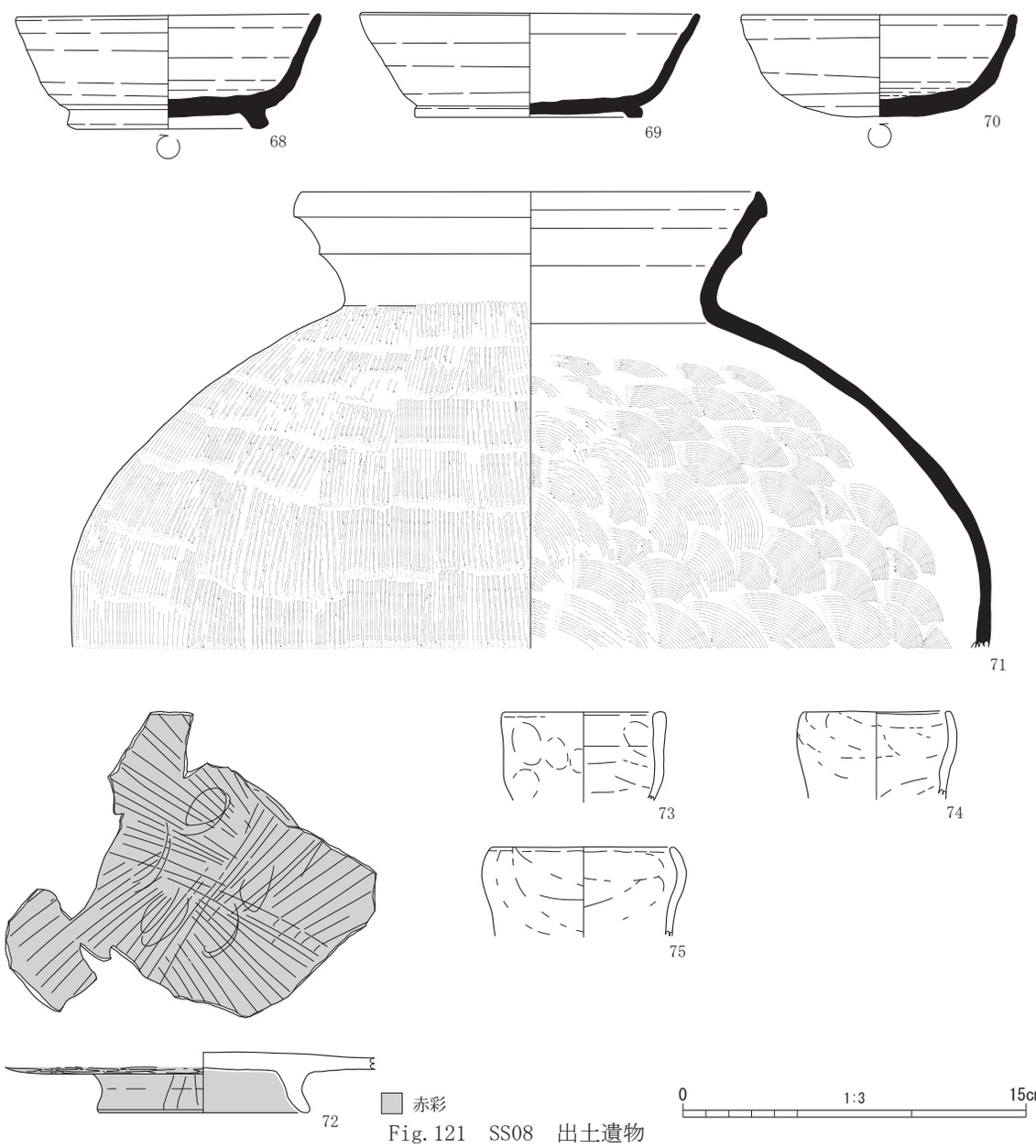


Fig. 121　SS08　出土遺物

は長軸 1.62 m、短軸 1.46 mである。貝層の厚さは最も厚い部分で 0.17 mである。貝の組成はダンベイキサゴが最も多く、次いでヤマトシジミ、ハマグリ、アサリ、クロダカワニナとなる。

遺物は須恵器、土師器が出土している。68 ～ 71 は SS08 より出土した須恵器である。68・69 は有台坏身、70 は無台碗である。71 は甕で体部下半は欠損している。外面は縦方向に緻密な平行タタキで調整されており、内面は青海波状の当て具痕が確認される。

72 ～ 75 は土師器である。72 は台付皿で内外面ともに赤彩が施されている。内面には暗文が確認される。73 ～ 75 は製塩土器で内面はナデ調整が確認される。

SS09（Fig.122･123）伊場大溝北西部の南岸から底部に位置する。検出された規模は長軸 4.64 m、短軸 3.73 mである。貝層の厚さは最も厚い部分で 0.32 mである。Ⅴ層では唯一、大溝の北側から検出された貝塚である。他の貝塚より貝の混入率が高い。

遺物は須恵器、土師器、金属製品、木製品が出土している。須恵器は摘蓋、壺が出土している。76 は摘蓋で摘部はやや扁平な形状である。77 は頸部から口縁部が欠損している壺である。欠損のため器種は不明瞭であるが体部の形状から長頸壺と考えられる。78 ～ 80 土師器である。78 は坏で内外面ともに丁寧なミガキ調整を施されている。79･80 は製塩土器で内面はナデ調整が施されている。

金属製品は 1 点出土している。81 は鉄製の刀子で茎部は欠損している。木製品は 1 点出土している。82 は鍬の未加工材と考えられる。

SS10（Fig.124）伊場大溝南部の南岸に位置する。検出された規模は長軸 0.99 m、短軸 0.64 m であるが調査区外へ延びるため正確な規模は不明である。貝層の厚さは最も厚い部分で 0.14 mである。

SS11（Fig.124･125）伊場大溝南部の南岸に位置する。検出された規模は長軸 1.12 m、短軸 1.09 mである。貝層の厚さは最も厚い部分で 0.19 mである。近接して護岸状遺構と考えられる SX03 が検出されており、SX03 との貝などの投棄に関する関連性が伺える。

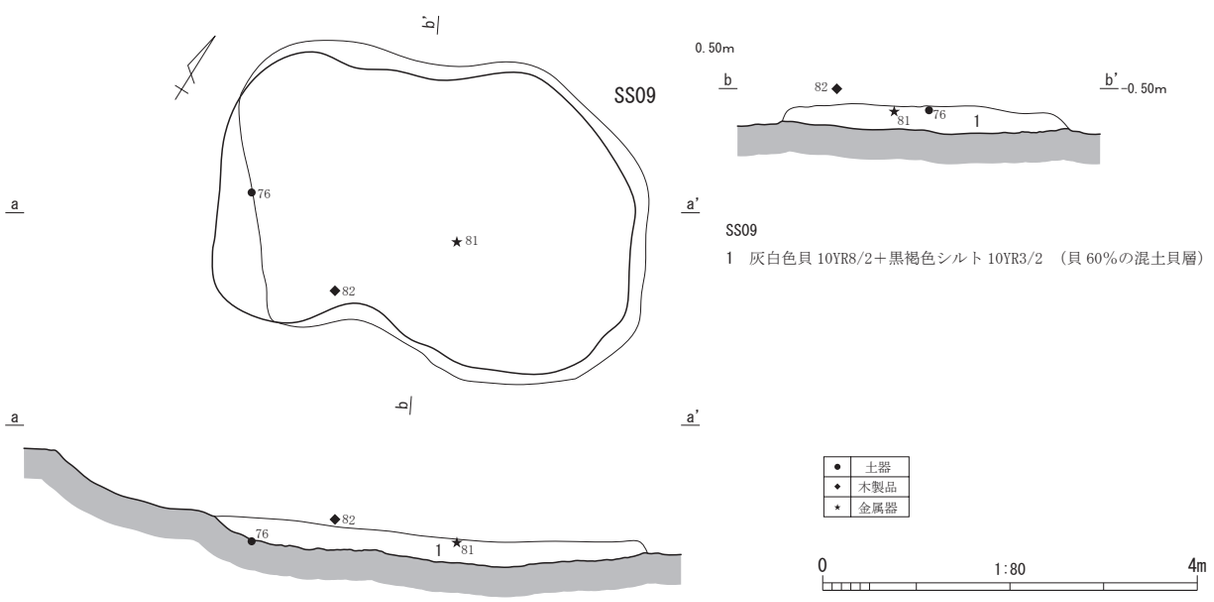


Fig.122　SS09　実測図

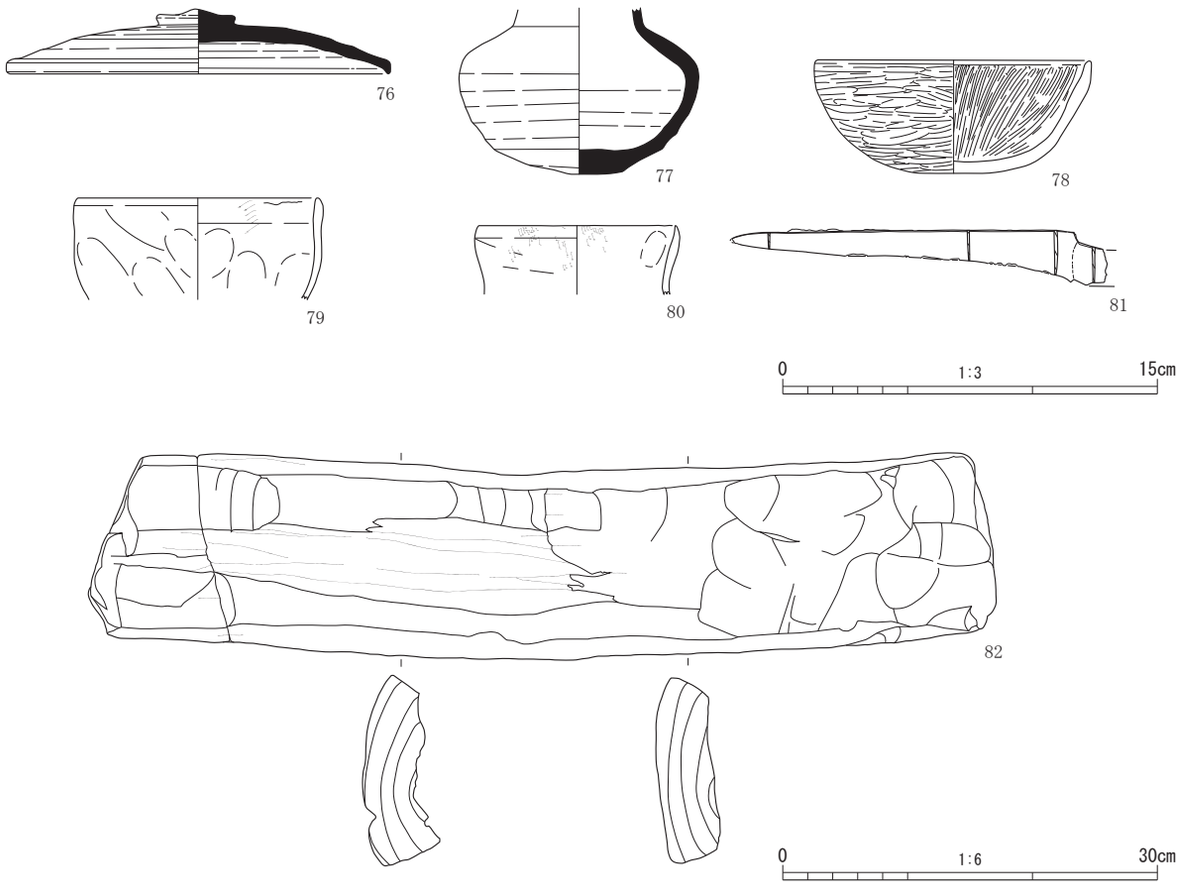
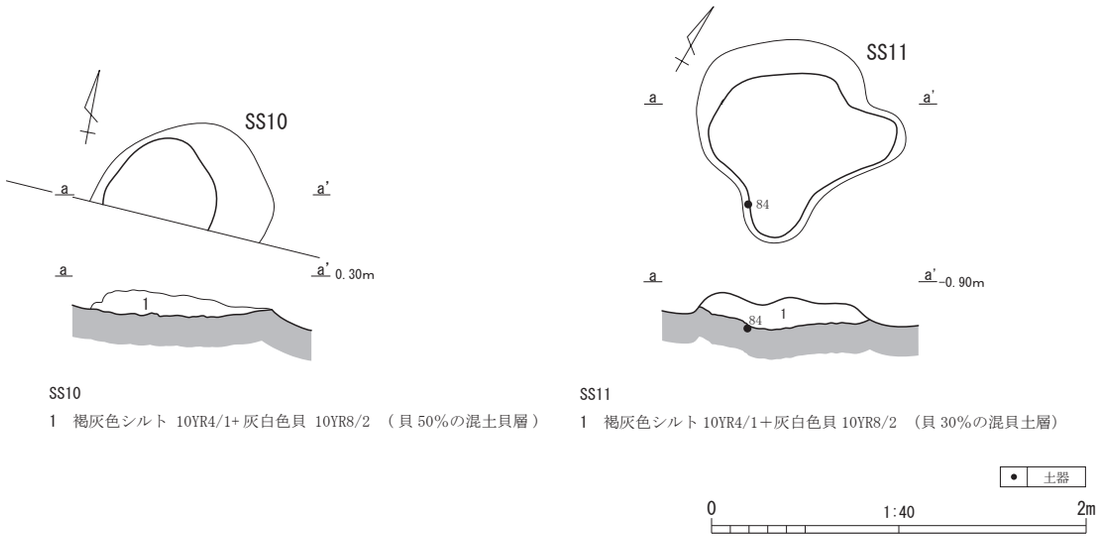


Fig. 123　SS09　出土遺物



SS10
1　褐灰色シルト 10YR4/1+灰白色貝 10YR8/2　（貝 50%の混土貝層）

SS11
1　褐灰色シルト 10YR4/1＋灰白色貝 10YR8/2　（貝 30%の混貝土層）

Fig. 124　SS10・SS11　実測図

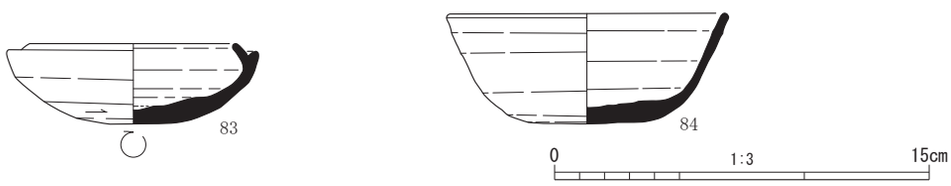


Fig. 125　SS11　出土遺物

SS11 では須恵器が２点出土している。83 は坏身で、特徴からⅦ層の混入品と考えられる。84 は無台碗で、Ⅴ層で出土する無台碗と同じ特徴を示す。

(6) 枝溝

SD313 (Fig.126)　伊場大溝北西部の南岸に合流する枝溝である。Ⅳ層に帰属する SD311 に切られる。また、Ⅷ層に帰属する SD315 と位置関係が重複する。伊場大溝から袋状に張り出す形状をしており、全長は 6.56 ｍである。層厚は 0.32 ｍとやや深度は浅い。位置関係の重複、堆積層など SD315 と類似するため、SD315 上層の一部である可能性があるが、検出状況を踏まえ別遺構とした。遺物は出土していない。

(7) Ⅴ層出土遺物

概要　Ⅴ層全体の出土量は、Ⅶ層と比較するとほぼ変わらない。ただし、Ⅴ層では土器が減少しているのに対して、木製品は増加している。前述したとおり、Ⅴ層では大溝内での流れが減少、停滞していたために木製品が流されにくい環境であったため、出土量が増加したと推定される。土器では、須恵器、土師器が出土しており、須恵器は土器全体の６割近くを占める。木製品は、祭祀具、農具が多数出土しており、木簡は８点出土している。また、絵馬が１点出土している。

なお、BI54・BH55 ラインで遺物出土位置を分け、伊場大溝の北西部、南東部について遺物出土

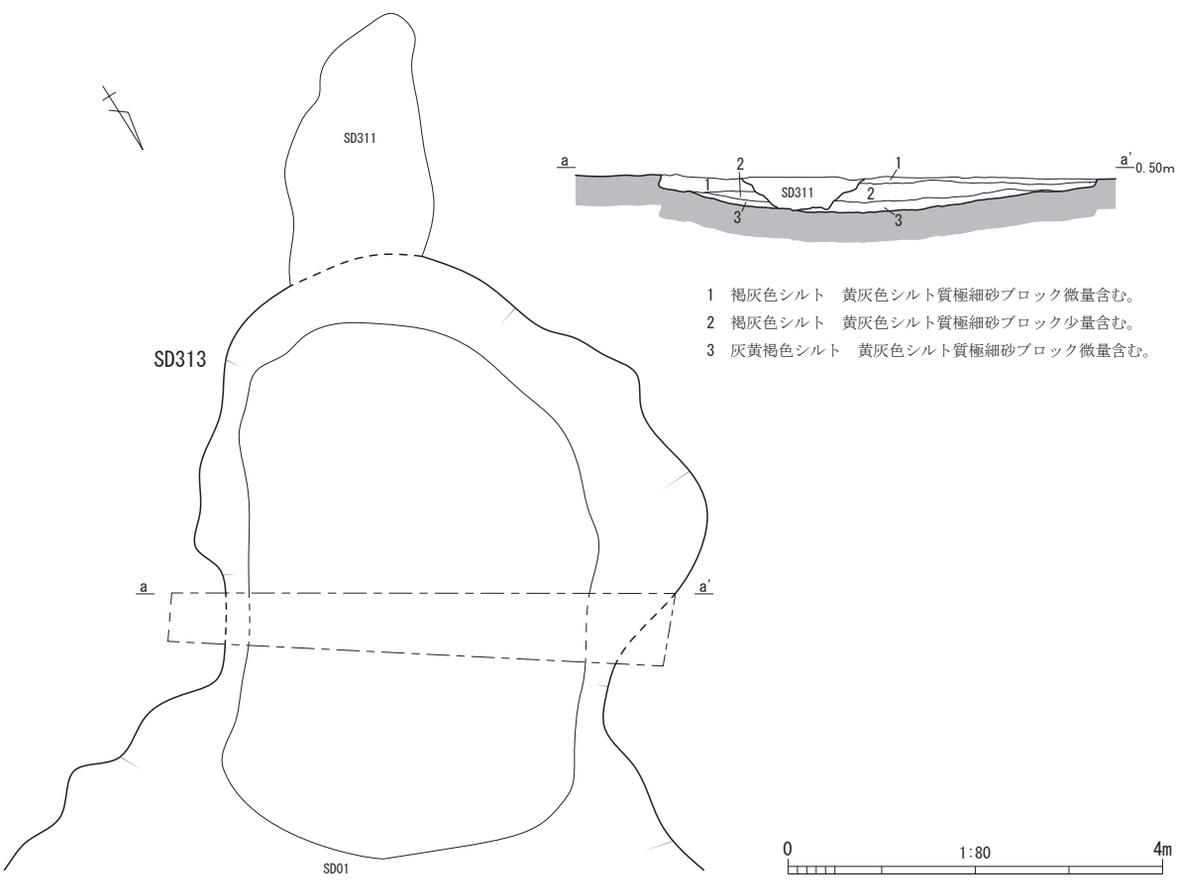


Fig.126　SD313　実測図

に差異がみられるか検討を行ったため、図版も北西部・南東部と分けて示した。

①Ⅴ層北西部（Fig.127 ～ 146）

須恵器（Fig.127 ～ 130）　85 ～ 148 はⅤ層北西部より出土した須恵器である。器種は、坏蓋や坏身が主体的であるが高坏や壺類、瑳、甕などが出土している。そのうち、墨書土器が１点出土している。

85 は無台坏身で側面に墨書で「吉」と記されている。86 ～ 107 には坏蓋と坏身を示した。坏蓋は摘蓋、坏身は有台坏身が主体的である。86 ～ 89 の坏蓋、坏身は７世紀代の特徴を示すことからⅦ層からの混入品と考えられる。うち 88・89 の坏身底部にはヘラ記号が記されている。90 ～ 96 は摘蓋である。91 のみ摘部が宝珠型ではなく扁平で、口縁の折返し部も弱い。97 ～ 107 は有台坏身である。97 ～ 100 は底部が高台より突出した形状であり、101 ～ 107 は底部が突出しない形状の有台坏身である。106 のみ体部が鋭角に屈曲する形状である。107 は有台坏身の底部外面を使用した転用硯である。外面底部には全面に墨痕が確認される。体部全周に渡って意図的に丁寧に打ち欠き整形がなされている。ある程度長期に渡って硯として使用されていた可能性がある。

108 ～ 119 は無台碗である。108 ～ 113 は底部が丸みを帯びている。114 ～ 119 は底部が扁平で体部がやや屈曲して立ち上がる形状である。120 は皿である。底部が欠損しているが、口縁部の先端が外反する。121 ～ 128 は高坏である。121・122 は形状からⅦ層からの混入品と考えられる。129 ～ 134 は壺蓋である。129 は摘部が扁平の形状である。134 は短頸壺の蓋とみられ摘部が宝珠型で口縁部が外反する形状である。

135 ～ 141 は壺類である。壺類では、広口壺、長頸壺、短頸壺が確認される。135・136 は広口壺で肩部はなだらかな形状である。135 の底部にヘラ記号が記されている。137 ～ 139 は長頸壺である。137 は体部から口縁部、138 は体部、139 は体部下半が残存している。139 は有台の長頸壺と考えられる。140・141 は短頸壺である。140 は小型で頸部の括れが弱く肩部は浅い凹みが全周する。

142 は平瓶である。外面体部上半に３条の沈線が施されている。143 ～ 147 は瑳である。143 と 144 は有台瑳ではあるが底部が高台より大きく突出した形状である。145・146 は肩部が屈曲する形状である。148 は甕の肩部から口縁部にかけて残存している。外面体部はタタキ調整が施されている。

土師器（Fig.131 ～ 134）　149 ～ 184 はⅤ層北西部より出土した土師器を示した。坏や皿、壺、甕、甑、手捏ねの碗や鉢、製塩土器が出土している。また、人面墨画と考えられる墨画が描かれている碗が確認される。

149・150 は坏で、ともに内面に暗文が確認される。150 には外面にミガキ調整が施されており、内外面ともに赤彩が確認される。151 ～ 156 は内外面ともに赤彩が施されている皿である。154 ～ 156 は内面に丁寧なミガキ調整がなされており、内面に暗文が施されている。154・155 の暗文は内面を中心に放射状に広がり、中心や外側に円形を一筆書きで連続して描かれている。156 は縦方向と斜線の暗文が描かれている。

157・158 は外反口縁壺である。158 は頸部がやや垂直に立ち上がり外反する。159・160 は台付甕である。161 ～ 164 は甕である。161 は長胴甕と考えられ、形状の特徴からⅦ層の混入品とみられる。